



教会学校教案誌

2011.1.2.3月号

No.40

日本キリスト改革派教会
中部中会日曜学校委員会

2010年度カリキュラム（2011年1～3月分）

—救済史に基づく二年サイクルカリキュラムの一年目—

月 日 教会暦・行事	主 題	聖 書 箇 所	暗 唱 聖 句
	単 元 の 目 標		
1月2日 新年	ヨハネと主イエスの受洗	マタイ3:13－17	マタイ3:17
	わたしたちの友となるために来られ、洗礼を受けた主イエスをほめたたえよう		
1月9日	荒れ野の主イエス	マタイ4:1－11	ヘブライ2:18
	わたしたちのために誘惑を受け、しかも勝利された主イエスの恵みを知ろう		
1月16日	漁師を弟子にする	マタイ4:18－22	マタイ4:19
	主イエスに召されて弟子とされたわたしたちは、主イエスに従っていこう		
1月23日	神の国の幸いの説教	マタイ5:3－12	マタイ5:3
	神の国（天の国）に生きる者とされたことを喜び、主イエスと共に歩もう		
1月30日	律法の完成者キリスト	マタイ5:17－20	マタイ5:17
	律法を完成されたキリストの義によって神の国に入れられることを喜ぼう		
2月6日 (11信教の自由)	地の塩・世の光	マタイ5:13－16	マタイ5:14a
	この世界に神の国を映し出すために、地の塩・世の光として生きていこう		
2月13日	完全な人イエス	マタイ5:43－48	創世記17:1b
	神の完全な愛をいただいて、罪を赦し、愛に生きることができるとを喜ぼう		
2月20日	天に富を積む	マタイ6:19－21, 24	マタイ5:3
	わたしたちの心はどこにあるのだろうか。心をまっすぐに神さまに向けよう		
2月27日	神の国と神の義	マタイ6:25－34	マタイ6:33
	神を第一として、神に信頼し、思い悩まず、神の国の豊かさに生きていこう		
3月6日 (9- レント)	神の国の法則	マタイ7:7－12	マタイ7:12a
	神によって憐れまれて、憐れむ者として生かされる。その喜びを分かちあおう		
3月13日 レント	権威ある者の教え	マタイ7:24－29	ヤコブ1:22
	権威あるお方である主イエスに聴き従い、岩を土台とする人生を生きよう		
3月20日 レント	病人をいやすメシア	マタイ8:5－13	マタイ8:8b
	神の国のみわがが主イエスによって始められた。人を生かすメシアを仰ごう		
3月27日 レント	嵐をしずめるメシア	マタイ8:23－27	マタイ8:26
	神の国を映し出して、自然界をも支配しておられる主イエスをあがめよう		

も く じ

2011年1・2・3月カリキュラム

まえがき	片岡正雄	4
巻頭説教	安田直人	5
日曜学校・教会学校訪問		
綱島教会日曜学校の紹介	川杉安美	9
寄稿		
清和女子中学・高等学校で働いて	後登雅博	13
信仰の証	宮原 翼	15
副読本のご案内		16
自由募金のお願い		17

聖書研究・説教展開例・分級展開例

1月 2日	20
1月 9日	27
1月16日	34
1月23日	41
1月30日	48
2月 6日	55
2月13日	62
2月20日	69
2月27日	76
3月 6日	83
3月13日	90
3月20日	97
3月27日	104

2011年4・5・6月カリキュラム	111
2011年度年間カリキュラム	112
執筆者よりひとこと・あとがき	114

まえがき

片岡正雄（坂戸教会牧師）

思えば、私が洗礼を受けたのは高校1年生になり立てのときでした。当時は教会学校の生徒たちがとても多く、それに対して若手の教師が不足状態でした。こんな状態でしたので、洗礼を受けた後、すぐに教会学校の方からお声がかかり、「最初は見習い、補助でよいからCSのお手伝いをしてください」と依頼されたのでした。入信間もない者ですから、クリスチャンになったら、すぐに訓練も兼ねて子供たちを担当しなければならぬものではないかと思いこんでいました。まだ、キリスト教のイロハもわからないものが、子供たちを担当するのですから、毎週緊張の連続でした。しかし、「強いられた恩寵」とでも言いましょうか、今振り返ってみると、人に教えると言うことは、先ず自分自身が学ばなくてはなりませんので、聖書や教理という信仰の基礎を自ら身につけるためにはとてもよかったと思います。

自分が牧師になってから、やはり高校1年生で洗礼を受けたある姉妹に、CSの担当をお願いしたことがありました。最初は、渋っていた彼女でしたが、とにかく教師不足を理由に、しいてお願いしたところ、やっとのことで引き受けてくださいました。心配しておりましたが、やがてずっと後になってから、その姉妹は「あのときの経験は自分の信仰生活にとって、とても有益なものになりました」と言ってくださったことが、何よりも嬉しかった出来事でした。

先日、カンボジアのベトナム難民の人たちが集う長老教会を訪れた時のことでした。何と教会のメンバーのほとんどが少年少女、青年たちでした。外国の宣教師の下でベトナム、カンボジアの青年たちが訓練を受け、さらに年下の少年少女たちを導いていたのでした。そして、さ

らに驚くべきことに、教えられた13～15歳くらいの子供たちがさらに年下の子供たちを堂々と、しかも自信を持って指導していた姿に感激いたしました。子供たちにとって、年齢も近いお兄さん、お姉さんたちが聖書を教えてくれ、賛美指導をしてくれたり、さらには一緒に遊んでくれることは何と幸いなことでしょうか。

牧師、宣教師たちが青年を指導、訓練し、次のその青年たちが少年少女たちを教え導き、さらにはその少年少女たちが子供、幼児たちを配慮するという姿を現地で実際に見てきました。福音を教える人、教わる人という垣根は無く、教えられた人は今度は、次の世代に、また隣人にそれを伝えて行く人とされてゆくのです。

まさにこのような中に実践的な教育があるのではないのでしょうか。真理は伝えられ続けて行くときにこそ輝きが増してくるのではないのでしょうか。

実は、初代教会における福音の進展、また教会の成長と発展は、このような教育的伝道の中に見出されるのではないのでしょうか。

福音理解とは、人に明確に、しかも正確に伝えることによって、より確かに自分のものとなってゆくのでしょうか。

今の教育は、教える人、教えられる人という二者の棲み分けしかないのではないのでしょうか。教える人も、それを受け取る人も、さらにそれを広く多くの人たちに伝え続けて行く使命を持って臨んだとしたら素晴らしいのではないのでしょうか。いや、むしろイエス・キリストの福音そのものが、喜ばしいおとずれそのものなので、伝えずにはおれないのではないのでしょうか。

「乳飲み子のように」

～ルカによる福音書18章15～17節による説教～

安田直人（大屋伝道所宣教教師）

イエスに触れていただくために、人々は乳飲み子までも連れて来た。弟子たちは、これを見て叱った。しかし、イエスは乳飲み子たちを呼び寄せて言われた。「子供たちをわたしのところに来させなさい。妨げてはならない。神の国はこのような者たちのものである。はっきり言うておく。子供のように神の国を受け入れる人でなければ、決してそこに入ることはできない。」
(ルカによる福音書 18章15～17節)

1. はじめに

この出来事の前には、イエス様がわたしたちの祈りを整えるためになさった、ふたつのたとえ話が記されています。ひとつめのたとえ話には、神を畏れず人を人とも思わない裁判官と、自分では解決のつかないやっかいな問題を抱えてしまったやもめが登場します。やもめは裁きを求めてひたすら毎日お願いをし、裁判官は「うるさくてかなわん、裁判をしてやろう」と、重い腰を上げるのです。不正な裁判官ですら、ひたすらに求めるやもめの声を聴くのですから、まして愛に満ちた父なる神様が、ご自分の子どもたちのひたすらに求める声を聴かれないはずがありません。気を落とさずに絶えず祈ることが大事です。

しかしイエス様は、そのように教えてくださるのと同時に、また心配もしてくださいました。わたしたちの祈りが、「父にひたすらに求める声」を失って、「自分は正しい人間だとうぬばれて人を見下す」声になってしまうことがあるからです。それでふたつめのたとえ話では、神殿で祈っている、ファリサイ派の人と徴税人が登場しました。

敬虔な生活を営み、誰もが認める正しさを持ち、聖書の知識も豊富なファリサイ派の人が、義と認められずに家に帰り、同胞から盗みを働

く売国奴の徴税人が、義と認められて家に帰ります。ファリサイ派の人の祈りの特徴は、やもめの祈りと比べると良く分かります。やもめは、ただ求めるしかありませんでしたが、ファリサイ派の人は、求める必要もありませんでした。彼の中には、既に自分の正しさについての結論があり、申し述べればそれで充分だったからです。ファリサイ派の人の祈りに対して、徴税人の祈りの特徴は、「胸を打つ」ことに表れています。このわたしの中に正しさがなくイエス様のもとにだけあること、そしてイエス様を十字架に殺したのが自分であることを知って嘆き悲しむこと、それを表すのが「胸を打つ」仕草であり、そこには赦しに触れる喜びがあります。

わたしたちの祈り＝礼拝する生活は、このふたつのたとえ話の終わりでイエス様が「だれでも高ぶる者は低くされ、へりくだる者は高められる」(14節)とお語りくださったように、低くなり、へりくだることから始まります。それでは、低くなること、へりくだることとは、どういうことなのでしょう。

2. 子どもと乳飲み子

15節から17節の背景は、イエス様のもとに弟子たちがおり、そこに多くの人々がやってくるというもので、イエス様の許で繰り返して起

こっていたことです。ただしここでは、子どもたちが登場します。もちろん子どもを招いてくださるイエス様はわたしたちに親しいのですが、マタイ・マルコ・ルカを並べて読むと、ルカ福音書がここで伝えているイエス様のお姿は独特なものです。マタイにもマルコにも「子ども」だけが登場しますが、ルカには「乳飲み子」も登場しているからです。

「乳飲み子」も「子ども」も同じようなものではないかと考えてしまいがちですが、これは元の言葉ではまったく意味が違います。「子ども」とは、ほんの小さな子ども、わたしたちのことで考えると、小学生低学年くらいまでの存在を指します。そして「乳飲み子」とは、お母さんのお腹にいてまだ生まれていない胎児から、もうミルクを卒業した5歳くらいまでの存在を指します。

3. 弟子たちの思いとイエス様

さて、弟子たちは、イエス様に教えていただき訓練を受けながら、イエス様と共に旅を続けています。イエス様に直接教えていただくのですから、どれほどの緊張があったことでしょうか。イエス様とファリサイ派の人々や律法学者との対立は日々激しくなっています。ローマの力も迫っています。イエス様ご自身も、エルサレムすなわち十字架に向けて、歩みを進めておられます。弟子たちは、とても大切な時を過ごしており、神様のご計画の中を歩んでいる自覚があって、緊張した雰囲気の中で日々を生活しているのです。

そんなときに果たして、子どもなどの出る幕があるのでしょうか。イエス様はエルサレムへと進んで行かれ、弟子たちの頭の中の考えでは、ローマの支配を打ち破り、神様の新しいご支配が開始されるという、大事業を成し遂げられるのです。子どもなど、足手まといではないでしょうか。ましてここで「乳飲み子」とは、走り回っていたずらをするけれども、それでもなお大人

が言ったことを何とか理解して聞き分けることができる子どもだけではありません。生まれる前の胎児。大きなお腹を抱えたお母さんは、何もできません。生まれたばかりでミルクを飲んでいる赤ちゃん。これは付きっきりで飲ませること、おしっこやうんちの始末、寝かせること、何もかも世話をしなければなりません。歩き出し話し出してから5歳くらいまでの乳幼児。これは絶えずまわり付いてくるのですから、一緒にいてやらなければなりません。

ところが人々が、子どもどころか「乳飲み子」を連れて来たのだというのです。お腹の大きなお母さんから、ミルクを飲んでいる赤ちゃんから、お父さんお母さんにまわり付いている子どもたちから、走り回る子どもまで。それは、弟子たちにとっては、本当に腹立たしい状況です。子ども、まして乳飲み子などを連れては、大きな仕事はできませんから。しかも人々が、そういう乳飲み子や子どもたちを連れてくる理由が、15節を見ると、「触れていただくため」であったと記されています。イエス様の教えが分かるわけではない。けれども、少し頭に手を置いていただくだけでも、何かご利益があるのではないか。そう考えた人々が連れて来るのです。それは、弟子たちにとっては、更に腹立たしい状況です。子ども、まして泣き喚く乳飲み子などがいたのでは、自分たちがイエス様の教えに耳を澄ますことはできないのですから。

弟子たちがこの時に抱いた気持ちは、当然のように思えます。弟子たちは、イエス様と共に働きたい、イエス様のお言葉の隅々まで聴き取りたい、と願っていました。お母さんのお腹の中にいる子どもも、ミルクを飲んでいる赤ちゃんも、走り回る子どもたちも、イエス様と共に働くことなどできません。そもそもイエス様の教えを理解することもできません。何のためにこの人々は、こんな小さな子どもを連れてくるのか。邪魔なだけではないか。少なくとも、静かにさせておくべきではないか。それで弟子た

ちは、15節の最後にあるとおり、人々を叱り付けたのです。

けれどもイエス様は、弟子たちではなく、人々の肩をもたれました。わたしに触れるだけでも、というその考えで充分であると言われました。叱り付けた弟子たちをかえって、「妨げてはならない」と叱り飛ばされたのです。そして心から喜んで、人々を、そして人々が連れてきた胎児を、赤ちゃんを、小さな子どもたちを、呼び寄せられました。

4. 乳飲み子のように

イエス様がここで指し示しておられるのは、低くなること、へりくだることとは、どういうことなのか、という「実際」です。そのためにイエス様は、今、非常に際立つ仕方で、胎児から走り回る小さな子どもたちと共におられるのです。

やもめの祈りは、ただ求めるものでした。ファリサイ派の人の祈りは、求める必要がなく、自分の正しさを主張するものでした。徴税人は胸を打ちました。それでは、小さな子どもや赤ちゃんとは、どのような存在でしょうか。走り回るほどの子どもであれば、大人に何か言うことができるかもしれません。けれども何かを主張することなどできません。小さな子どもであればなおさらのこと、泣きわめいて求めることができるだけです。いや、胎児であれば、求めることさえもできません。お母さんのお腹の中の赤ちゃんは、全存在をまったく委ねるより他に、お母さんをまったく受け入れてしまうより他に、生きてゆく方法がないのです。

イエス様は、こう仰っておられます。「神の国はこのような者たちのものである。はっきり言うておく。子どものように神の国を受け入れる人でなければ、決してそこに入ることはできない」。神の国すなわち、神様の愛の御支配の中に生きること。それは独り子を遣わすほどにわたしたちを愛してくださった父なる神様の愛

に身を委ねてしまうことです。十字架に死んでくださったイエス様の愛を受け入れてしまうことなのです。子どものように、いや、赤ちゃんのように、いや、胎児のように。イエス様が「はっきり言うておく＝アーメン、わたしはあなたがたに言うておく」と言い切っておられるのですから、これこそが神様の御前でのご真実なのです。

わたしたちの祈り＝礼拝生活が、子どもたちをイエス様にもとに連れてきた人々のようにではなく、まるで弟子たちのようであることに心が痛みます。この子どもにイエス様が触れてくださったならと考えることができず、自分こそがイエス様と共に働いてきたのだし、今もそうだと考えてしまうのです。そこから生まれる心は、子どもなど邪魔だ、せめて静かにしてもらいたい、というものです。高ぶる弟子、それがわたしたちの姿です。もしわたしたちがイエス様の御声を聴き取り、本当に低くなり、へりくだろうと願うなら、「乳飲み子までも」という心を自分の内に育てなければなりません。それは子どもと共に、乳飲み子と共に、胎児と共に礼拝をする生活を造るということです。そうして、乳飲み子や子どもを招いてくださるイエス様の御顔を仰ぐということです。

幼児洗礼を重んじ、契約の子どもという考え方に基づいて、子どもと共に神様の御前に出ることを当然のこととしてきた改革派教会でも、かつて根強くあったのは、いかに子どもを公同礼拝の間静かにさせるかという「実際」でした。そこから子どもは日曜学校の礼拝で充分なのであり、日曜学校の礼拝は公同礼拝の備えにすぎず、日曜学校の礼拝に出席した子どもたちは公同礼拝の間は外で遊んでいればいいのだ、という考えも生まれてしまっていたのです。わたしは、そのようにして育ちました。

教会から子どもたちの姿が消え始めて長い時間が経ち、ようやくわたしたちの耳に聞こえ始めているのです。「子どもたちをわたしのところに来させなさい。妨げてはならない」という

イエス様の御声が。ようやくわたしたちに分かり始めたのです。わたしたちが妨げていたのだということが。初めは中部中会の一人の教師、改革派教会に加入なさった一人の教師の熱心が始まりでした。日曜学校は伝道の間・真の礼拝の間であり、教会はイエス様と共に公同礼拝に子どもを招かなければならない。そうして日曜学校の教案誌が作られ始めました。その歩みが積み重なって、今やリジョイスに、大人のための聖書日課だけでなく、子どものための聖書日課が載るようになったのです。皆さん、読んでみられたら良いと思います。元々日曜学校の教案誌に載せられていた、子どものための聖書日課、いのちのパン。これは短い言葉なのに、時として大人のための聖書日課をはるかに凌ぐ優れた理解を示しており、また子どもに届く柔らかい愛に満ちた香りが漂ってもあります。ご自分の許にきた子どもたちに、イエス様はどのように語りかけられたのだろうか、そのことが思われて心が震えます。

イエス様は、子どもを招かれました。そして子どもと共に過ごすことを喜びとなさいました。それは子どもたちがイエス様のところに来たというよりも、イエス様が子どものところに出かけられたということではないか、と思われもするのです。子どもを愛し、とりわけ胎児から5歳児ほどの小さな乳飲み子を愛されたイエス様。身を委ねずには生きていけず、まった

く受け入れるより他ないその存在に、イエス様はご自身を重ね合わせておられたのではないのでしょうか。それは、イエス様もまた、神様の独り子として、まるで小さな子どものように、赤ちゃんのように、いや、まるでお母さんのお腹の中にいる胎児のように、父なる神様にその身を委ねられ、父の御心を受け入れて歩まれたことを、わたしたちは知っているからです。イエス様がそのようなお方だからこそ、小さな子どもたち同士がすぐに一緒に遊び始めるように、子どもたちも喜んでイエス様のもとに近寄ってきたのかもしれない。

わたしたちの心に、この身をまったく委ねてしまい、御心をまったく受け入れてしまう神様への信頼を回復するために、低くへりくだるために、どうしたらよいのでしょうか。日曜学校の礼拝も公同礼拝も、赤ちゃんの泣き声が大声で響く礼拝、そしてそのことを大人が心から喜ぶことのできる礼拝へと、神様に造り変えていただくより他に方法がありません。わたしたちが招き、いやわたしたちが出かけて行って、わたしたちの中に乳飲み子のように、委ね受け入れる心を回復していただくではありませんか。わたしたちは、乳飲み子のもとでのみ、乳飲み子と共におられるイエス様を見出すことができます。

※大屋伝道所の公同礼拝（2009年7月12日）で語られた説教原稿を修正したものです。



綱島教会日曜学校の紹介

川杉安美（綱島教会牧師）

1. はじめに

東京の渋谷と横浜を結ぶ東急東横線の横浜よりに綱島駅があります。綱島駅から徒歩7、8分で教会に着きます。1975年の開拓から35年になり、現住陪餐会員は66名、礼拝は70名前後で守っています。少子化が言われるようになっていますが、綱島教会のある横浜市港北区は人口が増え続け、子どもたちも増えています。近くの小学校も校舎が足りなくなり、急きょ校庭にプレハブで教室を増築したり、中学校を新設するという計画もあります。また、周辺にはミッションスクールが幾つかあり、その子どもたちが学校から紹介されて、日曜学校に通ってきます。そのような良い環境をいかして、日曜学校を充実させようと励んでいます。

ミッションスクールが多いこともあり、一番多いのが中学生で、中高科クラスは15名前後です。全体では25名前後で行われています。教師は、牧師を含めて10名です。そこに、大学生の教師候補が2名お手伝いをしています。

2. 礼拝と分級

(1) 礼拝

礼拝は9時から始まりますが、その前に教師たちで短く祈禱会をします。そして9時から9時30分位までが礼拝です。牧師が隔週で説教しますが、日曜学校の教師もその間に順番に奨励を担当します。教師によって個性があり、視覚教材を作って話をする者、フランネルグラフを用いながら話しをする者等いろいろです。教案は、基本的には『成長』（CS成長センター）を用いています。通常は、礼拝は幼稚科から中高科まで一緒に守っていますが、毎月一回、幼

稚科・小学科と中高科とを分けて礼拝をする日を作っています。そのときは、前半は、幼稚科と小学科が礼拝室で礼拝をしている間に、中高科が分級を行い、後半で入れ替わります。中高科礼拝の説教は牧師が行い、司会や奏楽は大学生に担当してもらっていますが、奏楽を中学生に頼むこともあります。



礼拝風景

また、毎月最後の主の日は、その月のお誕生日の子を紹介し、歌とプレゼントでお祝いします。礼拝のあと分級に移りますが、月に一回、分級をしないで、幼稚科・小学科の皆でゲームをしながら交わる時を持っています。



誕生会
みんなでゲームをします

(2) 分級

礼拝後、10時過ぎくらいまでが分級の時間になります。幼稚科、小学校下級科、小学校上級科、中高科と分かれます。それぞれのクラスに2名の教師がつきます。礼拝の聖書箇所についての『ワークブック』を中心に学びをします。

暗証聖句や使徒信条、十戒を毎週行ったり、生徒の近況報告をしてもらい、祈りの課題を覚えたり、それぞれのクラスが工夫しながら進めています。幼稚科は、工作をしたり、お話に合わせた作業をすることが中心になります。

中高科は、ギターの伴奏によるゴスペルフォークなどを賛美してから学びをしますが、『ワークブック』の正解、不正解ということよりもむしろ、どう考えるのかということを中心にすすめています。分級が終わってももしばらくはおしゃべりをして帰らない子も何人かいるので、分級の教師がお茶とお菓子を用意するようになりました。



中高科
二部屋を使って行っています

3. 教師会

教師会は、毎月第四主の日の礼拝後に行っています。まず、次の月の教案について牧師が説明をします。教案は『成長』ですが、牧師の目から見て注意すべき点などを説明しながら学びます。それから、各分級の様子の報告、行事等の連絡、今後の在り方等を話し合い、最後に各分級のことを覚えて祈祷会をします。最近、新しい賛美歌を導入することを考え、色々な賛美歌集から良い賛美歌を見つけて礼拝で採用することの検討もしています。現在、綱島教会では、5年後の姿を意識しながら様々な活動を進めているので、日曜学校教師会も将来の日曜学校の姿をイメージしながら、若手教師の育成をしたり、より良い日曜学校の在り方などを考えています。

4. おもな行事

(1) 神奈川地区合同夏期学校

毎年7月あるいは8月の金曜・土曜に、一泊二日で神奈川地区の改革派教会合同の夏期学校が行われます。子どもが40～50名、おとな（教師・ボランティア・保護者）30名前後で、70～80名ほどで行われます。礼拝、分級のほか、恒例のスイカ割り・グループ別オリエンタリング・キャンプファイアー・バーベキュー等が行われ、神奈川地区の子どもたちのよき交わりの時となっています。

以前は、神奈川地区合同夏期学校がなく、綱島教会は、神奈川の近隣の改革派教会と合同で行ったり、綱島教会だけで会堂に泊まって行ったりしていました。最近では、中高科が独自で会堂に泊まってやりたいという声も出てきています。

(2) クリスマス祝会

毎年、12月のクリスマス礼拝の前の週の主の日の午後に、日曜学校クリスマス祝会が行われます。第一部が礼拝で、キャンドルサーヴィ

スとなります。綱島教会お手製のキャンドルを立てるツリーがあり、それに一人ひとりがキャンドルを立てていって、そのツリーの光の中で礼拝をします。

第二部はお楽しみ会で、クリスマス劇やゲームやケーキによるティータイム、プレゼントがあります。クリスマス劇は、何年か前教会員の皆さんの協力で、手作りの立派な衣装がそろいました。以前はクリスマスが近づくと分級の時間に練習をしていたのですが、最近は礼拝と分級はいつも通り行い、練習は日曜学校の前にするようにしました。ですから、そのときだけはクリスマス劇に参加する子どもたちや指導する教師は、朝8時30分に教会に集まることになります。クリスマス会には、学校のお友だちを誘ったり、保護者が集ったりして、新しい人たちも何人か集まります。



クリスマス会

(3) その他

その他、4月には進級式を行い、精勤賞、皆勤賞のお祝いもします。イースターは、特別な

祝会はありませんが、分級の時間にイースターエッグ探しをします。母の日には保護者をお誘いして、日曜学校の参観をしてもらっています。夏休みが終わって9月の最初の主の日には、アイスクリームパーティーをします。もともとは、夏休みの様々な行事や帰省等で、日曜学校を休みがちになる子どもたちを励まして、また元気に日曜学校に集えるようにするのが目的でした。日曜学校の後、みんなで、好きなトッピングをしてアイスクリームを食べます。

5. 契約の子クラスとの関係

綱島教会では、毎月第一主の日の礼拝後に「契約の子クラス」を持っています。公同礼拝に集った契約の子たちのクラスで、これも幼稚科から中高科まで、それぞれのクラスに分かれて教理の学びをします。その後全員で食事を囲んで、祈りと交わりの時を持ちます。このクラスから順番に信仰告白者が生まれています。

契約の子クラスでは、ハイデルベルクやウェストミンスター教理問答をテキストに、教理を学んでいます。それで、日曜学校の方では、聖書物語・聖書のストーリーを中心に学ぶようにしています。そのように基本的には、日曜学校の方が聖書そのもの、聖書のストーリーを覚えてもらう、契約の子クラスでは教理を学んでもらう、そういう方向でやっています。もちろん聖書と教理はつながっていて、完全にはっきり分けられるものではないのですが、一応そういう方向で学びをしています。

6. 今後の課題

一つには、地域の子どもたちをどのように教会に導くかということがあります。以前は、クリスマス会やアイスクリームパーティなど、校門でチラシを配ると、新しい子どもたちが何人も集ってくれたのですが、最近では諸事情のためにチラシを配ることも難しくなりました。また、日曜日の行事や活動が盛んで、サッカーク

ラブ、野球クラブ等、様々な活動が日曜日にあります。小学校の4年生あたりから塾に通い始める子どもたちも珍しくありません。せっかく子どもたちが増えているのですから、何とかしたいものです。

また、中学生をどのように教会につなげていくかということがあります。ミッションスクールが多いこともあり、実は中高科の在籍者は、30名～40名います。全員がいっぺんに来ることはないのですが、毎週来る子、各週位に来る子、月に一度くらい来る子等で、中高科は15～20名位で守っています。しかし、高校生になるとやはり急に人数が減ります。その後、主の日の公同礼拝に参加するのは、契約の子以外では1名いるかいなか、という状況です。

中高科の教師は、生徒の学校の文化祭に顔を出したり、公開授業の参観に行ったり、子どもたちとのつながりに努力をしています。



合同夏期学校



清和女子中学・高等学校で働いて

後登雅博（清和女子中学・高等学校聖書科教師）

1. 清和女子中学・高等学校の歴史

心の清い人々は、幸いである、
その人たちは神を見る。
平和を実現する人々は、幸いである、
その人たちは神の子と呼ばれる。
（マタイによる福音書5章8～9節）

清和女子中学・高等学校（以下、清和と記す）という校名は、山上の説教から取られた名前です。校名には、先人たちの思いが込められています。ちなみに、讃美歌の452番を校歌としています。清和は教会ではなく、学校です。しかし、高知県にある唯一のミッションスクールとして、神様を中心とした学校なのです。そのことが、校名にも、校歌としての讃美歌にもあらわれていると思います。

清和は、1901年、合衆国南長老教会宣教師のミス・アニー・ダウドが、恵まれない二人の子女を引き取って教育を施したことが始まりです。ダウド先生は、彼女たちに英語、音楽、聖書を教えました。そして、自活できるようにと手仕事も与えました。その頃は、「高知女学会」と言われていました。まだ学校というよりは、「施設」でした。1934年、日本キリスト教団高知教会が高知女学会の働きを引き継ぎ、施設を女学校に変え、「清和」と名づけました。

清和の歴史には、幾多の苦難がありました。校舎が全焼したことがあります。戦中は、敵国の宗教ということで、教科から「聖書」を外すように高知県から言われたこともありました。しかし、どのような時も、神様と神の言葉である聖書を手放すことはありませんでした。



清和女子中学・高等学校

2. 清和の現状

清和は、現在中高あわせて7クラス（高1が2クラス、それ以外は各学年1クラス）で、生徒数が116名という小さな学校です。私立学校ですから、「学校経営」という問題を見て通



ミス・アニー・ダウド

ることはできません。経営ということ言えば、生徒が150名はいないと苦しいようです。ですから、現状を見れば、本当に厳しい経営を強いられていると言えるでしょう。しかし、一方でこの世的なお金の計算ではなく、信仰的な視点をもって「学校運営」をしています。ダウド先生の言葉ですが、「神様には仕方のないことはありません」という信仰です。現状の足りなさを嘆くよりは、与えられているものを感謝することのほうが大切です。また、ミッションスクールですから、やはり神の使命があるのだと信じて、教職員が祈りつつ「学校運営」をしています。

3. 清和の宗教教育

清和では、毎朝礼拝があります。15分間という短い時間ですが、教職員が全員クリスチャ

ンということもあり、とても大切にしている時間です。どれぐらい朝の礼拝を重視しているかと言えば、学校のある日は本当に毎日礼拝を守っている、ということからも明らかです。普段の授業の日はもちろん、中間・期末という定期テストの時には礼拝があります。さらに、学園祭、体育大会等の行事のある日。また、入学試験の日にも必ず礼拝があります。入試の日の礼拝は、私が説教を担当することになっています。初めて聖書の話を書くような受験生が大半なので、いつも以上に初歩的な話をするように心がけています。

そして、週に1時間だけですが、聖書の授業があります。授業ですから、聖書にも定期テストがあります。他の教科とは違い、福音を扱いますから、単純に知識の習熟度を問うということではできません。大抵の生徒は信仰を持っています。また、信仰を持っていたとしても、それは内面のことです。やはりペーパーテストで計るということはふさわしくないように思います。(丁度、この原稿を書いている時も中間テストが近く、テストの作成で悩んでいます。)とはいえ、教科である以上、評価をつけないければなりません。実際のところ、テスト以外の観点(教会出席の回数、ノート、態度等)を加えて評価をつけています。そして、恐らく他の教科に比べると、甘い評価となっていると思います。今さらですが、生徒の頑張りを数値で表すことに難しさを覚えています。

4. 諸教会との関係

朝の礼拝に週一度、近隣の牧師先生にも説教をしてもらっています。そして、清和の宗教行事の折には、諸教会にも案内を出しています。教会と生徒の間の架け橋的な働きも、清和は担っているのです。また、生徒にも教会の礼拝に出席するように指導しています。清和は教会ではありませんから、洗礼式も聖餐式もありません。しかし、教会との関わりの中で、教会に定着する生徒もいますし、洗礼を受ける生徒も

います。洗礼へと導かれるのは、もちろん諸教会の働きに負うところが多いわけですが、私たちとしても嬉しいことです。清和から教会へと導かれた人たちが、教会や社会で重要な働きを担っている例も少なくありません。そのような活躍を聞くと、改めて教会との関係や教育の重要さを感じるものです。

5. 清和で感じること

神様のために働きたいと思い始めた日から数えて、はや19年が経ちました。そして、清和で働いて5年目となりました。神様から与えられた「教会の働き人」という召しと、学校の先生という現実との間にギャップを感じます。ここだけの話(？)、今だに自分は教師には向いていないなあと思います。それでも、曲がりなりにも学校の先生であり続けているというのは、神様の憐れみだと思います。

「清和」という場所を、生徒たちは3年ないし6年で卒業していきます。教師が直接関われる期間は限られているのです。(実際には、清和の生徒は、卒業してからも結構学校に遊びに来ます。ですから、関わりが数年で切れるということは余りありません。卒業生が多く訪れるということは、清和の教師が誇れることだと思います。)とはいえ、その限られた時は、生徒たちの将来へと続くときです。しかも、一番多感で、人格形成に大事なときを共にすごすのです。そう思うと、これも重要な働きだと思っています。

生徒と関わるということ、それは自分が生きることになります。誰も一人では生きることができないからです。誰かのために生きることによって、自分自身も生かされているのです。私が牧師ではなく、教師として働くということ。それは、自分の計画の中にはなかったことです。しかし、生徒のために生きることによって、神様の働きに携わっているのだとも思います。そして、この教師という働きも、牧師と同じくらい大切な働きである、と今は思っています。

(四国中会規定外奉仕教師)

信仰の証

受洗や信仰告白の証しをご紹介するコーナーを設けます。主なる神に訪ね求められ、見いだされた喜びをみなで分かち合いましょう。ぜひ証しをお寄せください。

今回は、関キリスト教会より、宮原翼兄です。

祈り

宮原 翼

2010年7月4日受洗

関キリスト教会会員

高校2年生

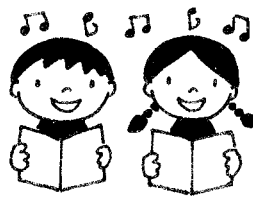
教会に行き始めた時、自分が洗礼を受けて、教会の一員となるとは思いませんでした。そんな僕が、なぜ受洗したいと思えるようになったのか、それは、とある修養会に参加したときの出来事です。

そのときの修養会では、イエス様の受難について、考えるときが持たれていました。始めに開会のお祈りがあって、賛美歌を歌い、そして先生からのお話があり、イエス様が、どうやって殺されたのかなどを学んでいました。とても痛かっただろうとか、苦しかっただろうなあなどと思いつつ聞いていました。そして、先生のお話も終わり、夕食を食べ、お風呂も済ませて、一日の終わりに祈りの時がありました。そのときは、教会に行き始めて日が浅く、正直どうやってお祈りしていいかわからず、「僕にも祈らせてください」と心の中で小さく祈りまし

た。そして次の日の朝、目が覚めると少しだけですが、急に洗礼を受けたいなあと思うようになりました。なぜこの様なことを急に思ったのかは、分からないけれど神様が、僕に「こうしなさい」と教えてくださったと思います。

修養会が終わり、しばらくして、僕は牧師さんに「洗礼を受けさせてください」と伝え、次の日曜日から洗礼・信仰告白準備会に出るようになり、牧師先生の関教会最後の説教の日に、無事、洗礼を受けることができました。

跪き、洗礼を受けている最中は、牧師先生に教えてもらった言葉を思い出していました。一つは、「洗礼は、入り口だからこれからを大切に信仰生活を送りなさい」、もう一つは、「感謝しなさい」です。これからは、小さなことに「感謝」して生きていきたいです。



副読本のご案内

『主は羊飼―中高生のための教理入門―』

価 格 800円

著 者 木下裕也

(名古屋教会牧師・教会学校教案誌編集員・神戸改革派神学校講師)

ぜひお買い求めください。ご注文は教案誌編集部まで。

❶ 人生の目的―神礼拝

もうかなりのお年になってから教会に通い始められた方と聖書の学びをしていたときのことです。そのときまたま一緒に、ウェストミンスター小教理問答の問1を読みました。その問いは「人のおもな目的は何であるか」です。

この問いを読まれて、その方はつぶやくようにおっしゃいました「わたしはもう何十年も生きてきたのに、人生のほんとうの目的などということを考えたこともありませんでした、と。」

人生の目的とは何か。このことをはっきり知っているのと、知らずにいるのとでは、やはり生きかたが大きくことになってくるのではないのでしょうか。

さまざまなことが人生の目的になり得ます。お金をもうけること、地位や名誉を得ること、仕事で成功をおさめること、熱烈な恋愛をすることなどです。これらのことは人生にある幸せをもたらすでしょう。

けれども一方で、そのどれもが不確かです。お金は瞬間にして失われることがあります。地位や名誉を得たとしても、たった一度のあやまちでそのすべてを棒にふることもあります。熱烈な恋もさめることがあります。とすれば、これらはいずれも人生の究極の目的とはなり得ないでしょう。

さらに、私たちの命そのものも不確かなものです。明日この地上に生きているという保証を、私たちはだれひとり持たないのです。

では、私たちはついに人生の確かさ、人生のほんとうの目的を見出すことはできないのでしょうか。

いいえ、私たちは人生の真の目的を知ることができます。ほんとうに確かで、生きがいのある命と人生を生きることができるのです。

もういちどウェストミンスター小教理問答の問1を見ましょう。

問 人のおもな目的は何であるか。

答 人のおもな目的は、神の栄光をあらわし、永遠に神を喜ぶことである。

もうひとつ信仰問答を見ましょう。ジャン・カルヴァンの手にあるジュネーブ教会信仰問答の問1はこうです。

問 人生の目的は何ですか。

答 神を知ることです。

人生の目的は神さまを知り、神さまの栄光をあらわし、神さまを喜ぶことにあります。すなわち、神さまを礼拝することこそが人生の真の目的なのです。

人生の確かさは私たち自身の中にはありません。私たち自身の何かを頼りにしているかぎり、私たちの人生は不確かです。

けれども神さまは確かなお方です。神さまこそ私たちの人生のゆるぎなき土台、岩、命のとりです。なぜなら神さまは天地の造り主であられ、私たちの命の与え手であられ、この世界のいとなみと私たちの人生の歩みのすべてをみ手のうちに握っておられるお方だからです。

『教会学校教案誌』発行のための 自由募金のお願い

教会のかしらなる主イエス・キリストの御名をあがめます。

中部中会日曜学校委員会（2007年4月中部中会第一回定期会で教育委員会から改組）は、日本キリスト改革派教会をはじめとする改革・長老主義諸教会の教会学校・日曜学校教育に資することを目的として、『教会学校教案誌』を発行しています。2001年4月に始まり、すでに満10年となり、第40号まで発行して参りました。中部中会では8割ほどの教会により採用され、改革派教会全体でもおよそ70教会で採用されています。大会教育委員会もご支持を表明してくださっています。皆様のご支援に心からの感謝を申し上げます。

『教案誌』の発行は中部中会の事業として行われておりますが、中部中会日曜学校委員会では、あわせて皆様からの自由募金によってご支援いただきたいと願っています。子どもたちの信仰教育のために、ぜひ皆様からのお祈りと募金のご支援をいただきたく、よろしくお願い申し上げます。教案誌を購入していただきやすくするために、教案誌の頒布価格を印刷・製本単価ぎりぎりにおさえています。『教案誌』をご購入くださることも発行のための支援となりますので、ご購入いただくことによってもご支援くださいますよう、お願いいたします。

目標金額	30万円／年
送 金 先	郵便振替 伊藤治郎
	00890-2-148183

※通信欄に「教案誌のための自由募金」と明記してください。

聖書研究・カテキズム研究・説教展開例・分級展開例

洗礼者ヨハネが「わたしより優れている」と認め、「聖霊と火で洗礼を授ける」権威をもった方がいよいよ登場する。ヨハネが洗礼を授けるのを拒んだのも、イエスに対する彼の証しを補強するものであろう。しかし、イエスは他の者たちと同様に洗礼を受け、「正しいことをすべて行う我々」の一人となられた。イエスの受洗は、義なる神への積極的な服従のためである。

ヨハネの洗礼は、来るべき新しい洗礼を予め人々に告げる働きをした。ヨハネの洗礼そのものが、キリストの洗礼を予告する預言であった。水によって罪が清められるとの古い信仰は、その水と共に働く霊によって実質が伴う。天が開いて神の霊が鳩のようにくだった(16)のは、神の子の到来によって告げられる和解のしるしである。

水は聖書では命の象徴であり、同時に死の力をも表す。天地創造のときに闇がその面を覆っていた深淵は、世界が誕生する以前の太古の大水を表し、地の「混沌」と共に虚無と死の勢力を象徴する。そこに神の霊が働き、神の言葉が発せられると、光が差し込んで、神の創造が始まった。天地創造は、死と虚しさを打ち破る神の力が発揮された、最初の、最大の出来事である。ヨルダン川の水も、「洗い流す」という清めの意味と同時に、命を飲み込む大水という意味をもつ。同じく創世記に記されたノアの洪水は、罪を一掃する浄化の働きをすると同時に、すべての命に死をもたらす力であった。

洗礼は、一旦水の中に人を沈めて、そこから再び引き上げることによって行われる。キリストも、水の中から上がって来られて、天からの知らせを受け取った。「鳩」も洪水に結びつくモチーフである。鳩がノアにもたらしたのはオリーブの若木であったが、それは大水が引いて、新しい世界が開けたことの知らせであった。神はそこで再び世

界と和解され、ノアとその家族を人類の基とされた。イエスも、このとき、鳩の姿をご覧になり、神の和解のしるしを確認された。それは、イエス・キリスト御自身の働きによって、神が世に罪の赦しを、真の浄めを与えてくださることのしるしである。御自身の働きを始められたイエス・キリストの上に、それまで沈黙^{ことば}していた天が開かれ、霊が降り、神の子を言祝ぐ声が聞こえる。

教会に託された洗礼は、神との和解を告げるしるしである。イエス・キリストが地上で果たされた御業によって、洗礼は聖霊が与えられることの証となった。使徒言行録19章は、パウロがエフェソでキリストの名によって洗礼を授けたところ、聖霊の働きが顕著に現れたと記す。それは水の効果ではなく、キリストの名の力を示す。キリストの御業を信じて受ける洗礼は、聖霊を通して私たちに実質的な効力を及ぼす。異言や預言という特殊なしるしは、聖書の証言という以上の意味合いをもはや持っていない。キリストの名によって与えられる洗礼の恵みが教会に真の信仰を生み出し、神の御業を証しする言葉をそこに呼び起こす。聖霊が教会を、主イエスの名による洗礼のもとで一つにする。

イエスは洗礼を受けられて、命に至る罪人の悔い改めのために自らを差し出す生涯へと歩み出された。その和解のしるしの下で「これはわたしの愛する子、わたしの心に適う者」(マルコ1:11と比較)との天からの声が響く。教会はこの証言を聞き、今や我々の一人となられた神の子イエスを認める。そして、イエスに先導されて義の完成へと向かう途上であって、弟子たる我々は主が十字架によって勝ち取られたこの天からの呼びかけを、日々の悔い改めによって、自らの上に聞くことが許されている。

(牧野信成)

1月2日

「ヨハネと主イエスの受洗」

説教展開例

テキスト マタイによる福音書 3章13～17節

参照カテキズム 子どもカテキズム 問22, 30

〔単元のねらい〕

私たちの友となるために来られた救い主、イエス・キリストを覚えたい。救い主イエスは、決して威張ったお方でもなく、近づきたいお方でもなく、厳しく裁くお方でもない。罪人である私たちの仲間になってくださった。そのしるしとして、罪人と同じように、洗礼を受けてくださった。父なる神様も、そのイエス様を「わたしの愛する子、わたしの心に適う者」と認められた。そういうイエス様をはめたたえるようになりたい。

「イエス様も洗礼を受けた」

新しい年になりました。なんだか気持ちも新しくなりますね。新しい年も、神様を礼拝して歩んでいきましょう。

さて、イエス様がいよいよ救い主としてのお働きを始めようとしたときのことです。ヨルダン川に、洗礼者ヨハネという人が現われました。ヨハネという名前の人は聖書に何人かでてきますね。それで、間違わないように、このヨハネのことを洗礼者ヨハネと呼びます。この人は、お母さんはエリサベト、お父さんはザカリアと言います。実は、このヨハネは生まれる前から、神様のために特別な働きをする人になると、天使によって教えられていたのです。そのとおり、だいたい30歳くらいになったとき、ヨハネはヨルダン川のあたりで、神様のことを教え始めます。「悔い改めよ。天の国は近づいた」と教えました。つまり、悪いことはやめて、ちゃんと神様を信じる生活をするようにと、人々に教えたのです。その教えを聞いて、悪いことをやめて、ちゃんと神様を信じる生活をしようと決心した人たちに、ヨハネは洗礼を受けました。

それで、このヨハネのことを洗礼者ヨハネと呼ぶようになったのです。たくさんの人たちがヨハネの教えを聞いて、洗礼を受けました。遠いところからも、人々がヨルダン川のヨハネのところに来て、罪を告白し、洗礼を受めました。そんなヨハネのことを、もしかしたら、この人が救い主かも

しれないと、人々は考えるようになりました。けれども、ヨハネははっきりと言いました。「わたしよりも優れた方が来られる。わたしは、その方の履物のひもを解く値打ちもない」。

そんなふうに洗礼者ヨハネが、神様のことを教え、洗礼を授けていたときのことです。ある日、イエス様がヨルダン川の洗礼者ヨハネのところにやってきました。ヨハネの様子を見にきたのでしょうか？ ヨハネとお話をするためでしょうか？ それとも何か神様のことを教えるためでしょうか？ いいえ、何とイエス様も、ヨハネから洗礼を受けるために来られたのです。

洗礼者ヨハネは、イエス様を見たときに、特別のお方だ、救い主だと気がついたようです。「わたしよりも優れた方が来られる。わたしは、その方の履物のひもを解く値打ちもない」とヨハネが言っていた、まさにそのお方だとわかったのでしょう。そんなイエス様が、ヨハネから洗礼を受けようとしたので、ヨハネはびっくりしたことでしょう。イエス様が洗礼を受けるのを思いとどまらせようとします。ヨハネは言いました。「わたしこそ、あなたから洗礼を受けるべきなのに、あなたが、わたしのところへ来られたのですか」。けれどもイエス様はおっしゃいました。「今は、止めないでほしい。正しいことをすべて行うのは、我々にふさわしいことです」。これは正しいことだとイエス様はおっしゃいました。それで、ヨハ

ネはイエス様に洗礼を受けたのです。

でも、やっぱり不思議ですね。ヨハネは、悔い改めた人に洗礼を受けたんでしたよね。悪いことをやめて、ちゃんと神様を信じる生活をしようと決心した人に洗礼を受けたはずです。それなら、イエス様も悪いことをしたのでしょうか。今までは、神様を信じていない生活だったのでしょうか。もちろん、そんなことはありません。クリスマスときにはイエス様のお誕生のことも学びました。イエス様は、聖霊のお力で、罪がまったくないお方として生まれました。また、お父さんのヨセフさんとお母さんのマリアさんのもとで、罪を犯さない生活をしてきました。天の父なる神様のことをちゃんと知っていました。父なる神様に完全にお従いして生活してきました。そして、いよいよこれから救い主のお働きを始めるのです。それなのに、どうしてイエス様は、洗礼者ヨハネから洗礼を受けたのでしょうか。

イエス様が洗礼を受けたのは、洗礼を受けなければならない罪人の、仲間になってくださったという意味なのです。

お友だちがボール投げをして遊んでいて、隣の家の窓ガラスを割ってしまいました。さあ大変です。お友だちのお母さんがとんできて、一生懸命お隣にあやまってくれて、窓ガラスの弁償もしてくれました。本当は、お友だちが割ってしまったので、お友だちが一生懸命あやまって、そうして弁償しなければなりません。お母さんは、窓ガラスを割ってしまったわけではありません。でも、まるでお母さんが悪いことをして、窓ガラスを

割ってしまったみたいに、一生懸命あやまり、そうして弁償してくれたのです。

ちょうどそんなふうに、イエス様は悪いことをしていないし、罪もないお方なのですが、まるで御自分に責任があるみたいにして、罪人の仲間になってくださったのです。そうして、罪人を救ってくださる、そういうお働きをしてくださるのです。イエス様の洗礼は、そのように、罪人の仲間になってくださったしるしだったのです。

イエス様は、こわい顔をして厳しいことばかり言うお方ではありません。罪人に罰をあたえるために来られたものではありません。清くて、とても近づけない、そんなお方でもありません。威張って「お前を救ってやる！」というような救い主でもありません。罪人の仲間になって、そうして救ってくださる救い主なのです。ぼくたち、私たちの味方になってくださる救い主なのです。

イエス様が洗礼を受けられたあと、天から声が聞こえました。「これはわたしの愛する子、わたしの心に適う者」。洗礼を受けたイエス様を、父なる神様も喜んでくださったのです。やっぱりイエス様は本当の救い主なのです。ぼくたち、私たちの味方になってくださる救い主なのです。

残念ながら、大人でも子供でも、罪のない人はいません。だれもが罪人です。ぼくたち、私たちもそうです。でも、大丈夫。罪人の仲間になってくださった、救い主イエス様がいてくださいます。すばらしいことではありませんか。仲間になって、救ってくださるイエス様をはめたえましょう。

(川杉安美)

〔今週の暗唱聖句〕 マタイによる福音書 3章17節

そのとき、「これはわたしの愛する子、わたしの心に適う者」という声が、天から聞こえた。



〈ねらい〉

イエスさまが罪人であるわたしたちの友となり、共に歩んでくださる救い主であることをおぼえて感謝する。この年もイエスさまと共に歩める一年であることを願う。

〈展開例〉

1. イエスさまはわたしたちを救うために来てくださった方です。

- イエスさまは、わたしたちとおなじ人としてお生まれになりました。
- でも、神さまにそむく罪はまったくありませんでした。
- ヨハネは、自分の罪を悔い改める者に洗礼を授けました。
- 罪のないイエスさまが、ヨハネから洗礼を受けたのは、わたしたちの友となり、人としての正しい歩みをつらぬいて、わたしたちを救わ

れるためでした。

- 神さまはこのことを喜ばれました。

2. 新しい一年がはじまりました。みなさんは、この年をどのように過ごそうと思いますか？

- 今年の目標、したいことなどがありますか？
- 今年もイエスさまがいっしょに歩んでくださいます。そのことがわかるにはどうすることが大切なのかな？

〈お祈り〉

神さま、新しい年を迎えることができ、ありがとうございます。イエスさまがわたしたちと共に歩まれるために洗礼を受けられ、救い主としての歩みを始められたように、わたしたちもイエスさまとともにこの年も歩んでいけますように、わたしたちをお導きください。アーメン。

〈やってみよう〉

今年の目標などを話し合いながら、ぬり絵をしましょう。



いつも

イエスさまがいっしょ

1月2日

「ヨハネと主イエスの受洗」

小学科下級

〈ねらい〉

私たちといつも共にいてくださるイエス様を、毎日ほめたたえることを覚える。

〈はじめに〉

イエス様が私たちの罪から救うために、人々になってお生まれくださったことを全世界の人々と一緒にお祝いしました。このクリスマスの喜びをもって、この新しい一年がスタートしました。この喜びをいつもこの分級で分かちあいましょう。お正月の時を過ごしています。この日、礼拝に来た子どもたちを心から歓迎しましょう。

〈御言葉に聴きましょう〉

- ①イエス様は、誰のどころに来ましたか。
- ②ヨハネさんからイエス様は何を受けましたか。
- ③イエス様が洗礼を受けて、ヨルダン川から上
がって来たとき、天から声が聞こえました。その声は何と言いましたか。

〈展開例〉

皆さんは、自分のアルバム、家族のアルバムを持っていますか。自分では覚えていないけれど、写真を見ながら、お父さんやお母さんが、この写真はこういう時だったのよ、あなたが何歳の時の写真よ、とかお話を聞いたことがあると思います。この中で、幼児洗礼の時の写真を見たことがある人はいますか。赤ちゃんの時に受けた洗礼は、自分では全然覚えていませんね。お父さんやお母さんから、皆さんの洗礼の時のお話を聞いたことはありますか。自分は洗礼は受けていないけど、教会の礼拝で洗礼式を見たことがあるという人はいますか。今まで見たこともない人もいるかもしれません。

今日はイエス様がヨハネさんからヨルダン川で洗礼をお受けになられたというお話です。たくさんの方が、ヨハネさんのところに来て、罪を告白して神様に赦していただくしるしの洗礼を受けていました。そんな中にイエス様も順番を待っていたのです。ヨハネさんはびっくり、困ったことで

しょう。だって、イエス様は罪の告白なんて必要ないし、神様に赦していただく必要もないからです。イエス様は神様の子供で、完全に神様に従うことがおできになるお方なのです。でもイエス様は、これから神様にしたがって、神様のことを伝えていく働きにつく、その前に、ヨハネさんから洗礼を受けられました。なぜでしょう。

イエス様は、完全に神様に従うことができない私たちを救うために、ご自分の命を十字架につけて私たちの身代わりとなって死んでくださいました。そんなイエス様が、まずご自分のお仕事が始まる前に、私たちが受けなければならない洗礼と一緒に受けてくださって、私たちと同じ罪びとの仲間になってくださったのです。

そんなイエス様を、神様は「これはわたしの愛する子、わたしの心に適う者」と言われました。イエス様は神様から、「大好きだよ、私の思いにぴったりだよ」と言われたのです。叱る言葉ではありません、怒った言葉でもありません。最高の言葉だと思いませんか。お母さんやお父さんから、「大好きだよ、愛してるよ」と皆さんが言われたらどうですか。嬉しくなりますね。きっとイエス様も同じ気持ちだったでしょう。この言葉をいただいて、イエス様は、ご自分のお働きをスタートされました。新しい私たちの一年も始まりました。イエス様と共に神様から「これはわたしの愛する子、わたしの心に適う者」というお言葉を聴きながらこの一年も歩みましょう。

〈お祈り〉

神様、イエス様と一緒に歩むことができますように。アーメン。



〈ねらい〉

罪人が受けるべき洗礼を、イエス様もお受けになり、私たち罪人の仲間になってくださったことを学びましょう。

〈展開例〉

あなたには、尊敬する人や憧れる人はいますか。手の届かないような雲の上のような存在だけでも、一度でいいから見てみたい、と思うような人。スポーツ選手とか、俳優さんとか。その人が、もし私たちのところへ来て励ましてくれたり、力になってくれたりしたら本当に嬉しいことだと思います。私たちに親身に寄り添い、私たちの明るい部分だけでなく、心の中の人には言えない暗い部分を理解して、寄り添ってくれて、そして同じ苦しみを共に負ってくれて、どこまでも励ましてくれるとしたらどうでしょう。生きる力が湧いてくるはずですよ。

私たちが持つ、心の暗い部分の中でも一番暗い部分は罪です。誰にも言えない苦しい罪を私たちは持っていますが、イエス様は私たちのところへ来て、その罪を背負い、私たちを力づけてくださったんですね。そのことを思いながらお話を考えて見ましょう。

①人々は、どうして洗礼者ヨハネのところに集まってきたのでしょうか？

洗礼者ヨハネは、人々が天国に入れるように、人々が自分の罪を悔い改めるように教えていました。人々はそろそろと集まり、罪を悔い改める決心をした人は洗礼を受けたのです。なぜなら、人々は天国へ行きたいからです。罪を持つ私たちが神様に対してすべきことは、自分の罪を悔い改めるということです。

②イエス様が洗礼を受けにやって来ます。洗礼者ヨハネの反応は？そして、その反応の理由は？
イエス様もやって来て、同じように洗礼を受けようとなさいます。これにヨハネは驚きます。

イエス様は御自分が救われて天国へ行くために、悔い改めて洗礼を受ける必要なんてないからです。イエス様は全く罪を犯していない清いお方でした。驚いたヨハネはイエス様を止めようとしたのですが、イエス様は、「今は、止めないでほしい。正しいことをすべて行なうのは、我々にふさわしいことです」と言われ、洗礼を受けたのです。

③イエス様が洗礼を受けたことを、周囲の人々はどう見たでしょうか？

周囲の人々から、イエス様を見て、あの人も罪を悔い改めたんだ、と見たことでしょう。イエス様は罪人の仲間になったのです。イエス様は、なぜそんなことをしたのでしょうか。

④イエス様が洗礼を受けたことを、神様はどのように見ておられたでしょうか？

父なる神様は、「これはわたしの愛する子、わたしの心に適う者」と言われました。神様が望まれたことなのです。私たちと同じ罪人の仲間になってくださったのは、私たちが罪の裁きを負ってくださり、私たちを罪から救ってくださるためです。神様は、私たちを深く深く愛しておられるのです。

〈祈り〉

イエス様が私たちを罪から救うために私たちのところへ来てくださり、私たちと同じようになつて、私たちを助けてくださったことをありがとうございます。イエス様が私たちとどこまでも一緒におられることを忘れることがありませんように。イエス様の御名により祈ります。アーメン。

〈参考〉

靴の紐を解くこと、また靴を持つことは奴隸の役目であった。(『新聖書大辞典』、キリスト新聞社、p.436)

〈ねらい〉

洗礼をとおしてイエス様が「私たちの友、仲間」となってくださったことに感謝すること。

〈展開例〉

①イエス様は洗礼を受けることをとおして、御自分が罪人の仲間であることを示された。神様はそんなイエス様を「御心に適う者」＝「神様の好ましく思われる者」と言われた。イエス様が仲間であることを示されたヨハネの周りにいた人達はどんな人達だっただろう。彼らは「悔い改めよ！＝神様のほうに向きを直して生きなさい！」という言葉で洗礼を受けた人達であった。裏を返せば「自分の罪」を知っている人達。罪深いままでは神様の救いに相応しくないことを知っている人達だった。そこには自分の罪に責められる気持ちがあったことだろう。

Q. みんな、自分が何か悪いことをしたときに心が重たくなった経験はないか？ 誰かに後ろめたいことをすれば、心がもやつく。人を悪い目に合わせてしまったとき、そのままで居続けるというのは心苦しい。同じように「神様に悪いことをしてしまった」、こんなときには、申し訳なさや怖さがちらつく。

②罪の重さというのは生きる明るさを奪うものである。「私は酷い奴だ！」自分のことを受け入れられないのは苦しいことである。そして、罪の重圧には人を殺すほどの重みがある。「私は赦されない人間だ！」「わたしなんかいないほうがいい」「なんで、わたしなんか生まれて来たんだろう」。その重さで、死にたくなる人だっている。その重さが取り除かれるには「赦される」ということが必要だ。「君の罪状を私が引

き受けよう。君の代わりに私が神様から責められよう。君はそれが本当だと信じれば良い」。イエス様は、罪の重さに苦しんでいる人を救うために罪人の仲間となってくださった。もし、君が神様に後ろめたい気持ちや生活スタイルがあるならば、素直にその罪を認めて、イエス様に引き渡してほしい。「神様が自分のことを嫌っている」。こんな重さを背負いこんで生きていけるほど、人は強くない。「わたしは、君達の仲間なんだ」。こう示してくださったイエス様を信じて、助けを求めて欲しい。罪に苦しむ君が、神様の愛するイエス様と絆を持つことこそ「神様の好ましく思われる」「御心」なのだから。

③また、罪の重さに苦しむ人々には、世の中から「罪人」として仲間外れにされている人々もいたことだろう。そこにあるのは「疎外感」や「孤独感」である。イエス様は罪人の罪を赦すだけでなく、その「仲間」「友」となってくださる方である。人を赦し、孤独な人の仲間となることは主の御心＝好ましいことであった。一年の初めに、イエス様が友とされた私達も神様の好まれる毎日を歩めるよう願いたい。皆の周りに後ろめたさを抱えて孤立している人、後ろめたさで苦しんでいる人はいないか？ 私たちはイエス様のように誰かの罪の身代わりにはなれないが、身に受けた誰かの負い目を赦すことはできる。そして、誰かの友達にもなれる。主に愛され、赦されている者として、神様の目に好ましく映る神の子としての一年を過ごしたい。

〈祈り〉

イエス様、罪人である私の友となってくださった優しさに感謝します。アーメン。

神の子イエス・キリストが律法に対する完全な服従を遂げられて、復活の栄光をもって天地を治める権能を授けられたことを、マタイは本書をもって証しする。「荒れ野の誘惑」で明らかにされるのも、まずその点である。ヨハネから洗礼を受けて神の霊と共に行動するイエスは、悪魔の誘惑をみごとに退ける。

1～2節は、「荒れ野」「四十日間」「空腹」というモチーフによって、律法（五書）に記されたイスラエルの荒れ野の試みに結びつく。イスラエルの第一世代はモーセを介して神の言葉を示されながらも、それに信頼して従うことができず、約束された土地に入ることができなかった。しかし、イエスは試みの中で忍耐され、御言葉への服従を示してサタンの誘いを退ける。引用された聖句はいずれも申命記による。

四十日四十夜の過激な断食は、モーセがホレブで十戒を受け取った時の事例に対応する（申命記9:9以下、列王上19:1-8節参照）。そして、空腹が誘惑の最初のきっかけとなる。

悪魔はイエスが「神の子」であることを試す。石をパンに変える奇跡がそれを証明するであろう。事実、後にイエスはガリラヤ湖畔の山上で、五つのパンと二匹の魚を五千人以上の群衆にふるまうことで、創造主なる神の力を発揮される（14:13以下、15:32以下参照）。しかし、ここでは奇跡は断念され、イエスは御言葉をもって答える。引用された申命記8章3節によると、イスラエルの四十年の旅は律法に対する従順を試すためである。「主はあなたを苦しめ、飢えさせ、あなたも先祖も味わったことのないマナを食べさせられた。人はパンだけで生きるのではなく、人は主の口から出るすべての言葉によって生きることをあなたに知らせるためであった」。イエスはこれを受け入れて、飢えに耐えるほうを選んだ。

次なる試みは、神の子に相応しい神の都を舞台

とする。「飛び降りろ」との悪魔のささやきは単なる暴挙のようだが、詩編91編の聖句によって、その意味が明らかになる。すなわち、神の加護に対する信頼がそれによって試される。しかし、イエスは天使の軍団を呼び寄せることはなさない。「天からのしるし」を求める信仰は本当の信頼ではない（16:1）。イエスの神の子たる証しは、御自分を神の意志に引き渡していられる受難の道行に示される。天使の軍団を率いる権力者としてではなく、ロバに乗った平和の使者としてイエスは都に入場する（21:1-17）。ゲッセマネで逮捕される際も、「お願いすれば、父は十二軍団以上の天使を今すぐ送ってくださる」と知っておられたが、預言者の言葉が成就する為に静かに身柄を引き渡された（26:52-56）。十字架に上がったイエスを見て、人々は「神の子なら自分を救え」と罵ったが（27:40-43）、父なる神に対するイエスの信頼は、御言葉への従順に表される。イスラエルの民は荒野で主の顧みを試したが、「あなたたちの神、主を試してはならない」と申命記にある通り（6:16）、イエスの信頼は奇跡を必要としない。

最後の誘惑は、悪魔崇拜と引き換えに約束された世界支配である。ここに「神の子」に対する人の誤解とサタンの意図とが最大限に表されると同時に、イエスが神の子であることの真の意味が明かされる。地上の権力による支配や経済的繁栄がその目標ではない。ベトロも同様の誤解をして、「サタン、引き下がれ」と叱責を受けている（16:23）。神の子イエスは、人としての低みを生き抜かれて十字架に至る従順を示し、徹底した御言葉への服従によって復活の栄誉を受ける。サタンに唆されてではなく、神の御旨に従って、イエスは最終的に全世界を治める権能を受け取られた（28:18）。こうして主イエスは神の言葉への徹底的な服従によって神の子としての栄誉を獲得され、御自分に従う弟子たちを同様の歩みへと導かれる。（牧野信成）

テキスト マタイによる福音書 4章1～11節
参照カテキズム 子どもカテキズム 問22, 27, 84

〔単元のねらい〕

イエス様は私たちのために、誘惑を受けて、それに勝利してくださった。誘惑というのは様々な形をとるものの、結局のところ、神様から離そうとするものであることを覚えたい。イエス様は誘惑に対し、御言葉を用いて打ち勝たれた。それはまた、私たちが見習うものであることを教えられる。しかしまた、見習うだけでなく、誘惑に打ち勝たれた救い主だからこそ、私たちが誘惑にあう時に助けることができる、そういうお方でもあることを覚えたい。御言葉と祈りによって、イエス様に助けていただきながら、私たちも勝利していきたい。

「誘惑に打ち勝ったイエス様」

新しい年になり、学校や幼稚園も始まったことでしょう。教会学校も、新しい年が守られますように、お祈りしましょう。

さて、イエス様がこれから救い主としてのお働きを始めます。その前にまず、洗礼者ヨハネから洗礼を受けましたね。そのあと、今度は荒れ野に行きました。荒れ野というのは、家もない、お店もない、人も住んでいない、そんなところですよ。夜は電気もなくてまっくらです。食べ物ありません。そんなところで、イエス様は何も食わずに四十日間も過ごしたんです。きっと、お祈りをしながら過ごしたことでしょ。でも、四十日も何にも食べなかったの、イエス様もずいぶんとお腹がすいてしまいました。そのときです。誘惑する者、悪魔がやってきて、イエス様を誘惑したのです。悪魔は目に見えませんが、もしかしたら、イエス様の心にそっとささやいたのかもしれませんが。悪魔は言いました。「神の子なら、これらの石がパンになるように命じたらどうだ」。

イエス様は神の子ですから、本当に石をパンにすることができたかもしれません。お腹がすいたら、石をパンに変えて食べる、そんなこともできたかもしれません。では、イエス様はなんとお答えになったでしょう。「そうしよう」とお答えになったのでしょうか。いいえ、イエス様はおっしゃいました。『人はパンだけで生きるものではない。

神の口から出る一つひとつの言葉で生きる』と聖書に書いてある」。悪魔は、聖書の教えと違うことをイエス様にさせようとしたんですね。神様のお考えと違うことをさせようとしたんですね。でも、イエス様は、聖書の教えにお従いすることが一番大切だとおっしゃったのです。みなさんは、どう思いますか。食べ物がいっぱいあったら幸せだと思いませんか。お金がいっぱいあって、何でも買うことができると幸せだと思いませんか。でも、たとえお金や食べ物がいっぱいあっても、聖書の教えと違うことをするならば、決して幸せにはなりません。聖書の教えを信じて守っていくこと、神様を信じて神様にお従いしていくこと、それが人間にとって、一番大切なことです。イエス様は、聖書と違うことをさせようとした悪魔の誘惑に打ち勝ちました。

悪魔は最初の誘惑に失敗したので、次の誘惑をイエス様にしかけてきました。今度は、高いところから飛び降りてみろ、神様が守ってくださると聖書に書いてあるから大丈夫だろう、ほら飛び降りてみろ、そんな誘惑でした。聖書に書いてあることを実験してみろということです。神様が助けてくださるというのだから、わざと危ないことをしてみろ、ということです。これも、悪魔の誘惑ですよ。こんどはどうなったでしょうか。イエス様はやっぱり聖書の言葉で打ち勝ちました。イエス様

はおっしゃいます。「聖書に『あなたの神である主を試してはならない』と書いてある」。

そうです、わざと危ないことをして、本当に神様が助けてくださるかどうか実験してみる、試してみる、そんなことをしてはいけません。神様をためすようなことをしてはいけません。二番目の誘惑にもイエス様は打ち勝ちました。それで悪魔は、三番目の誘惑をしかけてきます。こんどは、悪魔はイエス様に言いました。「もし、ひれ伏してわたしを拝むなら、世のすべての国々をみんな与えよう」。おそろしいですね。神様ではなくて、悪魔を拝みなさいというのです。そうすれば、お金持ちにもなれるし、幸せにもなれるというのです。もちろん、そんなことはとんでもないことです。三番目もやっぱりイエス様は、聖書の言葉を使って打ち勝ちます。『『あなたの神である主を拝み、ただ主に仕えよ』と聖書に書いてある』。本当の神様だけを信じて、礼拝するのです。本当の神様だけにお従いしていくのです。そのように、聖書に教えられています。

こうしてイエス様は、悪魔の誘惑に打ち勝ちました。悪魔の誘惑に打ち勝って、いよいよ救い主としてのお働きを始められるのです。もし悪魔の誘惑に負けていたら、救い主として失格になってしまったことでしょう。けれども、誘惑に打ち勝って、イエス様は本当の救い主として、私たちを救うお働きをなさってくださいました。

みなさん、悪魔はいろいろな誘惑をして、父な

る神様から人を引き離そうとします。聖書の教えから、人を引き離そうとします。教会から、人を引き離そうとします。しかも、おそろしい姿で現れるわけではありません。何やら心にささやくようにして、誘惑することもあります。そのときに、思い出してください。イエス様は、聖書の教えによって誘惑に打ち勝ちました。ぼくたち私たちも、いつも聖書を学び、信じ、お従いしていきましょう。聖書の教えを信じて、誘惑に打ち勝ちましょう。

でも、それだけではありません。イエス様は、誘惑と戦って打ち勝ってくださいました。そんなイエス様なので、こんどは誘惑にあう私たちを助けることができるのです。誘惑に打ち勝った救い主として、私たちを助けることができるのです。ですから、誘惑にあうときに、イエス様に助けていただきましょう。イエス様にお祈りするのです。お祈りして、イエス様に助けていただくのです。誘惑に打ち勝つ秘訣は、お祈りすることです。

聖書を学び、またお祈りすることで、神様から離れないで、神様と一緒に生活していきましょう。聖書を学び、お祈りすることで、イエス様からはなれず、いつもイエス様と一緒に生活していきましょう。もう一度、イエス様が誘惑に打ち勝った、聖書の言葉を見ましょう。

「人はパンだけで生きるものではない。神の口から出る一つひとつの言葉で生きる」。

(川杉安美)

[今週の暗唱聖句] ヘブライ人への手紙 2章18節

事実、御自身、試練を受けて苦しまれたからこそ、
試練を受けている人たちを助けることがおできになるのです。



〈ねらい〉

イエスさまに助けていただいて、わたしたちも悪魔に打ち勝とう！

〈展開例〉

1. 「悪魔」って何？ どんなふうと思うか？

→子どもたちと話し合う。

こわい

いじわる

わるいことをする

目に見えない。

2. イエスさまから引き離す者。

怖そうだけど、逆にやさしそうなふりをしてわたしたちの心の中に入ってきて、うまいことを言って、イエスさまから引き離そうとするんだ。

どうしてかな？

→わたしたちと神さまが仲よくすることが大嫌

いだから、何とかして邪魔をしたいんだよ。

→わたしたちがイエスさまを信じて喜んで生きることがいやなんだ！ イエスさまを信じないようになりたいんだよ。悪魔はわたしたちが

イエスさまを信じないのが、一番嬉しいんだ！ だからわたしたちに（イエスさまから引き離すための）いろいろな悪い誘いをしてくる。

3. 悪魔に負けない（だまされない）ようにするにはどうしたらいい？

→まずは教会に来て神さまを礼拝しよう！ 賛美しよう！

→神さまのみことばを聴こう！（聖書を学ぼう！）

→お祈りをして、悪魔に勝ったイエスさまに助けていただこう！

イエスさまを信じて、離れないでいれば大丈夫！ イエスさまといっしょならば悪魔に勝てる！

〈お祈り〉

神さま、小さく弱いわたしたちをお守りください。いつもわたしたちとともにいて、悪より救い出してください。アーメン。



〈ねらい〉

子どもにとって、神様から引き離す力とは何でしょう。誘惑にあわれ、勝利されたイエス様が私たちと共にいてくださることを確認しましょう。

〈はじめに〉

寒い中、子どもたちは元気に教会に来ました。神様の招きにに応じてくることができた喜びを子どもたちに伝えましょう。今日の前に居る子どもの数はもしかしたら、少ないかもしれません。けれど、今送られてきた子どもたちを大事にしないでどうして、次に送られてくる子どもを私たちは愛することができるでしょう。

〈御言葉に聴きましょう〉

- ①イエス様は、悪魔から何を受けましたか。
- ②イエス様はどこに行かれましたか。
- ③イエス様は何日間断食をしましたか。
- ④イエス様はおなかがすきましたか。

〈展開例〉

みなさんは、どうして教会に来るようになったのでしょうか。お父さんやお母さんに赤ちゃんの時から連れられてきたから、お友だちに誘われたから、兄弟で来てるから、いろんな方法で来るようになりました。学校のお友だちで、教会に行っている人はいますか。反対に、みなさんが教会に行っていることを面白がったり、反対したりする人は回りにいませんか。

今日のイエス様は、荒れ野という石と岩がごつごつした所にいます。そこには、イエス様と悪魔がいました。悪魔は今には目に見えませんが、神様からわたしたちを引き離そう、引き離そうとする力をもった存在です。その悪魔がイエス様を、イエス様が心から信頼している神様から引き離そう、神様の言うとおりにイエス様が従がえないように邪魔しちゃおうと一生懸命、イエス様を試そうとしたことが、今日のお話です。

40日間何にも食べないで神様とずっとお交わ

りをしていました。でもお腹はベコベコです。悪魔は「目の前にある石をパンにかえてごらん、神の子どもだからそれくらいできるでしょ」とイエス様に言います。でもイエス様は「神様の口から出る一つひとつで人は生きるのです」と悪魔の言うとおりにしませんでした。悪魔に勝ちました。次に悪魔はイエス様を高い所に連れて行って「ここから飛び降りてごらん。神様が守ってくださるでしょ」と言いましたが、イエス様は「神様を試してはいけません」とまた、悪魔の誘いを断りました。悪魔に勝ちました。

最後に悪魔は「わたしを拝んだら、目の前に見えるものをすべてあなたのものにしてあげましょう」と誘いました。でもイエス様ははっきりと「わたしはただお一人の神様を信じます」と悪魔の誘いを断りました。イエス様は悪魔に勝ちました。すべて、神様の言葉で悪魔に勝ちました。

わたしたちも神様の言葉—聖書の言葉から離れないようにしましょう。これが、神様からわたしたちを引き離そうとする力から、ただ一つ守られる方法です。神様の言葉を①聴く②読む③書く④覚える⑤心の中で何度も思う……聖書の言葉から離れない方法です。一人ではむずかしいですね。もっと大きくなると自分でできるようになります。今、できることは、教会で聖書のお話を聞いて、暗証聖句を何度も自分の口で言ってみる、一日一度は必ず声に出してみる、教会のお友だちと聖句を覚えあう。神様は必ず勝利を与えてくださいます。

〈お祈り〉

神様、この一週間、悪魔の誘惑からお守りください。そして勝利を与えてください。アーメン。



〈ねらい〉

誘惑に勝利されたイエス様だから、私たちを悪魔の誘惑から助けてくださることを学ぼう。

〈展開例〉

私たちを誘惑することとは、何か考えてみましょう。それは、やるべきことがあるのに、その他のことをしたくなる誘惑ですね。学校や塾。買い物に行った時や、遊びに行った時。家にいる時はどうでしょうか。いろいろと挙げてみましょう。(教師は、生徒が挙げたするべきことが、大切なことだということを各人に対して確認し、共感する。先生も例を挙げてみましょう。複数挙げてもよい)。

みんなのやるべきことが、どんなことかわかってきたと思います。では、やるべきことで、一番大事なことは何でしょうか。

それは、神様に従うことですね。神様が一番正しいですね。ところが、悪魔は私たちに忍び寄って、誘惑をします。悪魔のすることはいつも決まっています。神様に従わせないようにするんですね。この悪魔と一緒に生きて、悪魔のようになりたくないかったら、戦わなければいけません。みんなは、悪魔と戦ったら勝てるでしょうか。その理由も教えてください。

実は、悪魔はものすごく強くて、人間は誰も勝てないのです。さらに、悪魔は頭がとてもしっかり、ひっそりと静かに私たちに忍び寄って、いつの間にか私たちの中に入ってきます。悪魔は、私たちが気が付かないようにして入ってきて、悪魔が喜ぶことを考えさせたり、行なわせたりします。自分の心の中で、悪い思いはありませんか。それを隠していませんか。神様が嫌がる思いを持っていますか。そしたら、悪魔の誘惑に負けないように戦わなければいけません。悪魔の誘惑に勝つた

めにどうすればいいでしょう。それは、悪魔に勝てるお方に助けてもらえば大丈夫です。今日の聖書を見てみると、イエス様は悪魔に心を奪われることなく、戦いに勝利しました。だから、このイエス様なら必ず悪魔に勝って私たちを助けてくださいますし、私たちはこのイエス様と一緒に生きていくことが大切です。

今日の聖書のお話を確認しよう。

①悪魔はイエス様を神の子として失敗させるために誘惑をしました。それぞれ挙げてみましょう。

- ・イエス様が空腹の時に、悪魔は石をパンに変えたらどうかと進めた。これは、神の言葉に生きないようにすることだった。
- ・神殿のてっぺんから飛び降りて、神様に守らせようとした。これは神様を試すことだった。
- ・悪魔を拝めば、世界の富を与えろと言った。悪魔を神様とすることだった。

②イエス様は、それぞれの誘惑で、聖書のどの言葉を用いて勝ちましたか。

- ・「人はパンだけで生きるものではない。神の口からでる一つひとつの言葉で生きる。」
- ・「あなたたちの神、主を試してはならない。」
- ・「あなたの神である主を拝み、ただ主に仕えよ」

③イエス様が用いた神の言葉を、私たちも覚えましょう。その意味を味わいましょう。

〈祈り〉

神様、私たちが悪魔に誘惑される時、どうかイエス様に頼りますから、どうか助けてください。イエス様が悪魔に誘惑された時に、語った聖書の言葉を思い出せますように。イエス様のお名前により祈ります。アーメン。



〈ねらい〉

誘惑に勝利されるイエス様を頼りとする。

〈展開例〉

①今日の箇所ではイエス様は、聖書の教えによって、悪魔を返り討ちにされた。悪魔が何なのか、細かいことは聖書を読んでもよくわからない。でも、悪魔が人の弱さにつけこんで、人を罪へと誘う存在というのはハッキリしている。罪とは神様からは離れていくことだ、と何度か話したと思う。つまり、悪魔は人を神様から引き離そうとする存在のことだ。誘惑という字は「誘って」「惑わせる」と書く。この世界には確かに、神様に背を向けて生きるような「誘い」があり、その「誘い」は神様と生きる人生を惑わそうとする、つまり神様を見失わせようとする。

②神様を見失ったままに辿り着くゴールは、破滅であると聖書は告げる。神様から引き離す悪魔の誘い。今日の聖書箇所はそんな悪魔の三つの誘いを語る。皆の身近な毎日の中に、破滅へと君を惑わす力が働いてはいないだろうか？ 悪魔の誘いは周到である。平たくいえば分かりにくい。だまされやすい。説教の中で「神様よりもパンが大事＝生活品が大事」という悪魔の囁きについて、食べ物やお金があっても、神様の思いに反するなら幸せにはなれないとあった。

Q. 君の毎日で「神様か？ 生活品か？」こんな判断を迫られることはないか？ 大きな目線でいえば人生設計。これが神様じゃなく食べ物を得ること、お金を得ることが一番となっているなら「ヤバイ」と感じたほうがいい。小さな頃に教会に通いながら、お金を得ること、良い暮らしをすることを人生の一番にして、教会から離れていく人、神様から離れていく人は悲しいことに数えきれないほどいる。

③じゃあ、そういう悲しい人生設計はどうやって築かれるのか？ それは毎日の小さな誘惑に流され続ける中で凝り固まっていく。沢山稼ぐために、良い会社。良い会社に行くために良い学校。良い学校に行くために沢山の勉強。これはこれで、人生を豊かにするのに大切なものだろう。しかし、そのことで教会との繋がりが薄くなったり、神様から離れていく流れがそこにあるのなら、それは「ヤバイ」生活リズムである。

④自分の判断が「ヤバイ」かどうか、簡単なチェック方法がある。それは、君の選ぶことは聖書が応援してくれるようなことか？ という判断である。それは、イエス様が応援してくれることか？ と言ってよいだろう。君が神様から離れて破滅しないように、十字架に釘づけにされ、命を捨てられた方がいる。このイエス様に見つめられて、応援されるようなことならバンバンやればいい。でも、申し訳なくなるようなことなら、それは神様の顔を見れないこと。神様に背中を向けて離れ去りたくなることに違いない。

⑤そうは言っても誘惑の多い日本である。さらに正論を突きつけられても、それだけで人は変わらない。だからこそ、私たちの心を造りかえる力を持ち、悪魔を追い払う力を持つイエス様に助けを求めることが人生で不可欠なわけだ。先陣を切って悪魔に勝利されたイエス様を頼みの綱として、君の一週間が誘惑から守られる日々となることを願う。

〈祈り〉

誘惑に勝利するイエス様。御言葉によって正しい道を示して助けてください。アーメン。

テキスト マタイによる福音書 4章18～22節

預言者イザヤの言葉どおりに、主イエスは、ガリラヤから伝道を始めました(4:12以下)。弟子を招いた後、人々に教え、いやしの業を行い、主イエスの評判が広まっていきました。これが、最初のガリラヤ伝道の要約です。

さて、主イエスが漁師を弟子に召し出し、ガリラヤの伝道活動に彼らを伴わせます。主イエスが、ガリラヤ湖のほとりをおられた時、二人の漁師、ペトロとアンデレをご覧になります。彼らはガリラヤ湖の浅瀬で網を打っていて、まさに仕事当中でありました。その彼らに、突然主イエスは「わたしについて来なさい。人間をとる漁師にしよう」と言われたのです。「わたしについて来なさい」とは、招きの言葉です。この言葉に、「人間をとる漁師にしよう」という約束の言葉が伴いました。この主イエスの言葉は、彼らがすぐに従うために十分な言葉であり、彼らはすぐに従いました。

仕事中に神様からの召しが突然来る様子を福音書はよく伝えています。受胎告知、羊飼いへの降誕の知らせや、ペトロたちの召命、またレビの召命や、ザアカイの場合もそうでした。共通していることは、突然の召しでありました。しかし、どの場合も、召される側にとって従うのに十分な言葉や仕方で、神様は迫られたのです。ここで、主イエスはそのように招いてくださいました。

ペトロとアンデレは、バプテスマのヨハネの弟子でした(ヨハネ1:35-42)。主イエスのことを既に聞いていました。そうであれば、彼らは、主イエスが神の子であり、神の国を建設なさることをきちんと思い巡らしていたに違いありません。「すぐに従う」ための準備はバプテスマのヨハネによって始まっていたのです。

そして、彼らは主イエスに声を掛けられた時、「すぐに」手に持っていた網を捨てて、従いました。ペトロとアンデレが、まず「すぐに」従います。

また、続いてヤコブとヨハネがやはり「すぐに」に従いました。「すぐに従う」という姿がここで繰り返されており、まさに主イエスの弟子になるために、すぐに従うことが相応しいことでした。

召された彼らは、漁師でした。漁師とは、決して世の知者や権力者ではありません。しかし、その彼らを主イエスは、召し出されたのです。身分がどうであるかではなく、神の言葉に整えられたものが、神に召しだされるのです。その人は、すぐに従うことが求められます。

さて、ゼベダイの子ヤコブと、その兄弟ヨハネは、仕事だけでなく舟と父親までも残したとあります。父親は大切です。「あなたの父母を敬え」とあるとおりです。ただし、父親を無責任に見捨てたものではありません(マルコ1:20を参照)。私たちも自分が目指す働きのために、決心して親元を離れることがあります。親を捨てたわけではないでしょう。同じように、彼らは神様のために、決心をして主イエスに従っていったのです。

父親のゼベダイが船で網の手入れをしていましたから、親も漁師であったということです。少なくとも漁師を親子二代に渡ってしています。三代以上だったかもしれません。周囲から漁師のベテラン家族とみられていたことでしょう。しかし、それを主イエスのために、犠牲にしました。主イエスに従うということは、実に家族の絆以上に重要なことであったのです。

「人間をとる漁師にしよう」という約束は、その後、そのとおり彼らに果されました。

(酒井啓介)



テキスト マタイによる福音書 4章18～22節
参照カテキズム 子どもカテキズム 問1

〔単元のねらい〕

「一期一会」という言葉があるが、イエス・キリストとの出会いは、私たちひとりひとりにとってそうした言葉をもっても言い表し得ない、幸いな出会いであったことを思う。今朝の聖書箇所は四人の漁師たちが主イエスと出会い、主イエスの弟子となって従っていく場面である。主イエスに出会うことの絶大な価値と恵みゆえに、このお方に会った者たちはいっさいを捨ててこのお方に従っていくのだということ、従わざるを得ないのだということを感じたい。

「わたしについて来なさい」

出会いは私たちの人生にとってとても大切です。両親や兄弟、先生や友人たちとのよい出会いを与えられるのは幸いなことです。すばらしい出会いによって、私たちの人生は豊かに祝福されます。

けれども私たちの人生における最大の出会いは、イエスさまとの出会いです。イエスさまとの出会いによって私たちは人生の目的を知り、ほんとうの愛を知り、永遠の命を知り、尽きることのない慰めと揺らぐことのない希望があることを知ります。パウロという伝道者は、わたしはイエスさまを知った時、そのあまりのすばらしさに、それまでわたしが大事だと思って抱え込んでいたもの、誇りにしていたいっさいのものが塵あくたのようになった、イエスさまを知る喜びとひきかえにそれらのものを捨てることになっても、少しも惜しくなかったと語っています。イエスさまとの出会いは、それほどにすばらしい出会いなのです。

今朝は、イエスさまと出会ってイエスさまの弟子となった四人の漁師たちのお話をしたいと思います。

その四人の漁師たちの名前は（ペトロと呼ばれる）シモン、アンデレ、ヤコブ、ヨハネと言います。シモンとアンデレ、ヤコブとヨハネはそれぞれ兄弟でした。ガリラヤ湖の湖畔で魚をとる網をととのえていた彼らにイエスさまは出会われ、そ

してお声をかけられました。「わたしについて来なさい。人間をとる漁師にしよう」(19)。

するとシモンとアンデレは「すぐに網を捨てて従った」(20)のです。ヤコブとヨハネも「すぐに、舟と父親を残してイエスに従った」(22)のです。

四人の漁師たちは「すぐに」「従った」。聖書が語っているのは、そのことだけです。それは、聖書は大切なことだけを書いているということです。イエスさまに呼ばれたなら、すぐに従うこと。これが何よりも大事なことなのです。

でも、よくよく考えてみるならこれはびっくりするようなことです。イエスさまに従うこと、それは同時に「網を捨て」ること、「舟と父親を残して」いくことでした。漁師にとって舟を、それから商売道具である網を捨てることがどれほど大きなことであったのかを考えてみてください。それからヤコブとヨハネは、同じ漁師であったお父さんのゼベダイをその場に残してイエスさまに従いました。愛するお父さんともう一生会えないかもしれないのに、そうしたのです。

そのようにイエスさまに従うことは、それまで慣れ親しんできた仕事を捨て、かけがえのない家族と別れることでもありました。どちらも大きな決心が必要なはずですが、けれども四人はイエスさまのたった一言のみ言葉―「わたしについて来なさい」とのみ言葉によって、すぐにイエスさまについて行きました。これは、やはり驚くべきこと、

たいへん不思議なことではないでしょうか。

いいえ、イエスさまとの出会いにおいては、このようなことが当たり前のようにして起こるのです。ここに起こっていることは、不思議でも何でもないのです。なぜなら、イエスさまとの出会いは、この世の何ものにもまさってすばらしいことだからです。イエスさまに従う人生にまさって価値ある、すばらしい人生はないからです。

イエスさまは天国の喜びを見出した人を、畑に宝が隠されているのを見つけた人にたとえておられます。その人は宝を見つけて喜び、持っているものをすっかり売り払ってその畑を買うだろう、とおっしゃるのです。それからまた、よい真珠を探している商人にもたとえておられます。高価な真珠をひとつ見つけると、やはり持っているもの

をすっかり売り払ってその真珠を買うだろう、とおっしゃるのです。

四人の漁師たちも、イエスさまの中にその宝を、真珠を見出したのです。イエスさまと出会って、それまで依り頼んでいたいっさいのものが塵あぐたのようになったのです。イエスさまとの出会いのあまりのすばらしさに、すべてを捨てて従っていくほかはなかったのです。だれに命令されたのでも、強いられたのでもありません。大きな喜びにうながされて、そのようにしたのです。

私たちのひとりひとりにとっても、イエスさまは宝であり、真珠です。そしてイエスさまは私たちにも「わたしについて来なさい」と呼びかけておられます。この招きのみ声に従う時、私たちの命と人生はすばらしいものとなるのです。

(木下裕也)

[今週の暗唱聖句] マタイによる福音書 4章19節

イエスは、「わたしについて来なさい。人間をとる漁師にしよう」と言われた。

イエスさま...



〈ねらい〉

主イエスと出会って弟子とされたわたしたちは、主イエスに従っていこう。

〈展開例〉

1. 出会いについて語る。

皆の周りにはどんな人がいるかな！

お父さん、お母さん、おじいちゃん、おばあちゃん、幼稚園の先生、お友だち、教会の人たち……
今までにたくさんの人たちと出会いましたね！

2. 主イエスとの出会いについて語る。

主イエスと自分とがいつ出会ったか。

お母さんのおなかの中にいる時から……

お友だちに誘われて教会に来てから……

→主イエスと出会えた恵み、祝福を語る。

3. イエスさまに「わたしについて来なさい」と言われたら、すぐにイエスさまについていけるかな！

テレビを見ている時、絵本を読んでいる時、おもちゃで遊んでいる時……

→あとで！ ちょっと待って！ ではなく、すぐに今やっていることを止めてイエスさまについて行こう。

4. 日曜日の朝、イエスさまはわたしたちを呼んで〈招いて〉くださっています。

自分のやりたいことがあっても、それを止めて教会に行こう。

礼拝でイエスさまに出会って心からイエスさまを賛美し、御言葉を聴き、お祈りしよう。

→イエスさまは、そんなわたしたちを喜んでくださいます。

〈お祈り〉

父なる神さま、神さまの御名を賛美します。イエスさまに呼ばれたら、すぐについていく子どもとしてください。イエスさまのお名前によってお祈りします。アーメン。

〈やってみよう〉

「主イエスと共に歩きましょう」（『ふくいん子どもさんびか』90番、いのちのことば社）を先生が歌いながら、子どもたちの名前を一人ずつ呼んでいく。名前を呼ばれた子どもが一人ずつ「すぐに」先生の後ろにつながって電車のようなになる。



〈ねらい〉

イエス様の声に従ったお弟子さんたちを見ながら、わたしたちもイエス様に従う子どもであることを願う。

〈はじめに〉

私たちは、神様からの calling (召命) を受けて、日曜学校のスタッフとしての奉仕が与えられました。漁をするには道具が必要のように、私たちに聖書が与えられています。たくさんの魚を得るため場所や時間を調べるように、私たちは子どもたちの様子や霊的な状態を知らなければなりません。魚が釣れるまでじっと待つように、私たちも祈りと忍耐を持って子どもたちの成長を待たなければなりません。

〈御言葉に聴きましょう〉

- ① イエス様は何という湖のそばを歩いていましたか。
- ② シモンとアンデレのお仕事は何でしたか。
- ③ シモンとアンデレに、イエス様は何と言いましたか。

〈展開例〉

イエス様のお仕事がいよいよ始まりました。一番最初にイエス様のお弟子さんになった人たちが、シモン、アンデレ、ヤコブ、ヨハネという四人でした。その人たちのしていたお仕事が漁師です。漁師さんとはどんなことをする人ですか。毎日お魚を取るのがお仕事です。お魚を取るためには、ボートも必要だし、網も必要です。そのお手入れも大事なお仕事でした。いつ、どこに網を下ろしたらお魚がたくさん取れるか、ということも知らなければいけません。一生懸命漁師のお仕事

をしていた人たちでした。そんなところに、イエス様が出会われて、「わたしについてきなさい、人をとる漁師にしよう」と言われました。人をとる漁師というのは、イエス様を信じて従う人を集めるお仕事です。そういうお仕事をこれから私と一緒にしましょう、と声をかけられたのです。

シモン、アンデレ、ヤコブ、ヨハネの4人とも、すぐにイエス様の声に従いました。これまでしてきたお魚を取るお仕事をやめたのです。このイエス様に会わなければ、声をかけていただけなければ、まだずっと毎日ボートを出してお魚を取っていたでしょう。随分毎日のお仕事が変わりましたね。でも喜んでイエス様について行きました。イエス様に会って与えられる喜びが本当に大きいものだったのです。すべてを捨ててもいいと思うほどのものだったのです。これから先どうなるんだろうって不安に思わなかったのでしょうか。きっとそれ以上の喜びが心の中にいっぱいあったのでしょうか。

私たちはまだ小さな子どもですね。お家にはご飯やお洗濯をしてくれる家族がいます。まだ自分のことが全部自分でできるわけでもなく、大人の助けがなければ生きていけません。イエス様はそんな私たちに近い来てくれないでしょうか。声をかけてくれないでしょうか。そんなことはありません。いつも一緒にいてくださり、守ってくださり、御言葉を通して語ってくださいます。シモン、アンデレ、ヤコブ、ヨハネの喜びが小さな私たちにも与えられますように。イエス様のために小さな私たちも神様に用いられますように。

〈お祈り〉

神様、あなたに従っていく喜びを、毎日、私たちにお与えください。アーメン。



〈ねらい〉

イエス様の招きにすぐに従うことが、価値あることだということを学ぼう。

〈展開例〉

私たちは、大切なものを必ず持っています。みんなは何がありますか。(お金、家族、ペット、などなど。教師は、それは大切なものだということを理解し共感するよう努める)。では、もっと大切なものはありますか。今日の聖書は、とっても大切なものを見つけた人が、何をしたか、語られています。つまり、イエス様に招かれた人が、どうしたのかということです。

①シモンとアンデレは、何をしていたのでしょうか？

仕事(漁)をしていました。

②どうして、仕事(漁)をしていたのでしょうか。仕事をしなかったらどうなるのでしょうか？

仕事をしないと食べていけない。仕事は大事なことから。家の仕事として決まっているから、などなど。日常生活の中で、しなくてはならないことをしていたのです。

③彼らは、イエス様と出会います。さて、どちらから何と言って会いに行ったのでしょうか？

イエス様の方から。「わたしについて来なさい。人間をとる漁師にしよう」。

④どうしてイエス様のほうから会いに行ったのでしょうか？

シモンとアンデレを招くため。イエス様は、御自分の方からいつも招いてくださるお方です。今も私たちを招いておられます。イエス様は、神の子であるにも関わらず、罪人のもとへやってきて招きの声をかけてくださるんですね。

④そのシモンとアンデレはどのようにしたでしょ

うか？

「すぐに網を捨てて従った」。「船と父親を残してイエスに従った」。

神様にすぐに従うことが大切です。聖書には、彼らはすぐに従ったことが記されています。言い訳をして、「今はちょっと……。また今度、声をかけてください」と言ったりはしません。すぐに従うということが弟子に必要です。イエス様は、いつも私たちに「わたしについて来なさい」と呼びかけておられます。私たちは、イエス様にすぐに従い続けることが大切です。

⑤仕事のために、網や船が必要です。また、父親は当然大切な存在です。どうして、イエス様に従うために手放すことができたのでしょうか？

イエス様との出会いが、実に素晴らしいものだから。イエス様は、私たちに一番大切なこと知って、生きられるようにしてくださるから。補足) 一番大切なこととは何ですか。

「子どもカテキズム」問1の答、「私たちが生きるのは、私たちの神様を知り、神様を喜び、神様の栄光をあらわすためです。これが私たちの喜びです」。

⑥「人間を取る漁師にしよう」と言われた、彼らはイエス様に従って新しい道へ歩みました。イエス様が示される道へ、一緒に歩みましょう。

〈祈り〉

神様。イエス様が私たちを招いてくださることを感謝します。私たちが、いつもすぐに従い続けられるように助けてください。イエス様の言葉を捨てることなく大切に、他のものを捨てていくようにしてください。イエス様の御名によって祈ります。アーメン。



〈ねらい〉

イエス様に招かれていることを喜ぶ。

〈展開例〉

- ①今日の箇所はイエス様が四人の漁師を弟子とされたときの話だった。そこには、イエス様と出会うことで大きく人生を変えられた弟子達の姿があった。「出会い」とは面と向かって相手と接するときを起こされる。みんなにはイエス様と向かい合って接しているというリアリティーがあるだろうか？ イエス様に従って生きるというのは、ただ本に書いているイエス様の教えを読んで「ああ、良いこと言っているなあ」だとか「へえ、なるほどねえ」とかの共感を言っているのではない。今も生きておられるイエス様が、二千年前にペトロ達に語ったのと同じ言葉で君に語りかけているのである。「わたしについて来なさい」。これは、今日、生きているイエス様が、今日、君に投げかけている言葉である。

Q. 「わたしについて来なさい」と聞かれるイエス様に、君はどう答えるだろうか？これは人によって様々だろう。「どこに行くんですか？」こんなふうに質問を返す人がいるかもしれない。イエス様はどこかの場所を指してこの言葉を語られなかった。つまり、どこに行くかは問題じゃない。イエス様と一緒に過ごす毎日をスタートするように言われたのである。そして「ついて来い」ということは「後ろに従いなさい」ということだ。イエス様の生き様に、後ろからつき従っていく。イエス様が所々で語られる教えに聞き従っていく。イエス様を師匠とし、その弟子となる生き方について言われたのである。

- ②小さい時から教会にいる人にとっては「何を今

さら」なんて思うかもしれない。しかし、同時に「イエス様に従った毎日を送っているだろうか」、こんなふうに思われる言葉ではないだろうか？そして、そのように問うならば教会に通って来た長さにかかわらず、「従っている自分」「従っていない自分」「従いたい自分」「従いたくない（あんまり考えたくない）自分」、こんな自分の思いにぶつからないだろうか？

- ③まず、「自分は従えていないなあ」、こんな消極的な思いがあるかもしれない。でも、これは従っているからこそその足りなさである。問題ない。また、「従いたいなあ」、これはイエス様を求める声である。問題ない。今日、登場した弟子達も、完璧だから従ったんじゃない。弟子達はイエス様に叱られながら育てられていく。その中で少しずつ「従わせてくださるなあ」という積極的な思いと生き方に変えられていく。

- ④しかし「従いたくない（考えたくない）」という思いがあるなら、イエス様に従えない理由、従うことを考えたくない理由、どうかそれを教えて欲しい。そして祈らせて欲しい。イエス様に従うことへの不安、疑問、不満、色んな思いがあるだろう。だが、多くのことに教会は答えを持っている。そして、聖書の核心、また自分の確信から言うが、イエス様と出会い、その後を進む生き方はあらゆる不安、疑問、不満が消し飛ぶほど格別なものだ。その出会いは聖書の言葉をとおして与えられる。君がイエス様と出会うその時まで、聖書と語り合っていて欲しい。命をかけて君を求め続ける方の言葉は、常に君に差し出されている。「わたしについて来なさい」。

〈祈り〉

今、生きておられるイエス様。私を求めてくださるあなたについていきます。アーメン。

ここでは、神の子とされた者の聖化される姿が記されています。「幸いである」と繰り返されていますが、これは、「ああ、なんと祝福されていることよ」と、感嘆の声があげられているのです。

3節。「心の貧しい人々」とは、決して心が狭いことではなく、霊的に貧しい人々のこと。神の前に実に貧しく、何も持たないということであり、これを知り、心砕かれ、神に寄りすぎる信仰の厚い姿のことです。「天の国」とは神の支配であり、神の支配がそのような人々と共にあります。

4節。「悲しむ人々」という時の悲しみとは、自分の罪やこの世の悪を嘆き悲しむことですが、その感情を健全に出すことに重点が置かれます。その意味は、悲しむべき罪に対して、表面的に悲しむだけで済まらず、きちんと悲しみを心身共に実感し、行動に結びつけようとすることです。そして、ここでは神様にしっかり寄りすぎる人々を指し、そういう人々を神が慰めます。

5節。「柔和な人々」は、自己の存在が全く神によることを知る謙虚な人々のこと。柔和とは、モーセの特質。自我に基づいて主張するのではなく、主なる神に基づいて主張する人、すなわち、自我を手放し謙虚になり、その一方で神の御旨にしっかりと従うことが求められます。このような人をこそ主は大いに用いられて、主から多くのものを託されます。まさに地を受け継ぐのです。

6節。「義に飢え渇く人々」とは神様との正しい関係を、また、神様の御心に従うことをひたすらに、全生活において求める人のこと。「満たされる」とは、もともと「動物や人に腹いっぱい飽きるまで食べさせる」という意味です。義に飢え渇く人々には、キリストの義がいっぱいに満たされるように、神様が働いてくださるのです。

7節。「憐れみ深い」とは、もともと神様に用いられる言葉です。これとは対照的に、律法学者やファリサイ派の人々は、憐れみに欠けていました。彼らは、苦しみを罪の報いと見なしたからです。苦しむ者に対して、その苦しみが何の報いであるのかを探るのではなく、ここでは、ただ憐れみを注ぐことが求められています。これに応える者は、自ら神の憐れみを受け、また最後の審判で神の憐れみを受けます。神ご自身が憐れみ深い方であるように、弟子たちも互いに憐れみ深いことが求められています。

8節。「心の清い」とは、混ざり物ではない、ということであり、二心ではなく一心にひたすら神様を求めることです。まっすぐに神を求める人に、神はご自身をあらわされます。

9節。平和の根源は神にあります。この平和は、神と人との間の、そして人と人との間の平和です。破れた関係を回復させ、すなわち、人々が共に神を喜び、感謝し、また恐れ、悔い改め、一方で、神の言葉に従って、人を愛することです。世には争いが満ちており、和解をもたらす弟子の姿に、人々は神の子のしるしを見るのです。

10節～12節。自分の過ちゆえでなく、神の御心に従うゆえに迫害されるなら、かつて神に従った者も同じように迫害されたのであり、彼が天の国を受け継いだように、私たちも受け継ぐのです。だから、迫害を受けるからこそ、喜びます。聖書を開き、アブラハム、モーセ、ダビデが、それぞれ人々から受けた非難を見てみるとわかるでしょう。さらに、名も無い忠実な預言者たちも、また同様であり、皆、天の国を受け継いだのです。

(酒井啓介)



テキスト マタイ 5章3～12節
参照カテキズム 子どもカテキズム 問80

〔単元のねらい〕

これからしばらく、山上の説教について学んでいく。今回はその冒頭の、いわゆる「幸い聖句」である。ここに鮮やかに語られているのは、天国がこの世の価値観を根底から覆す場所であるということである。そして世の価値観が神によって転換されるところにこそ救いの恵みが示されており、そこにこそ私たち人間における真の自由と解放の道が開かれていることを覚えたい。

「イエスさまを迎える幸い」

イエスさまはある時、山に登られ、山の上でたくさんの人々にみ言葉を教えられました。天の国、神さまのみ国についての教えです。これからしばらく、イエスさまがこの時にお語りになったみ言葉を大切に学んでいきましょう。

今朝の聖書箇所では、イエスさまは天のみ国に入ることでできる人とはどのような人であるのかについて語っておられます。天国はすばらしい場所です。天国に入ることでできる人は幸せです。皆さんも、天国に入りたいと思うでしょう。

では、いったいどんな人々が天国に入ることができるのでしょうか。5章3節から10節までのところを見ると、それは「心の貧しい人々」「悲しむ人々」「柔和な人々」「義に飢え渴く人々」「憐れみ深い人々」「心の清い人々」「平和を実現する人々」「義のために迫害される人々」です。イエスさまはここで八回「幸いである」と繰り返しておられます。そして、これはとても強い調子でおっしゃったみ言葉です。これらの人々は何と幸いな人々でしょう、とイエスさまは叫ぶようにしておっしゃったのです。これらの人々こそ祝福された人々です、とおっしゃったのです。

ところで、皆さんはこのイエスさまのみ言葉を聞いて、どのように感じたでしょうか。ここには、私たちの考えからするととても幸せとは思えない人々も含まれているのではないのでしょうか。たとえば貧しいことは幸せでしょうか。反対に不幸せ

ではないでしょうか。人々は何とかなして貧しさから抜け出して、豊かになりたいと願うのではないのでしょうか。

悲しむ人は幸せではないのではないのでしょうか。飢え渴く人も不幸なのではないのでしょうか。義のために迫害されること、すなわち神さまを信じて正しく生きようとしたためにいじめられることも、不幸なことではないのでしょうか。

でも、イエスさまはおっしゃいます——心の貧しい人々、悲しむ人々、義に飢え渴いている人々、迫害されている人々、これらの人々は何と幸いなことでしょう。このような人々こそ、天国に入るのです。

この世の人々も、天国について、いろいろと想像するかもしれません。けれども世の人々が思い描く天国と、イエスさまが教えてくださる本物の天国とはちがっているようです。人間が幸せだと思っていることが、神さまの御目から見れば不幸せである。人間が不幸だと考えることが、神さまがごらんになると幸せである。そういうことです。

私たちは覚えておきたいのです。本当の幸せとは何か。それは人間のはかりではなく、神さまのはかりによってはかれるのです。そして私たちが幸せに生きる道はどこにあるのかも、神さまが教え示してくさるのです。

今朝は「心の貧しい人々は、幸いである」とい

うみ言葉の意味について学んでみましょう。

「貧しい」という言葉は、実は「空っぽ」という意味です。中身が入っていない、空の器を思い浮かべてください。それが「貧しい」ということです。

つまり心が貧しいとは、心の中が空っぽで何も入っていないということです。イエスさまは、心が空っぽな人こそが幸せな人です、とおっしゃったのです。

なぜでしょうか。心を部屋にたとえてみましょう。荷物が一杯に詰め込まれた部屋にお客さんを迎えることができるでしょうか。荷物を片づけて、とりあえず部屋を空っぽにしないと、お客さんは部屋に入ることができないでしょう。

私たちの幸せは、私たちの心にイエスさまをお迎えすることです。イエスさまが私たちと共に生きてくださることです。そのためには、心が空っぽである必要があるのです。イエスさまは私たちの心の扉をたたいて待っておられます。けれども心の中がいろいろなもので詰まっていると、イエ

スさまはお入りになることができません。心が空であるからこそ、そこにイエスさまをお迎えすることができるのです。イエスさまに住んでいただくことができるのです。だからこそ「心の貧しい人々は、幸い」なのです。

イエスさまを心にお迎えした人にとっては悲しむことも幸せです。イエスさまが慰めてくださるからです。飢え渴くことも幸せです。イエスさまが満たしてくださるからです。迫害されることも幸せです。イエスさまが守ってくださるからです。イエスさまはどのような貧しさも、苦しみも、悲しみも試練も、すべて喜びと幸いに変えてくださるのです。ここに天国の幸いがあります。

天国というと、死んでから行く場所のように思うかもしれません。けれどもそうではありません。天国とはイエスさまが私たちと共にいてくださる場所をいいます。イエスさまを心にお迎えするなら、天国は今すでに私たちのものなのです。

(木下裕也)

〔今週の暗唱聖句〕 マタイによる福音書 5章3節

心の貧しい人々は、幸いである。

天の国はその人たちのものである。



〈ねらい〉

「心の貧しい人々は、幸いである」との御言葉から、どのような人が神さまに喜ばれ、天の国に入るかを知ろう。この世の中の常識とくらべながらいっしょに考えよう。そうして、自分たちが救い主であるイエスさまを心にお迎えできるよう祈り求めよう。

〈展開例〉

1. 貧しいとは、お財布にお金がいっぱいあるかどうかなの？

わたしたちは貧しいという言葉を知ったら、お金がないことを思い浮かべます。貧しいとは、お財布にお金がなく、空っぽだということかな。

2. 心が貧しい人とはどんな人でしょう？

お金のことでなく、心が貧しいとは、ふだんは聞かないことです。でも、お財布のことから考えると、心が空っぽの人が心が貧しい人ということですね。わたしたちの心には、いろんな思いや願いがあります。「ゲームがほしいよう」とか「お

菓子をもっと食べたいよう」とか「○○ちゃんに負けたくない」とか。でもいろいろな思いが心をふさいでしまうとイエスさまが心に入ってこられなくなります。お部屋が散らかっているとお客様をお迎えできませんね。これと同じことです。

ですから、心が空っぽの心の貧しい人は、救い主イエスさまを心にお迎えすることができるので、幸いなのです。心が空っぽでは幸せでないように思えます。けれども、イエスさまをすぐ心にお迎えし、イエスさまに従うことができるのであれば、その人は神さまに喜ばれ、神さまの御国に生きることができます。

〈お祈り〉

神さま、わたしたちはいろんなことを思い、願いがあって、心がいっぱいになって、イエスさまに心を向けることができません。どうか、このわたしたちをかわれてください。心をきれいに空っぽにして、イエスさまをお迎えできますように。心からイエスさまを救い主と信じることができるようにお導きください。アーメン。

〈やってみよう〉

「かみよ わたしの」（『こどもさんびか』60番、日本基督教団出版局）を、声を合わせてうたいましょう。

♪「かみよ わたしの」♪

かみよ わたしの
このころに
みこえを たしかに
きかせてください

（こどもさんびか）

〈ねらい〉

イエス様が教えてくださる幸せを考える。

〈はじめに〉

私たちは時々、今、教会に与えられている子どもたちを一時的な小さな存在として見てしまうことがあるかもしれません。しかし、5年後10年後を考えてみてください。今の下級の子どもたちは小学6年生～中学生、高校生に成長します。中会や大会のキャンプに出席しています。全国の信仰の友が与えられます。信仰告白を考えます。神様から与えられた賜物を教会の中で用いられます。友人を礼拝に連れてきます。どんなに大きな成長が子どもたち一人ひとりに与えられていることでしょ。教会全体の祈りの中に子どもたち一人ひとりを置きましょう。

〈御言葉に聴きましょう〉

- ①イエス様はどこにおられますか。
- ②イエス様は立っていますか。座っていますか。
- ③イエス様の近くに寄ってきたのは誰ですか。

〈展開例〉

みなさんは、うれしい！ と思う時、どんな顔をしますか（笑う、ニコニコする）。うれしい！ と思う時、どんな動作をしますか（手を叩く、クルクル回る？）動物はどうでしょう。犬は分かりやすいですね。うれしい時は？ そう、しっぽをフリフリします。

今日の聖書は、イエス様が「幸い」について教えてくださっているところです。「幸い」という言葉はみなさんにとって、まだ難しいかもしれません。言い換えると「幸せ」です。たくさんの幸せを教えてください。聖書を見ると、「……は幸いである」が繰り返し言われています。読んでみると、どうも私たちが「幸せ」ということと違うみたいです。美味しいご飯が食べられたら幸せ、テストの点がいいと幸せ、運動会でリレーの選手に選ばれたら幸せ……とは違うみたいです。聖書を読んでみましょう。3節から12節。

私たちが思う、あったらいいなあ、こうなりたいなあという幸せ、私たちの心の中にある幸せと、イエス様が教えてくださる幸せは違いますね。だからこそ、私たちは本当の幸せを知ることが大事なのです。イエス様から教えていただかなければ、ずっと知らないまま、本当の幸せを知らないままで、あれかもしれない、これかもしれない、と幸せを探し続けていたかもしれません。イエス様はちゃんと教えてくださいました。

自分は大丈夫、何でも自分でできる、自分は間違っていない、正しい人間だ、自分が正しくてあの人が悪い、自分は人から助けられたり、優しい言葉をかけられたり、慰められたりする必要はない、だって、自分は強いから。だから自分は十分幸せ、と思うのは、イエス様から遠く離れたところにいます。聖書が教える幸せは、イエス様といつも一緒にいることです。イエス様が一緒にいてくださることが、わたしたちにとっての一番の「幸せ」なのです。なぜなら、イエス様が私たちを守ってください、助けてくださり、励ましてくださり、慰めてくださるからです。私たちはまだ子どもです。まだまだお母さんやお父さんに手伝ってもらわなければ、一人で何でもできません。だからもっと分かりやすいかもしれません。一人で何でもできるようになったら、イエス様の教えてくださる幸せが分かりにくくなりかもしれません。今、お母さんやお父さんの助けが必要なように、いつまでもイエス様の助けを必要としている私です、と言える神様の子どもとなりましょう。

〈お祈り〉

神様、幸せを教えてくださいありがとうございます。アーメン。



〈ねらい〉

天国の価値観を知って、その価値観に生きられるように祈り求めよう。

〈展開例〉

今日の聖書の言葉は、とても有名な言葉です。教会に来ていない人でも知っているかもしれません。でも、その意味をみんなちゃんと理解しているかどうかかわからない。みんなはここで、きちんと覚えておきましょう。

今日は、どんな人について、お話がありましたか。心の貧しい人々、悲しむ人々……つまり、天国に入る人ですね。心の貧しい人々や、悲しむ人々、このような人たちのことを、神様は「なんと幸いだろう」とおっしゃいます。不思議だと思うけど、私たちが幸いだなあと思うことと、神様が幸いだなあと思うことは同じとは限らないんです。

みんなが幸せだなあと思うのは、どういうふうになることだろう。また、どんな人やどんな友だちを幸せだと思うか、教えてください。

先生が小学生低学年の頃、同じ年の子が、ファミコン（今のWiiのようなテレビゲーム）のソフトを100個持っていて、いいなあと思いました。その子は、とても金持ちの家に住んでいて、おうちが綺麗で大きいんです。毎日、色んなゲームをできるし、それにたくさんの友だちが遊びに来ていて、とても楽しそうでした。学校では、その子の周りに友だちがたくさん。その子の言うことなら、友だちは何でも聞いていました。この子はなんていいんだろう、と思いました。本当のお話です。

そういう風に毎日、頭の中が楽しいことで一杯だったらいいななあと思いました。でもね、神様が

この人は幸せだなあと思われ、天国に入れるという人はどんな人だろう。考えてみよう。

例えば、心の貧しい人は幸いだと、神様はおっしゃいます。心の貧しい人は、毎日いろいろなことを考えていても、神様のことを考える心の場所をちゃんと開けて、神様に頼る人です。そして、そのための場所を大切にします。

もし毎日、いろいろな楽しみや、忙しさで心が一杯になっていて、神様のことを考える余裕も何もないっていう人は、心の貧しい人ではありません。心の中に色んなものを詰め込みすぎている人です。ここで、心の貧しい人は幸いであるっていう言葉を、反対の意味で、少し言い換えてみます。「心の貧しさを忘れたものは、不幸である。地獄は、その人たちのものである」。心の貧しさを、僕たちは忘れちゃいけないんです。ちゃんと心の扉を、神様に開いて、そして、神様に入って来てもらう場所を開けておかないといけないんです。みんなの心の中に、その場所があるだろうか。今、自分の心の中にあるものを、考えてみよう。

もし神様に入ってきていただくために場所を開けるとしたら、どうしたらいいか。何を捨てたらいいか、何を後回しにしたらいいか、考えてみよう。

そして、心の中へ、神様に入ってきていただくことをお祈りしましょう。

〈祈り〉

神様、私たちが世の中の楽しみで心を一杯にするのではなく、ちゃんと神様が心の中に入って来ていただけるように、場所を開けておくことができますように。イエス様の御名により祈ります。アーメン。



〈ねらい〉

天の国が与えられていることを喜ぶ。

〈展開例〉

Q. 皆はどんなときに「幸せ」を感じるだろう？
友達との楽しい時間、好きな人と一緒にの時間、うまい物をたくさん食べたとき、家でゴロゴロしているとき、人によって幸せは色々かもしれない。だけど、イエス様は今日の箇所、そういうこの世界のものと比べ物にならない段違いの幸せが与えられるということをお話しになった。※色々あるが3節に絞る。

①「心の貧しい人々は、幸いである、天の国はその人たちのものである」今日は、まず言葉のお勉強をしたい。ひとつめ「天の国」について。皆は場所をイメージするかもしれないけど、ここで言っているのはそういうんじゃない。イスラエルの人達は「神」という言葉を使うのに非常に慎重だった。それは、全能の御方を人間が呼ぶことを怖れ多いことだと感じていたから。だから、イスラエルの人達は「神」という言葉を使わないで神様のことを現すために「天」という言葉をよく使った。だから「天の国」というのは「神様の国」ということ。ふたつめは「国」について。これは「王国」という言葉。王国というのは王様の支配するところ。だから「神の国」というのは「神様の御支配」という意味。

「神様の御支配」が素晴らしいことであるということは、以前に何度か触れて来た。支配というのは、対象を豊かにするために守ったり、導いたり、整えたりすること。神様によって守られ、導かれ、整えられていくことこそ人の幸せであるとイエス様は告げられる。

②この「幸せ」はどんな人のものかと言うと「心の貧しい人」のもの。貧しいとは空っぽのこと。

そして、空っぽとは、神様を前に、自分の心に何も自慢できるものがないということ。こういう人に神様の御支配は現される。

③社会一般では「幸せ」＝「勝ち組」みたいに言われるかもしれない。「おれは、これだけの仕事をやっている。だから、これだけの暮らしができる」「おれは、これだけ賢く振舞ってきた。だから、これだけの生活を手に入れた」。こういう「幸せ」は自慢話と直結である。でも、力のある者が成功によって手にする幸せはイエス様の眼中にない。イエス様がこの御言葉を語られたとき近くにいたのは病氣や悪霊憑き、苦しみ悩みを抱える弱い人達であり(4:24)、神様が下さる幸せとはどれだけ弱くても手にすることのできる幸せであった。政治、経済、道德の混乱する現代、こんな不安定な時代に、もし力で握る幸せしか人間には用意されていないとしたら、君達は血眼になって競争社会を生きるだけの人生を送っていたかもしれない。しかし、イエス様が告げた幸せは、たとえこの社会でうまく生きられなくても、たとえ財産や健康を失ったとしても、神様に対してすがりつく心さえあれば決して無くなることはない幸せである。それどころか、それさえあれば人生の決定的な豊かさ、天地を造られた全能の神が自分を守り導かれるという確かな安らぎと充実を味わえる。人生の中で自分の弱さを覚えるとき、その弱さを見つめ、君のために幸せを用意されているイエス様の眼差しがあることを覚えて欲しい。その中で神様にすがりつく人に、必ず幸せは与えられる。

〈祈り〉

神様、弱い者にすばらしい恵みを与えてくださるあなたの憐れみに感謝します。アーメン。

主イエスは、弟子たちに対して、神の国を映し出す「世の光・地の塩」として生かされているのだという祝福を告げてくださいました。だからこそ、この世において、あなたがたは、天の父なる神さまのみ名があがめられるように生きなさいと命じられました(5:13-16、カリキュラムによると次週取り上げられることになっています)。

私たちは、いつも主イエスの言葉に聴き従って歩みます。そうしないと、主のお姿を誤って理解してしまうからです。17節の冒頭で、「わたしが来たのは……」と話し始められたのも、イエスに対して人々が抱いている過ちを正すためでした(9:13, 10:34, 20:28参照)。人々は主イエスのことを「律法や預言者を廃止するため(に来た)」と思っているようです。「律法と預言者」というのは、今日でいう「旧約聖書」のことです。なかでも、「律法」(創世記～申命記の五つの書物)は、ユダヤ人の中で重んじられてきました。主イエスは、この律法や預言者を廃止するためではなく、完成させるために来られたのです。

17節の主の言葉を受けて20節を見ますと、「あなたがたの義が律法学者やファリサイ派の人々の義にまさっていなければ、あなたがたは決して天の国に入ることができない」と記されています。さらに21節以下では、「しかし、わたしは言うておく」とあるように従来戒めに対して、新しい戒めが具体的に示されていくのです(22, 28, 38, 34, 39, 44)。律法と預言者を完成することと、新しい戒めを語ることは、矛盾するのではないと思われるかもしれませんが、しかし、そうではありません。

「わたしが来たのは律法や預言者を……廃止するためではなく、完成するためである」(17)。ここで「完成する」と訳されている言葉は、「成就する」とも訳されます。主イエスは、律法が本来目指していることを実現させるために来られたのであって、律法そのものが不十分なものであった

ということではありません。「すべてのことが実現し、天地が消え去るまで、律法の文字から一点一画も消え去ることはない」(18)ほどに、神が与えてくださる律法は恵み深く確かなものです。

問題は、律法をどのような心で生きるかということです。「完成する」と対になって語られている「廃止する」という言葉は、「ばらばらにする」という意味があります。ユダヤ人たちは、神から与えられた律法をばらばらにしてしまい、本来あるはずの心を見失ってしまったのです。律法に従って正しく生きるとは、神の恵みのもとで生きることです。しかし、神の恵みを忘れて律法に生き始めるとき、律法は段々と歪められていきます。自分がいかに立派に生きることができるかを誇り、他者を裁くものとして用いられてしまうのです。律法学者やファリサイ派の人たちは、そのようにして自分で自分の義を立てていたのです。しかし、それでは天の国に入ることはできません。

主イエスが、この世に来られたのは、ばらばらになってしまった神の律法を元どおりに回復するためでした。主イエスは、私たちと同じ人間として、律法のもとで、律法が指し示す神の御心の中を生き抜いてくださったのです(マタイ7:12, 22:37-40参照)。また、「愛は律法を全うするもの」(ローマ13:10)とあるように、主イエスは神と人への愛をもって、律法を完成してくださいました。キリストの十字架によって示された神さまの愛を知り、神の救いを信じて歩み始めることを決心した者は、自分の罪を悔い改め、主イエスによって成就された神の掟に従っていく者へと変えられていきます。もう律法学者たちのように律法の大小に縛られることなく(19)、神が私たちを義としてくださる、この幸いと自由に感謝して、御心を求めて主に従っていくのです。(藤井 真)

テキスト マタイによる福音書 5章17～20節
参照カテキズム 子どもカテキズム 問5, 24

〔単元のねらい〕

旧新約における神の救いの歴史をカリキュラムにする教案においても、今朝のテキストは極めて重要です。旧約聖書を軽んじるキリスト教がありますが、新約によって旧約の神の言葉の権威がそこなわれることは一切ありません。旧約なしに新約はありません。旧約がはるかに預言し、指し示した約束のキリストは、十字架につけられたイエスであると新約は語ります。主イエスは、旧約と新約との間を架橋され、私たちの救いを完成してくださいました。マタイは、主イエスこそ聖書の言わば主人公、そして私たちの唯一の義だと告げます。私たちの救いは、何から何まで、主イエスとその恵みによるものであること、イエスさまが主であることを説きましょう。

「救いの完成者、イエスさま」

先週のおさらいですが、イエスさまは、ニコニコしながら、お弟子さんたちに語られました。「天国は、あなたがたのものです。あなたがたは天国に入れるのですよ。喜びなさい。わたしといっしょに喜びなさい」。お弟子さんたちは、このイエスさまのお話を聴きながら、深いところまではよく分からなかったとしても、きっと、こう思ったでしょう。「私たちは、イエスさまのおかげで、天国に入れてもらえるんだ。嬉しいなあ。幸せだなあ」。

さて、そんなお弟子さんたちは、今朝のイエスさまの説教を、どんなふうに聴いたのでしょうか。イエスさまはおっしゃいました。「あなたがたの義が律法学者やファリサイ派の人々の義にまさっていなければ、あなたがたは決して天の国に入ることができない」。義というのは神様の正しさ、正しい行いという意味です。お弟子さんたちは、もしかすると、さっきの喜びもつかの間、みんなシュンとなってしまったかもしれません。なぜなら、お弟子さんたちは皆、普通の人たちだからです。むしろ、マタイさんなどは、ファリサイ派の人たちから見たら、近づくのも嫌がられるほど、神さまから遠く離れた悪い仕事をしている人、徴税人でした。

もしかしたら、こんなふうに思ったかもしれません。「ああ、私たちは、あの人たちのように聖書の言葉を研究する力もない。それをちゃんと守って、きちんとした生活をしてきたこともない。まして、あの人たちよりももっと、神さまの掟を守らないと天国に入れないのだったら、絶対、無理だな。やっぱり、天国に入るためには、皆から立派だと誉めてもらえるような人でないとダメなんだ……」。

いえ、ばくたち私たちだって、イエスさまの御言葉を間違えて聞いてしまったら、きっと、そんな風に、がつくり、うなだれてしまうかもしれません。

さて、それならイエスさまは、律法学者やファリサイ派の人たちのことをほめておられるのでしょうか。「わたしの弟子であるあなたたちは、決して、あの人たちに負けないように頑張りなさい」とおっしゃるのでしょうか。まったく違います。むしろ、正反対です。あの律法学者さんやファリサイ派の人たちのようになってはならないのです。どうしてでしょうか。それは、彼らが、まるで旧約聖書には、神さまの掟を守った人だけが、天国に入れるのだと書いてあるように、間違えて考えているからです。しかも、自分たちは、神さ

まの掟をちゃんと守って、誰から見られても立派な信仰生活をしているのだ、だから、天国に入れるのだと、うぬぼれているからです。

けれども、もともと旧約聖書に、そんなことは書かれていません。そんな風に間違った教えを人々に教えていたのが律法学者たちでした。

イエスさまは、聖書の正しい教えを取り戻してくださいました。つまり、救い主を信じること、神さまの恵みの約束を信じることによって救われるという真理です。そしてその救いの御業をほかでもないイエスさまが実現されたのです。だから、イエスさまは救い主、キリストなのです。そしてこのキリストを信じる、ただそれだけで、ぼくたち私たちは100点満点にさせていただくことができるのです。

イエスさまの弟子たち、信じているぼくたち私たちは、あの偉い学者さん、ファリサイ派の人たちとは比べられないほどすばらしい義、つまり本物の救いをいただいているのです。ぼくたち私たちが掟を守ったからではありません。イエスさまが守られたから、救われたのです。イエスさまの義、正しさが、ぼくたち私たちに与えられたので、あの自分を立派な人とうぬぼれている人たちに、圧倒的にまさっているのです。

つまりイエスさまは、今朝のお話でも、「君たちは、幸せなんだよ」と語ってくださるのです。

【さて、今日のイエスさまのお話しの中で、分級で、あらためて学んで欲しいことがあります。それは、イエスさまがこの地上に救い主として来られた目的です。それは、「律法や預言者」を廃止するためではないということです。つまり、旧約聖書は、もう古い！ 旧約なんて必要ない、なんてことを考えては間違いですよということです。むしろ、旧約聖書を完成するために来られたのです。

皆の中には、新約聖書しか持っていないお友たちもいるかもしれません。けれども、聖書というのは、もう一つの旧約聖書とあわせて聖書と言えるのです。どちらも必要です。旧約は、救い主でいらっしゃるイエスさまのことを予告しています。新約は、その予告が実現したこと、つまり救い主とはイエスさまであって、そのイエスさまが十字架につけられ復活してくださって天に昇られたことを証しています。つまり、新約には、イエスさまこそ旧約聖書を完成してくださったお方だということが書かれているわけです。

教会のすぐ近くのお家が今、壁の塗り替えをしています。大工さんが、足場を組んで、一階から二階まで綺麗にペンキを塗っています。今はまだその途中ですから、足場は組まれたままです。そして、それが完成したら、足場は片づけてしまうと思います。せっかく綺麗にした壁の邪魔になるからです。

確かに、旧約の中には、もう必要がなくなってしまった箇所もあります。たとえば、今は、礼拝の場所もその仕方も旧約のようにする必要はありませんし、してはいけません。動物をささげてはいけません。

けれども、神さまを正しく礼拝することはなくなりません。むしろ、もっともっと大切であることが分かるのです。イエスさまが教えてくださったように旧約聖書は、神さまの言葉として、これからもずっと、イエスさまが再び来られるまで、ぼくたち私たちにとって、いのちの言葉です。】

イエスさまが、あなたを天国に入れてくださいます。イエスさまを心から信じましょう。信じた人は、神さまの言葉を真剣に、守りたくなるでしょう。たとえ失敗しても大丈夫です。赦されていることを信じましょう。何度でも、「御言葉を守ろう」と立ち上がらせてくださいます。（相馬伸郎）

〔今週の暗唱聖句〕 マタイによる福音書 5章17節

わたしが来たのは律法や預言者を廃止するためだ、と思ってはならない。

廃止するためではなく、完成するためである。

〈ねらい〉

十戒を完全に守れないわたしたちの罪を赦すために、イエスさまが身代わりになって十字架にかかってくださったことの意味を理解する。

〈展開例〉

（事前に灰色と真っ白の色紙をハサミで切り、シャツの形を作ります。生徒一人につき各1枚準備し、分級のはじめに灰色のシャツを渡します。黒や茶色のフェルトペンも用意しておきます。）

わたしたちは生まれてからから今まで神さまの前にどんな生活をしてきたでしょうか？

（十戒の中から身近な罪の要点を上げ、神さまの前に罪を犯してきたことを知る。質問に当てはまるときフェルトペンで汚れをシャツに付けていきます。）

- ①まことの神さま以外のものを拝んだことがある。
- ②占いをして「今日は良いことが起こる」と思ったことがある。
- ③お父さんお母さんを大切にしないで、悲しませたことがある。
- ④友だちが自分の持っていない人形やゲーム機を持っていてうらやましく思ったことがある。
- ⑤悲しんだり、困っている人がいるのに知らない

ふりして通り過ぎてしまった……等々。

〈汚れを付け終わったあとで。〉

神さまの国に入るには汚れのない真っ白なシャツを着た人しか入れません。皆さんのシャツはどうですか？

最初に配った灰色のシャツは、わたしたちは生まれたときから罪があったことを示しています。

では、どうしたら良いのでしょうか？

（しばらく考える時間を与えます。自分の力ではどうしようもないことに気付かせます。）

救い主イエスさまがわたしの罪の罰を身代わりに十字架で受けてくださったので、神さまは、わたしたちのことを十戒を全部守った人のように見てくださいます。イエスさまを信じる時、真っ白なシャツをわたしに着せてくださるのです。

各生徒の汚れたシャツと交換して真っ白いシャツを手渡ししましょう。

〈お祈り〉

神さま、救い主イエスさまが十字架にかかってくださったことによって、わたしたちの罪を赦してくださいることを心から感謝します。アーメン。



〈ねらい〉

イエス様がこの世にお生まれくださった目的は、旧約聖書でずっと書かれてきた、救い主がお生まれになる、というお約束を実現するためである。イエス様というお方を通して、神様のお約束は実現した。このイエス様を信じることだけが私たちに必要なことである。

〈はじめに〉

子どもたちがちゃんと座ってお話を聞いてくれない、言うことを聞いてくれないということが繰り返されると、このまま教師を続けていいのだろうか、と不安に思うことがあります。迷いながら、悩みながら毎週子どもたちの前に立っている私たちです。イエス様は罪びとを救うためにこの世に来てくださいました。私たちは、このイエス様の大きな恵みと愛の中で子どもたちが成長するためにこのクラスに遣わされていることを覚えましょう。一人ではありません。教師の使命は、神様ご自身の使命です。ですから、神様ご自身が教師に必要なものは全て与えてくださいます。

〈御言葉に聴きましょう〉

- ①17節を読みましょう。
- ②「わたし」とは誰のことですか。
- ③イエス様が来たのは、律法や預言書を廃止するためですか。完成するためですか。

〈展開例〉

聖書には、「旧約」と「新約」があります。二つあわせて「聖書」と言います。どこからどこまでが旧約で、どこからどこまでが新約かわかりますか。旧約には39冊と言う書簡が集められ、新約には27冊という書簡が集められています。旧約と新約をあわせると全部で66冊ですね。

旧約と新約の関係についてお話ししましょう。旧約は、新約よりも分厚くて難しい言葉もいっぱい出てきます。でも簡単に言うと、もうすぐしたら、救い主がいらっしゃいますよ、という神様のお約束を書いています。そして、新約はそのお約束が本当に実現して、イエス様がお生まれになって、罪から救うために十字架で死んで、復活され、今は天に昇られたことを書いています。

今はイエス様が来られたので、もう旧約はいらない、というのは大きな間違いです。私たちには旧約も新約も大事なもののなのです。ある人たちは、自分勝手に聖書を読んで、自分勝手に神様に救われるルール、決まりごとを作って、一生懸命それを守っていました。そして自分たちこそ正しい、神様に一番に喜ばれる人間だと思っていました。でもイエス様は、そのような人を一番お嫌いになりました。イエス様は、神様がお与えくださった律法を神様が教えてくださった通りに守り、聖書を通して教えてくださいます。私たちはその通りにする力がなくても、イエス様を通して、力が与えられ、イエス様を通して、私たちは救いが与えられ、神様から喜ばれる存在となったのです。

イエス様を信じる私たちには、天国にはいることが約束されています。天国で大いなる者と呼ばれるくらい、神様から喜ばれるのです。私たちはこの天国に行くその時まで、イエス様にしっかりとつながっていなければいけません。でも大丈夫です。イエス様のほうが私たちの手をしっかりとつないでいてくださるからです。

〈お祈り〉

神様、イエス様をお送りくださりありがとうございます。どこまでもこのイエス様を信じて歩むことができますように。アーメン。



〈ねらい〉

イエス様は律法を完全に果してくださった方であることを学ぶ。

〈展開例〉

神様は、人間がどのように生きるべきか、人間に求めておられることを旧約聖書に書きました。それを律法と言うことがあります。旧約聖書は多くのページがあるから読むのは大変です。十戒を見れば、神様が人間に、十戒を守って生きて欲しいという思いを込めたことがわかるでしょう。

この戒めや律法は、言葉として存在しています。それを、完璧にやってみせてくださったお方がイエス・キリストです。実際に完璧にやってみせてくださったという意味で、イエス様を律法の完成者といいます。そのイエス様の活躍を知ることができるのが、新約聖書です。だから、僕らが、神様に喜ばれる行き方をしたいと思うなら、イエス様の生き方を知れば分かるんだね。

ところで、みんなはイエス様のことを知っているつもりで、実は知らなかったんだと思ったことがありますか。先生は、幼稚園に入る前くらいに、お母さんから神様を教えてもらって、信じていました。だから、困ったことがあるとよくお祈りしました。とにかく、神様がいて、神様は生きて働いておられるということを、強く強く信じていました。ところが、その一方で、神様が何を自分に望んでいるかなんて、実は全然知らず、とにかく信じていれば神様は自分の味方についてくれるんだと思っていました。神様の気持ちを、そっこのけにできてしまっていたんですね。

ここで先生が、小学4年か5年の頃にしてしまった罪をお話します。今から20年前ビックリマンシール（詳細は各自お調べください）が流行していました。ある友だちに家に遊びに行った時に、

友だちのシールを一枚盗んでしまったことがあります。その友だちはシールがなくなったことに気付きました。先生は怖くなって神様に、このことが見つからないように祈りました。神様助けてくださいって。

当たり前だけど、これは大変大きな間違いです。先生は、神様がいることを一生懸命信じていながら、神様が望んでいることを考えていませんでした。だから、神様が命じておられることを破り罪を犯して、友だちを悲しませてしまったのです。その時、「盗んではならない」と神様がお望みだと、きちんと知って理解していたら、こんなことをしなかったでしょう。

このように神様が、私たちに望んでおられることを、私たちは無視しながら自分が神様について考えたいように考え、自分の願い事ばかり祈り、結局神様が望んでいないことするという危険がいつもあるんだと思います。

「イエス様ならどうするだろう、イエス様が喜ばれることをしよう」。それがわかるために今、イエス様についてのお話をきちんと聴きましょう。

でもね。イエス様を知れば知るほど、私たちは、実は既に、大きな間違いをして罪を犯してきたことに気付くものですね。どうしたらいいでしょうか。

罪を心から悔い改めればよいのです。イエス様は、悔い改める人の代わりに、罪を負うだけでなく、律法を完全に果してくださったのです。そしてその果したことが、私たちのものとされるのです。

〈祈り〉

神様。私たちが神様が喜ばれる生き方をすることができるよう、イエス様を見上げさせてください。イエス様の御名により祈ります。アーメン。

〈ねらい〉

ファリサイ派の義にまさる義へと導いてくださるイエス様に感謝する。※「聖書研究」を軸に。

〈展開例〉

Q. 皆の中に、「神様から救われて、何でも赦してもらえるなら、何でもやりたい放題にやらしてもらいます」、こんな風にクリスチャンの生き方を捉えている人はいないだろうか？ そんなことはありません。これはイエス様に叱られる生き方です。それは「そんなんじゃ天の国に入れませんよ」と警告される生き方である。

① イエス様は、自分は律法や預言者＝旧約聖書を無視しないと言われる。旧約聖書の中心は救いの約束と神様の求められる生き方。イエス様は旧約聖書で神様が約束している世界の最後のときまで、旧約聖書にある神様の求める生き方、正しい行い（義）を大切にするようにと語る。そして「あなたがたの義がファリサイ派の義にまさっていなければ、あなたがたは決して天の国に入ることができない」と言われる。

② 二つの義（正しい行い）が比べられている。一つはイエス様に従う人の義。もう一つはファリサイ派という人達の義。「ファリサイ派の人々の義」だが、ファリサイ派という人達はちょう一生懸命に聖書の掟を守ろうとする人達だった。これは大切なこと。なぜなら聖書の掟とは「君達にはこうやって幸せになって欲しい」という神様の思いのつまった神様の求められる生き方だから。ただ、ファリサイ派の人達は、神様は掟を守らないと人間を救ってくださらないと考えた。つまり、神様の理想の姿にならなきゃ神様は見向きもしないという考え。正しく生きられるようになって初めて神様は相手をしてくれるというふうに「義」を捉えた。イエス様は天国に入る者は、そんなファリサイ派の「義」

より、もっとすごい「義」に生きる者と言われた。

⑤ じゃあ、ファリサイ派よりすごい「義」とは何だろう？ イエス様はこの後7章12節で「律法と預言書＝旧約聖書」の中心的教えは相手を思いやる心、つまりは愛だと言われた。こうすれば救われる、こうやれば自分は安全というんじゃないく、相手を思いやる真心から行う正しい行動、これがファリサイ派よりもすごい「義」である。

⑥ ただし、これは愛のある行動がないと天の国に入れないというんじゃない。天の国とは神様の御支配。と先週話した。そして御支配とは、神様によって守られ、導かれ、整えられ豊かにされること。そんな天の国はどんな人に与えられると話したっけ？ そう、神様の前に正しく生きられないと認められる、神様に頼ることしかできない心の貧しい人。イエス様に従って生きるとは、神様を頼みの綱として、神様と人を思いやって真心をもって正しく生きられるようにされていくということ。いうなれば「いいやつ」になっていくということ。「自分のような人間にはそんな生き方は似合わない」。成長期の君らは少し悪びれたキャラに魅かれるかもしれない。でも、大切な誰かにとって自分が「いいやつ」になれるなら、これは嬉しいことじゃないか？ イエス様は君をダメなままでも赦すというだけで手をひかない。君ともっといい付き合いができるように、ダメなところそのものも治してくださるのだ。自分が「いいやつ」へと変えられることを照れずに受け取って欲しいと願う。

〈祈り〉

神様、義に生きる者としてください。アーメン。

山上の説教は、主に従う弟子たちに語られた言葉ですから、ここで語られています「あなたがた」も、主の弟子たちであり、教会に連なる私たちキリスト者のことを指しています。主イエスは、ここで弟子たちに向かって「あなたがたは地の塩である。あなたがたは世の光である」とおっしゃっています。主の言葉によく注目しますと、「～になりなさい」と言っておられるのではなく、「～である」と事実を告げておられることに気がきます。「地の塩・世の光」という言葉は、よく人間の努力目標を表わす言葉として、誤って用いられてしまうことがあります。そうしますと、多くの人が、自分は地の塩・世の光とはどうてい言うことはできない。この世で何のお役にも立てていないと思ってしまうのではないのでしょうか。しかし主イエスは、私たちが努力するまでもなく、祝福をもって告げてくださるのです。あなたがたは、地の塩・世の光とされているのだと。

そのうえで、改めて主の言葉に耳を傾けていきましょう。「あなたがたは地の塩である」(13)。主は、この世界(地)において、あなたがたは「塩」であると主はおっしゃいます。塩は、料理の味付けや防腐剤として用いられるように、キリスト者はこの世にしっかりと味を付け、腐敗し墮落することを防ぐ働きをするのです。生活の中で塩がなくてはならないように、この世においてキリスト者はなくてはならない存在として世に遣わされています。次の、「あなたがたは世の光である」(14～15)も、キリスト者にはこの世を明るく照らす使命が与えられているということです。

もしキリスト者が、「地の塩・世の光」であることを忘れてしまうならば、塩気がなくなり、何の役にも立たない塩、もはや塩ではないようになってしまいます。また、ともし火を燭台に置かずに升の下に置いてしまうことも、全く無意味なことです。しかし、本来それはありえないことです。なぜなら、「山の上の町は、隠れることがで

きない」ように、光である自分を隠すことはできないからです。

16節では、光を輝かす生き方について、「立派な行い」というふう言い換えられています。ただ「立派な行い」とは、周りから、「さすがクリスチャン」と称賛してもらうことや、人々に気に入ってもらうために、愛想よく振る舞うことではありません。今回のテキストの直前には、「義のために迫害される人々の幸い」(5:10-12)が語られています。神さまに従って生きるときに、周りからほめていただけるのではなく、むしろ迫害を受け、皆から悪口を浴びせられるということです。それにもかかわらず、キリスト者が世に遣わされるのは、私たちをとおして、「あなたがたの天の父をあがめるようになるため」(同節)だからです。神が神としてあがめられるのは、人々の魂にキリストの救いが届くことによって起こります。ですから、キリスト者がなすべき立派な行いとは、福音を伝えることです。キリスト者として生かされている自分を喜んで証しすることです。

主イエスが、私たちのことを、「地の塩・世の光」と呼んでくださるのは、救いの光である(マタイ4:16)主イエスご自身が私たちの闇を照らし、心の腐敗をきれいにしてくださり、神さまの前に生きるに相應しい者へと造り変えてくださったからです。だからもう、私たちは役に立たない塩ではありません。誰かから捨てられても、迫害されることがあっても、神さまから投げ捨てられ、踏みつけられるような人生を歩むことはありません。私たちは、神の味を持った人間です。いかなるときも主に結ばれて光の子とされているのです(エフェ5:8-11)。この喜びは隠すことなどできないほどに輝いています。この喜びを隠さずに、光の出所であるキリストを示して生きていくことの中に、まことの平和も生まれるのです(9)。

(藤井 真)

テキスト マタイによる福音書 5章13～16節

参照カテキズム 子どもカテキズム 問65

〔単元のねらい〕

2月11日は、信教の自由を守る日です。今朝は、この日をおぼえて礼拝をささげます。1872年の「学制」から敗戦までのおよそ70年間、義務教育は国民学校で担われていました。必須の学科とされた「修身科」において、宗教・道徳教育がなされ、神官（神主）が担いました。つまり、学校とは国家神道の教育機関でもありました。戦後、この弊害を絶つために、憲法20条、旧教育基本法九条において、公立学校では特定の宗教教育は禁じられました。しかし、今、学校現場では、文科省によって「心のノート」が副読本として（税金で）配布されています。その内容は、「道徳的な良いことを言っている」との評価が少なくないと思います。しかし、わたしどもの目から見れば、極めて「神道的」な色彩が濃いものです。しかも、改悪された教育基本法によって、いよいよ「心のノート」が目指す、「国と郷土を愛する」心の教育が推し進められていく傾向は否めません。子どもの教会の教育にとって、子どもたちの置かれている学校教育の現実を知ることは、大切です。キリスト教教育こそ、人格教育の基礎であり、真実の意味で「心」「良心」を養い、磨く道です。人格は、生ける三位一体の神との関係において形成されます。教会学校・子どもの教会の尊い使命をいよいよ確信し、いっそう励んでまいりましょう。

「私たちは世の光」

「あなたがたは世の光である」。今日の暗唱聖句です。

最澄というお坊さんが開いた比叡山の延暦寺という有名なお寺では、「一隅を照らす」という言葉がとても大切にされています。自分が暮らしている社会、地域、学校などで、自分自身が光となつて、明るく照らす人になろうということだと思えます。

しかし、イエスさまは、「あなたがたがこの世界を明るく照らす人となりなさい」とおっしゃったわけではありません。あなたがたは今もう「世の光なのです」と、断言されました。

なぜでしょう。もともと、イエスさまは「わたしは世の光である」と自己紹介されました。イエスさまご自身が光そのもののなのです。これは、太陽と月の関係になぞらえることもできるかもしれません。太陽は自分で光ります。赤々と燃えています。しかし月は、太陽の光を浴びて、その光を反射します。晴れた満月の夜なら、それだけで、どんどん歩いて行けるほど、光を放ちます。

さて今、イエスさまの目の前には、愛するお弟子さんたちがいます。つまり、彼らは、世の光そのものでいらっしゃる主イエスの光を浴びているわけです。つまり、イエスさまはこうおっしゃったのです。「あなたがたはわたしの光で照らされているから、光っていますよ。あなたがたも世の光なのです」。

光の反対は闇です。そして、イエスさまはこの世界を暗闇と見ています。それは、自分とその考え、欲望を神にしまして、光でいらっしゃる神さまを、イエスさまを、拒絶してしまったからです。

ところが暗闇は、自分が真っ暗闇であることを分かっていません。むしろこんなふうに考えています。「教会のほうが暗闇だ、そんなところに行っても楽しくない」。その人たちは、自分の中に光がないので、こんなまったく逆さま、正反対のことを考えてしまうのです。そして、自分たちこそ、本当の光を持っていると考えて、光であるかのよ

うにふるまうことが多いのです。

皆さんの学校では、「心のノート」が配られているでしょう。

公立の学校では、イエスさまのことを教えてくれません。他の特定の宗教を教えることも法律で禁じられています。

けれども昔、今で言う小学校では、日本人はみな天皇の子どもなのだと教えられました。天皇は、日本という国を造った神さま、太陽の神さまの子孫で、天皇は神さまなのだと教えました。日本は、この天皇の国なので、「日の本」と言うのだと教えられました。つまり、世界で一番偉いのは、この天皇なのだ、日本はアジアの国々を悪い国々から守ってあげるのだと教えていました。このような教えをもって、アメリカやイギリスと戦争してしまいました。戦争に負けて、新しい憲法が作られてからは、そんな宗教を学校で教えることは禁止されています。

けれども実は、今でも、昔のような考えを持ち続けている大人の人たち、それを子どもたちにも教えたいと願っている人たちは、たくさんいるのです。

さて、お弟子さんたちは、そしてキリストの教会は、イエスさまの光を浴びて、はっきりと分かりました。ぼくたち私たちを明るく照らす光、生かす光、いのちを与える光とはイエスさまだけだということです。それを認めないことが暗闇だということです。

イエスさまからの光を浴びた人は、暗闇が分かります。何より、自分の心の中にも暗闇があることに気づきます。だからこそ、イエスさまの光を浴びたくなります。浴びなければ、元気に生きられないと分かるのです。

どうぞ、イエスさまの光を浴びましょう。それは、イエスさまの前に出ることです。お祈りすることです。今、ここでしているように、礼拝する

ことです。聖書のお話を聴くことです。そうすれば、光を反射して、ぼくたち私たちもそのまま暗闇を照らす人とされるのです。

でも、実際に、光を照らす人ってどんな人、どんなことをする人なのでしょう。それを考えるときもまた、イエスさまを見つめればいいはずで。イエスさまって、どんなお方ですか。どんなことを考えていらっしゃるのですか。どんなことをなさったのですか。イエスさまの真似をしてみるとよいはずで。

そして、すぐに分かります。イエスさまの真似をするのは、とても難しいということです。すぐに、意地悪な心が出てきます。自分勝手な弱い心が出てきます……。でも、大丈夫です。イエスさまを見つめ、イエスさまとお話しすれば、イエスさまの光がぼくたち私たちを照らし、清くしてくださるからです。

ですから、私たちににとって一番大切なことは、このイエスさまとお話しすること、向き合うことです。人間は、イエスさまとお話しするとき、本当の人間になることができるからです。イエスさまとお話しすればするほど、ぼくたち私たちの心は、きれいになり、深くなって、光りを反射し始めるのです。

今朝、ぼくたち私たちは、みんなこの光を浴びて、光の子どもです。

最後に、イエスさまを信じている先生とお話しすることも、大切です。分級で、先生とお話ししてください。学校の勉強は大切です。けれども、イエスさまのこと、神さまのことを学ぶことのほうが、比べられないほど大切です。

今、皆のお友だちはどこにいらっしゃるのでしょうか。暗闇の中にいながら、気づいていないのです。どうぞ、お友だちを誘って、一緒に光を浴びましょう。光の子として、イエスさまの光を広げていきましょう。

(相馬伸郎)

[今週の暗唱聖句] マタイによる福音書 5章14節前半

あなたがたは世の光である。

〈ねらい〉

「あなたがたは、地の塩・世の光である」と言われたイエスさまの言葉に注目したい。この言葉が、地の塩・世の光となりましょうという努力目標ではなく、イエスさまにあって、すでに地の塩・世の光なのであるということを伝える。

〈展開例〉

わたしたちの住んでいる社会は、神さまの言葉に目を向けようとしていない。

一見、豊かで住みやすい環境のように見えるが、

その心は神さまから遠く離れている。世の人々にイエスさまのことを知らせることが、「地の塩・世の光」としてのわたしたちの使命でもあることを伝えたい。

〈お祈り〉

神さま。わたしたちを、イエスさまにあって、地の塩・世の光としてくださっていることを感謝します。わたしたちが、イエスさまを信じ続けて、神さまに喜ばれるこどもとして成長していくことができますように。アーメン。

〈やってみよう〉

○「あなたがたは、地の塩・世の光である」と言われたイエスさまをおぼえ、地の塩ちゃん（くん）・世の光ちゃん（くん）とお互い呼び合ってみよう。

○塩の働き（味を整える、腐敗防止など）をおぼえながら、塩の使われている製品などの表示を見ながら、たしかめてみよう。

醤油・味噌・せんべい・スポーツドリンク・チーズ・食パンなど

○光の働き（暗闇を照らす）をおぼえながら、光るものに目を止めてみましょう。
太陽・星・月・電球・火・ろうそく・青色ダイオードなど。



〈ねらい〉

主イエス様は私たちを照らす光です。その光に照らされて、私たちも神様の子どもとして光ることができます。

〈はじめに〉

寒い毎日が続いています。風邪は流行っていないでしょうか。教師自身の健康は守られていますか。毎日の生活、仕事、家族の問題、学校の勉強、サークル活動、様々な中に置かれている中で、この分級の奉仕者として用いられています。忙しい毎日を送っている私たち自身が主に整えられ、御言葉を学び、子ども一人ひとりを覚えて日々祈る者でありますように。

〈御言葉に聴きましょう〉

- ①13節を読みましょう。
- ②あなたがたは、何だと言っていますか。
- ③14節を読みましょう。
- ④あなたがたは、何だと言っていますか。

〈展開例〉

イエス様は、お弟子さんたちに大事なことを教えられました。「あなたがたは地の塩ですよ、世の光ですよ」と言われたのです。どういう意味でしょうか。

お塩をなめたことがありますか。しょっぱいですよ。お塩は何に使いますか。みなさんは学校にすることが多いので、あまり使いませんね。家族の中で一番使っているのは、多分ご飯を作ってくれるお母さんやお父さんかもしれません。お塩はお料理に一番使われます。入れすぎるとそのお料理はおいしくない、ちょうどいいくらいに入れると、ああ今日のご飯はおいしかった！ということになります。それとお塩は食べ物を腐らせないという大事な役目もあります。お塩はとても大事なもののなのです。

世の光について考えましょう。光は何のためにありますか。暗いところを照らすためです。明るいところでは、懐中電灯もろうそくもいりません。暗いと何も見えなくなって、どこに何があるのか分からなくて困るので、私たちは光を照らして見えるようにします。光も大事なものです。

あなたがたは地の塩、世の光です、とイエス様は言われました。家族の中で、お友だちの中で、教会の中で、私たち一人ひとり神様に愛されている大事な存在です。特に神様をまだ信じていない人の中で私たちは、塩のように、光のように、大事ななくてはならない存在として生かされています。私たちにどんな役目があるのでしょうか。周りの人のことを大事にする、優しさをあらわす、イエス様のこと伝える。恥ずかしかったり、勇気がいる時もあります。でも大丈夫です。神様がその思いを、力をくださるからです。

「わたしは小さい火」(『ふくいん子どもさんびか』86番、いのちのことば社)をいっしょに賛美しましょう。

- ①わたしはちいさいひ ひかりましょう
わたしはちいさいひ ひかりましょう
ひかれ ひかれ ひかれ
- ②かくれましょう いいえ ひかりましょう
かくれましょう いいえ ひかりましょう
ひかれ ひかれ ひかれ
- ③あくまが ふいても ひかりましょう
あくまが ふいても ひかりましょう
ひかれ ひかれ ひかれ
- ④せかいのぜんちに ひかりましょう
せかいのぜんちに ひかりましょう
ひかれ ひかれ ひかれ

〈お祈り〉

神様、私たちをあなたのためにお用いください。
アーメン。

〈ねらい〉

神様を信じる者が、地の塩・世の光として特別な存在であることを学ぶ。

〈展開例〉

神様は、私たちのことを地の塩、世の光であると言われました。塩と光ができました。それぞれの役割は何でしょうか。

塩は、少量でも塩を少量でもなめると、ピリリと辛いね。塩には食べ物を腐らせず、よい状態のままにする働きがあります。塩はとても大切で、もし塩がこの世界からなくなったら実は大変なことになるんだよ。みなさんは、その塩です。

私たちが塩だということは、何かを腐らせない働きを持つわけですが、どういうことだろう。また、私たちが腐ってしまうというのはどういうことだろう。それは、神様の気持ちを何とも思わなくなっていて、悪事を何とも思わなくなってしまうことです。それに悪いことが何もわからなくなってしまうことです。反対に、神様は一番正しいお方ですから、神様のことを知れば正しいことがわかります。今、みなさんは大丈夫ですか？

自分は悪いことに染まらないと思っていても、まわりの友だちが隠れて悪いことをしたら、自分もついついつられてしてしまうとうことはないですか。あるいは、自分一人だけ、みんなから「わー、すごい！ わー、ありがと！」と言われて、注目を浴びる時に、気持ちが大きくなって、一瞬小さな悪を何とも思わなくなることはないでしょうか。

悪が小さくても、神様が悲しみます。同じように、皆さんも小さな悪でもしないようにしましょう。周りの友だちがやっても、自分も一緒になってやってはいけません。あなたは特別な塩な

んです。むしろ、それはだめだよと友だちに言うようになって、腐敗を止めるようにしましょう。そういう人を神様は喜んでくださいます。

聖書を見ると、塩気をなくなったら捨てられると書いてあるけど、塩気を無くすな、ということです。神様のことを知っている点で、あなたは特別なんですね。

それから、あなたは世の光と言われています。昔は電気がなかったので、ろうそくやたいまつが光でした。暗い部屋全体を照らすためには光はどこにおきますか。部屋全体から見えるところにおきます。私たちはこそこそ隠れて生きるのではありません。みんなの間で、神様が求めておられることを大切にしていきましょう。

光は、つけられて初めて光ります。神様がみんなをイエス様と結び付けて光らせてくださいます。イエス様は私たちのお手本ですし、私たちが清くしてくださるお方です。それに、イエス様だけができる特別なことをしてくださいます。罪をわかるようにし、神様が喜ばれることをできるように助けてくださいます。

そうすると、私たちが話す言葉や行なうことは、神様が喜ばれることをするようになります。神様が立派だと思うことをするようになるし、したくなります。私たちは、周りの人たちはそれを見て、神様を知ることができるようになるために、地の塩・世の光でいることを祈っていきましょう。

〈祈り〉

神様。周りのお友だちと一緒にいる時でも、神様の喜ばれることをできますように、私たちを強くして、地の塩・世の光としてください。イエス様の御名により祈ります。アーメン。



〈ねらい〉

無力な者を輝かせてくださる主に感謝する。

〈展開例〉

- ① イエス様は今日の箇所で、「人々が、君達の立派な行いを見て、君達の天の父をあがめるようになる」、こんな言葉を語られた。

Q. 皆は最近、立派と思える様なことをしただろうか？ 川で溺れている子犬を助けたり、人質になっている親友を助けに行ったり、そんなシチュエーションはめったにない。日常にある立派な行いとは、落ちた消しゴムを拾ってあげることだったり、隣の席のやつにシャーペンの芯をあげたりする程度のことだったりする。私たちの日常の中で輝くような歩みというのは本当に稀なものかもしれない。それどころか反抗期、思春期まっさかりの年頃である。人に連れない態度をとったり、誰かとぶつかりあったりなんてことのほうが多い人もいるかもしれない。

- ② しかし、イエス様はそんな君達のことを隠すことの出来ない輝く光であると言われる。それは、君達がイエス様という光輝く方に生かされているからである。君達がどれだけ「わたしの生活に輝くところなんてない」、こんなふうにしても、神様の愛を知り、イエス様の愛を知って生きるクリスチャンにはかならず隠すことの出来ないクリスチャンらしさ、誰かを思っている愛の業が溢れて来るというのである。

- ③ しかし、それは「なんだ。じゃあ、自然に好きなようにやってりゃいいんじゃないか」というのではない。イエス様は、君がクリスチャンらしさを失って日々を送るなら、それは塩気を失ったナンセンスなクリスチャンだ、と厳しく

言われた。先週、話した通りイエス様と一緒に生きていくとは、何でも赦されるから好き勝手に生きるというのではない。どんな罪をも赦されているからこそ、失敗を恐れずに積極的に人を愛することができるのだ。イエス様は命をかけて、君の人生を愛に溢れる日々に造り変えようとされるのだから。

- ④ 「出来ない。知らない。めんどくさい」。こんな思いもあるかもしれない。だけど、教会につながり、イエス様の教えに触れ、神様からの愛され方を知っている君の中には、同時に誰かの愛し方も養われていく。誰かに尽くせない自分のしよぼさを見つめれば「ムリ、ムリ」と引込みたくなるかもしれない。でも、そう思う心の裏には、愛のある日々にあこがれる心が絶対に潜んでいるはず。イエス様の言葉に触れ、愛に触れて生きるならば必ず君の内側には、誰かを愛そうとする思い、誰かを愛したいという思いがともされる。その思いを隠してしまうのではなく、大胆にその思いに乗っかって生きて欲しい。君を愛する神様の光は、そんな君をとおしてこそ、世界の隅々に在る闇を照らすのだから。

- ⑥ これは、学校の友達や神様を知らない人達と違う生き方かもしれない。大真面目に神様と人を大切にする生き方に「ウザイ、キモイ」、こんなことを言う人がいるかもしれない。しかし、そこでビビって、神様を知らない人達と同じライフスタイルに埋もれないでほしい。愛を目指す君の生き方は、君が思う以上に魅力と価値がある。成長期の君達に愛する心が育てられることを心から願う。

〈祈り〉

イエス様。愛の光を与えてください。アーメン。

テキスト マタイによる福音書 5章43～48節

〈マタイ5章43～48節の構造〉

マタイによる福音書5章43～48節は、43節、44節、45節～47節、48節の四つに分けられる。43節で、旧約聖書の律法が命題として提示される。44節で反対命題が記される。45節～47節で44節の反対命題を提示した理由が記される。48節で結論としての勧めがなされる。以下この四つの区分に従ってみていく。

〈命題—43節〉

43節では、旧約聖書の律法であるレビ記19章18節の「隣人を愛しなさい」が命題として提示されている。ただし「敵を憎め」は、レビ記19章18節には記されていない。レビ記19章で記されている「隣人」には、イスラエル共同体の外の人々(外国人)は含まれていない。主イエスは、「隣人を愛しなさい」という共同体の中での教えに対して、その裏側に「敵（共同体の外の人）を憎む」という行為があることを見ぬいて、敷衍して、『隣人を愛し、敵を憎め』と命じられている」と語ったと考えることができる。

〈反対命題—44節〉

主イエスは、共同体の中の人々を隣人として愛するだけでなく、共同体の外の人々（敵）をも愛するように命じている。共同体の外の人々（敵）とは、「自分を迫害する者」でもある。並行箇所ルカ6章27、28節では、「敵を愛し、あなたがたを憎む者に親切にしろ。悪口を言う者に祝福を祈り、あなたがたを侮辱する者のために祈りなさい」と記されている。ここで、敵は、「あなたがたを憎む者」、「悪口を言う者」、「あなたがたを侮辱する者」である。主イエスは、これらの敵のために祈るように命じている。

〈反対命題が提示された理由—45～47節〉

「敵を愛する」理由は、「天の父の子」となるためである。「天の父」は、マタイの特徴的な言葉である。ルカの並行箇所では、「いと高き方の子」（ルカ6:35）と言われている。「天の父」は、「悪人にも善人にも太陽を昇らせ、正しい者にも正しくない者にも雨を降らせ」方である。「善人」、「正しい者」は「自分を愛してくれる人」、「自分の兄弟」であり、「隣人」に対応している。ルカの並行箇所では、「自分を愛してくれる人」、「自分によくしてくれる人」（ルカ6:32,33）である。「悪人」、「正しくない者」は「敵」に対応している。主イエスによれば、「隣人」を愛することだけでは、報いを得られることではないし、優れたことでもない。「敵」を愛することで「天の父の子」となることができる。

〈勧め—48節〉

主イエスは、弟子たちに「天の父の子」となるために、「あなたがたの父が完全であられるように、あなたがたも完全になりなさい」と命じられる。この命令は、下記の旧約聖書の言葉との類似性を考えることができる。レビ記11章45節後半、「わたしは聖なる者であるから、あなたたちも聖なる者となりなさい」。申命記18章13節、「あなたは、あなたの神、主と共にあって全き者でなければならない」。

言うまでもなく、「天の父」は、完全な方であられる。主イエスに従う者は、この「天の父」のように「完全な者」へと導かれる。「完全な者」とは、「敵（共同体の外の人）を愛する者」、「自分を迫害する者のために祈る者」である。ちなみに、ルカの並行箇所では、「あなたがたの父が憐れみ深いように、あなたがたも憐れみ深い者となりなさい」（6:36）と記されている。（浅野正紀）

テキスト マタイによる福音書 5章43～48節
参照カエキズム 子どもカテキズム 問23

〔単元のねらい〕

「神の完全な愛をいただいて、罪を赦し、愛に生きることができるとを喜ぼう」。この目標へと向かうには、「敵を愛し、迫害する者のために祈る」ことがおできになった主イエスの十字架を前にして、私たちの愛が不完全なばかりか、そのように愛することなど到底不可能である事実、深く心を痛めなくてはならない。私たちの不可能と不完全を、キリストの完全によって可能となさる恵み深い父の御心を、若い兄弟姉妹に伝えたい。

「まったく愛のひとに」

「あなたの敵を愛しなさい」。昔も今も、この言葉を聴いた人は皆、その語り手の名を忘れることができません。イエスという名の御方のことです。100%神でありつつ、100%人となって、神の御心を人の言葉で語られました。実に多くのことを語られた中でも、とりわけこの御言葉は、この御方のご生涯とお働きをすぐに想い起こさせる、有名な教えなのです。

イエス様は教え始められます。「あなたがたも聞いておるとおり、『隣人を愛し、敵を憎め』と命じられている」(5:43)。「あなたの隣人を愛しなさい」。これは聖書の言葉です。モーセの律法(レビ記19:18)からの引用です。イエス様はこの教えを、大切になさいました。『心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい』。これが最も重要な第一の掟である。第二も、これと同じように重要である。『隣人を自分のように愛しなさい』(マタイ22:37-39)と。

「あなたの敵を憎みなさい」。この言葉は聖書にはありません。これは、聖書を教える当時の学者の言葉なのです。「愛することと憎むことを照らし合わせよ。愛するとは選ぶこと、好むこと。憎むとは選ばない、好まない、遠ざける、軽視する、無視すること。憎むべき敵を、愛すべき隣人から遠ざけよ。愛すべき隣人とは自分自身を愛してくれる人(5:46)のこと。愛してくれない者は憎むべき

敵である」。これが当時の聖書学者の教えでした。

愛を返してくれそうな人を選び好みする。返してくれそうもない者を遠ざけて憎む。愛とは互いの利益に適う限りにおいての友好関係である。そんな社会通念の中に生きていた人々に、イエス様は、全く新しい愛の掟を語られます。「しかし、わたしは言うておく。敵を愛し、迫害する者のために祈りなさい」(5:44)。「敵を愛しなさい」とは、「敵を選び好みせよ」とか、「愛してくれそうな敵を探し出せ」とか、そんな命令ではありません。イエス様は「敵」を「迫害する者」と言い換えられます。こちらを「憎む者、悪口を言う者、侮辱する者」(ルカ6:27-28)、敵意を抱いて危害を加える者、全く愛してくれない相手。「その敵を愛しなさい」と命じておられるのです。

「自分を愛してくれる人を愛したところで、あなたがたにどんな報いがあるのか。徴税人でも、同じことをしているではないか。自分の兄弟にだけ挨拶したところで、どんな優れたことをしたことになろうか。異邦人でさえ、同じことをしているではないか」(5:46)。愛のお返しが期待できる人を選び好みする。それは、世界中の人々にとって普通のこと、必要なこと、すなわち「友情、親愛の情」です。イエス様はそれをお認めになった上で、「愛」とはお呼びになりません。イエス様の仰せになる「愛」とは、互いの利益を全く望めない、一方的な愛のことだからです。「愛する」

とは、相手を選び好みしないこと、ひたすら愛し抜くことです。

この崇高な愛を要求なさったイエス様は、その理由を言い添えられます。「あなたがたの天の父の子となるためである。父は悪人にも善人にも太陽を昇らせ、正しい者にも正しくない者にも雨を降らせてくださるからである」(5:45)。「敵を愛し、迫害する者のために祈りなさい。それでこそ、天におられるあなたがたの父の子どもになれるのです」(新改訳)。神の子供にさせていただける約束は確かである。あなたがたは既に神の子供とされている。だから敵を愛しなさい。

「言うておくが、あなたがたの義(神の恵みの御業)が律法学者やファリサイ派の人々の義(人の善き行い)にまさっていなければ、あなたがたは決して天の国に入ることができない」(5:20)。敵を愛するとは、神さまの恵みを証しすることです。相手を選び好みせず、ひたすら愛する。この愛は必ず報われます。

「だから、あなたがたの天の父が完全であられるように、あなたがたも完全な者となりなさい」(5:48)。主はかつてアブラムに言われました。「わたしは全能の神である。あなたはわたしに従って歩み、全き者となりなさい」(創世記17:1)。主はさらにモーセに仰せになりました。「あなたがたは聖なる者となりなさい。あなたがたの神、主であるわたしは聖なる者である」(レビ19:1-2)。聖なる主に仕えて、聖なる僕となる。全き神に従って、全き人になる。これが聖書の教えの中心点です。

敵を愛し、迫害する者のために祈る。この愛の掟を、イエス様はご自分で守られます。あの十字架の上で果たされるのです。十字架の真下には誰がいますか。ナザレのイエスを処刑するローマ兵(敵の国の軍隊)です。ユダヤ人の王から剥ぎ取った衣をくじ引きで分け合っています。人間が神を黙らせ、人間が神を死に定め、人間が神に勝利し

たかのように、浮かれ騒いでいます。その彼らのために、世の罪を取り除く神の小羊(受難のキリスト)の血が注がれます。罪なき方の尊い命が罪人たちの犠牲とされるのです。そこでイエス様は祈られます。「父よ、彼らをお赦しください。自分が何をしているのか知らないのです」(ルカ23:34)。そして、息を引き取られます。

弟子たちはどこにいますか。彼らは十字架のキリストを見捨てて逃げ去りました。これまで本当に愛してくださった主イエスを、最後の最後に愛することができませんでした。愛してくださった方を愛せない弟子たちに、愛してくれない敵を愛するなど、できるはずがありません。それだけでなく、主を見捨てたということは、見殺しにしたということです。主の敵の仲間になってしまったということです。彼らもまた、十字架の真下で、主の死をただ待っている者たちと、何ら変わりがないのです。

彼らの姿こそ、このわたしの姿、そしてあなたの姿、紛れもないこの世の姿です。私たちは皆、十字架の真下にいるのです。いつのまにか私たちの額には、罪を赦す神の小羊の血が塗られています。私たちの両手には、命を死から取り返すキリストの血が滴っています。どんなに拭おうとしても、拭い去ることはできません。これこそ神の愛です。イエス様を見殺しにした罪人を赦す、一方的な愛がここにあります。

私たちの見上げる十字架には、キリストの体はありません。敵を愛された主イエスは、報われて、復活なさったからです。主イエスは生きておられ、今ここにおられます。あなたの傍らにおいてになって、こう仰せになるのです。「恐れることはない。あなたの罪は赦された。わたしの愛を受けなさい。そして、わたしに従いなさい。わたしの愛が全きものであるように、あなたがたも、全き愛の人になりなさい。それでこそ、わたしの弟子。それでこそ、天の父の子供である」。(二宮 創)

[今週の暗唱聖句] 創世記 17章1節後半

わたしは全能の神である。あなたはわたしに従って歩み、全き者となりなさい。

〈ねらい〉

わたしたちの愛は不完全だが、イエスさまの愛は完全だから、わたしたちもイエスさまにつながっていれば完全になれる。

〈展開例〉

皆さんは、嫌いな人はいますか？ 今いなくても昔いたとか？「嫌いな人を好きになりなさい」と言われたらどうしますか？

「はい、好きになります」とは言えないよね。だって、嫌いなんだから。わたしたちの心はわたしたちのものだけど、「嫌いなものを好きになれ！」と自分の心に命令しても、好きにはなれないよね。たとえば、嫌いなピーマン、嫌いと感じているのは自分だけど、その自分に「ピーマンを好きになれ！」と命令しても、好きにはなれない。わたしたちは完全じゃないから、自分の心も思い通りにはできない、いくら、ピーマンが身体によいこと

がわかってても食べられない。

嫌いな人がいないほうが幸せなことは分かっているのに、嫌いになってしまう。そんな弱いわたしたちのために、イエスさまは十字架にかかってくださった。わたしたちにはできないけれど、イエスさまなら嫌いな人も好きになるようにしてくださる。

(子どもたちに嫌いな食べ物を聞いて、にんじんと答えたらピーマンのところをにんじんに変えて話してください。)

〈お祈り〉

天の神さま、わたしたちは自分に意地悪する人には優しくできないのですが、イエスさまの十字架を思って、敵を愛することのできる人にしてください。アーメン。

〈やってみよう〉

暗唱聖句を

わたしは

全能の

神である。

あなたは

わたしに

従って

歩み、

全き者と

なりなさい。

創世記

17章

1節

とカードに書き分け、正しい順序に並べて、声をだして読んでみる。



〈ねらい〉

神様の愛は何一つ欠けたものではありません。私たちは誰ひとり完全な愛を持った人はいません。でも神様の愛を私たちは受け取ることができます。神様の愛を持って人を愛することができます。

〈はじめに〉

そろそろ、4月以降の日曜学校の体制を考え始めておられるでしょうか。教師の数を増やしたい、子どもが少ない、外に向かっての子どもの伝道をどうしたらいいのだろう、分級の内容を検討したい、それぞれの教師会では来年度に向けて話し合いが進められているでしょうか。労苦されておられる教師の方々の上に、また教師会の上に神様の導きと支えがありますように。

〈御言葉に聴きましょう〉

- ① 14節を読みましょう。
- ② 誰を愛しなさいと言われていましたか。
- ③ 誰のために祈りなさいと言われていましたか。
- ④ 48節を読みましょう。
- ⑤ あなたがたはどんな者になりなさいと言われていましたか。

〈展開例〉

学校では、大好きなお友だちがいますか。大好きなお友だちとはいつも一緒に遊びたいし、お友だちが学校を休んだら心配ですね。反対に、嫌いなお友だち、苦手なお友だちはいますか。なぜ嫌いなのですか。いじわるをされたり、いやなことを言われたりするのかもしれませんが。一緒にいたくないなあ、同じグループはいやだなあって思う時もあるかもしれません。私たちは、誰でも、どんな人でも、みんな大好きになるというのは、難しいことなのでしょう。できないことなのでしょう。

イエス様は、私たちに「敵を愛しなさい、自分を迫害する者のために祈りなさい」と言われました。どうですか。簡単ですか。一緒にいたくないなあ、いやなことされたり、言われたりすると嫌

だなあ、と感じる時、その人を愛しなさい、その人のために祈りなさい、と言われても、無理無理、と言いたくなるのが私たちです。

神様は良い人にも悪い人にも同じように雨を降らせてます。私たちに優しくしてくれる人、大好きな人、楽しい人だけと仲良くするのはだれでもできることです。好きな人と嫌いな人がいれば、好きな人を選ぶのが普通でしょう。誰もが当然と思っているでしょう。でも、イエス様は、私たちは天の父なる神様の子どもなのだから「敵を愛しなさい、祈りなさい」と言われます。嫌いな人を愛しなさい、嫌いな人のために祈りなさいと言われます。イエス様は、完全でない、欠けだらけの私たちのために十字架にかかって死んでください、私たちの罪の身代わりとなってくださいました。私たちがどんなにイエス様のことを裏切っても、イエス様はそんな私たちを赦してくださいました。私たちが言うこときかなくから、私もいじわるするよ、というお方ではありません。どこまでも完全な愛を持って私たちを愛してくださいます。その愛を、私たちは心いっぱいいただいて今生かされているのです。せっかくいただいたこの愛をしらんぷりしたらもったいないですね。この愛を好きな人のためだけでなく、ちょっと嫌いだな、一緒にいたくないな、と感じてしまう時にその人のために祈りましょう。チャレンジしてみましょう。

〈お祈り〉

神様、神様から愛されているにも関わらず、私たちは人を好き嫌いしたり、けんかをしたり、悪口を言い合ったりすることを赦してください。神様の愛を私の心に満たしてください。アーメン。



〈ねらい〉

イエス様が、愛することにおいて完全であったことを通して、まことに完全な人であることを学び、私たちも愛することにおいて従おう。

〈展開例〉

イエス様は、敵を愛し、迫害する者のために祈ることのできたお方でした。そして、イエス様は同じようにすることを私たちに求めています。「敵を愛し、迫害するもののために祈りなさい」。

私たちはこれをしているか考えてみよう。敵を愛し、迫害する者のために祈ってみたことはどれくらいあるだろう。では、そういう風にしないでいけなかった時はどれくらいあっただろう。思い出してみよう。

その時、敵を愛し、迫害する者のために祈ることは簡単だろうか。難しかったなら、それはどうしてだろう。あなたは何を守りたいんだろう。あなたは何を大切にしたいんだろう。

わかりやすく説明するために反対のことを言うけれど、「敵を愛さない」ことは簡単なことだろう。迫害する者のために祈らないことは、どうだろう。とても簡単だよ。それは、時には気持ちいいくらい簡単なことだよ。では、どうして簡単なんだろう。その時、あなたが考えていることは自分のことだけじゃないかな。自分のことを大切にし、神様のことを後回しにすると、これは簡単です。これはとても悲しいことなんだけれども、実はこの姿が罪人の姿です。神様を知らない罪人は、自分のことを大切にする方向へ、どんどん流されているんだよ。こういう人は完全な人だろうか。

完全な人はどんな人だろう。その人がイエス様です。イエス様は罪のない、完全な人だったから、自分のことよりも神様のことを大切にすることができたのです。

だから、イエス様は、罪人が忘れてしまっていた大事なことや、また罪人が自分では思いもよらなかった大事なことを、私たちに知らせることができたのです。それは、神様に喜ばれるように生きることです。神様に造られた人間がもともとすべきことでした。遠い昔、神様と人が平和に暮らしていた頃、古い古い時代に人間が無くしてしまった大事な記憶があります。それは、神様が人間に求めておられることです。その一つが、敵を愛し、迫害する者のために祈ることです。敵や迫害する人は自分に何の利益ももたらしません。でも、神様は私たちに何かの利益のためではなくて、ただ愛するようにと言われたのです。

何かのために愛するんじゃない。神様がそう言われるから愛するのです。私たちは神の子として生きる時、神様がそう言われるから、という理由で十分だと思います。

イエス様の愛をもう少し考えてみよう。イエス様の愛が最もよく表れたのはいつだろう。それは十字架です。自分のすべてを失いました。でも、罪人が救われるため、という神様の喜ばれることをなさったのです。イエス様は、神様を愛し、罪人を愛し抜かれました。

私たちは、また明日学校へ行き友だちに会い、また新しい友だちも増えていくでしょう。仲の良い子ばかりじゃないかもしれませんが、神様が喜ばれるためにも、イエス様のことを思い出して愛していきましょう。

〈祈り〉

神様。どうか、神様が喜んでくださるために、どんな人でも愛して、自分を傷つける人のためにも祈ることができるよう。イエス様、助けてください。イエス様の御名により祈ります。アーメン。



〈ねらい〉

人を赦す愛ある生き方を示してくださったイエス様に感謝し、その生き方を学ぶ。

〈展開例〉

Q. みんなには、「こいつとは上手くやれそうもない」、こんな相手がいるだろうか？ 血気盛んな中学生である。そんな相手のひとりやふたりいたところで不思議ではない。学校の中。友達の中。家庭の中。怒りをおさえられない相手というのは身近なところにいるかもしれない。

①昔、ある小学生がこんなことを言っていた。「けんかで自分から手を出すのは悪いこと。でも、相手からやられたのならやり返す。なめられたら終わりだ。やられっぱなしでいるなんて、弱い奴のすることだ」。彼は親からそう教わったらしい。そんな小学生にこう答えた。「やられて何もできないよりは、やりかえすぐらいのほうが元気があっていいんじゃない。殴れないよりは殴れるほうが強い心があるっぽいね。でも殴れるのに、殴らないやつが一番、強いやつ。やられて、やりかえすのは勝とうが負けようが所詮は相手と同じっちゃうことだ。両方、大したやつじゃない」。子供の美学にうったえて、怒りの矛先を引っ込めることを教えたかった。

②今日、イエス様が教えられたことは、怒りをひっこめるだけの生き方ではなかった。イエス様は、赦せないような相手を受し、相手のために祈るという、怒りを受へと変えるウルトラCの生き方を私たちに命じられる。想像して欲しい。顔を合わすたびに君と折りがあわない相手のために、その相手が幸せに満ち溢れるように骨をおり、そのために祈る自分を。相手から返ってくるのは、冷たい言葉や態度かもしれない。パン

チが返ってくることもあるだろう。そんな中で、どうして相手を思いやることができるだろう？

③イエス様は美学にうったえて、これをするようにとは言われない。神様の愛がそういうものだから、神の子である君もそうしなさい。シンプルにそう言われる。敵を受する生き方に向かったとしても根底にあるものが、「俺、イケてるな」こんな思いなのだとしたら、これは「イケてない」生き方である。イエス様は、神様から愛されていることを土台として、神様の愛に倣って敵を受するというとても高い生き方を教えてくださった。神様は、どれだけ、自分に唾をはきかけるような悪人であっても、相手の毎日に恵みをくださる。イエス様は、自分を殺そうとする相手であっても神様の愛を示され続けた。これは憎しみに支配されて心が擦り切れていく毎日から私たちを解き放つ言葉である。君が憎しみに捉われて心をボロボロにしていくのは、君を大切に思われるイエス様にとっても悲しいことである。同じ心を費やすのなら受することに心を割くように。これは怒りをおぼえる敵を消し去り、憐れみをかける受する相手に変えてしまう不思議な言葉だ。もちろん、心の弱い私たちには中々、身につく生き方ではない。しかし、イエス様は出来ないということを教えるために長々語られるのではない。出来ない君が、少しずつ出来ようになるために子供が少しずつ大人になるように、父なる神様の子供とされた君達を育ててくださる。この神様の愛に素直に応えたい。

〈祈り〉

私たちを受してくださる神様。あなたの愛に倣って生きられる者に変えてください。アーメン。

テキスト マタイによる福音書 6章19～21, 24節

〈全体の文脈と主題〉

マタイによる福音書6章19～21節、24節は、5章1節～7章29節に記されている主イエスの「山上の説教」の一部である。「山上の説教」において、主イエスは、6章19～34節まで、直接間接に、富を主題にして語っている。6章19～21節、24節は、直接、富が主題である。

〈マタイ6章19～21節〉**①構造**

主イエスは、19節で禁止命令、20節で肯定命令、21節では結論を語っている。以下、この区分に従ってみていく。

②禁止命令—19節

ここでは、「あなたがたは地上に富を積んではならない」と禁止命令が語られている。「地上に富を積んではならない」理由は、地上では「虫が食ったり、さび付いたりするし、また、盗人が忍び込んで盗み出したりする」からである。地上の富は、虫に食べられてなくなり、さび付いて腐食してなくなり、ある日突然、盗人に奪われてなくなってしまうものである。地上の富は、絶対でも永遠でもない。いずれは消えてなくなっていくはかないものである。主イエスに従う者は、消えてなくなる地上の富に心奪われてはならない。

③肯定命令—20節

ここでは、「富は天に積みなさい」と肯定命令が語られる。この理由は、天では「虫が食うことも、さび付くこともなく、また、盗人が忍び込むことも盗み出すこともない」からである。並行箇所ルカによる福音書12章33節では、「自分の持ち物を売り払って施しなさい。擦り切れることのない財布を作り、尽きることのない富を天に積みなさい。そこは、盗人も近寄らず、虫も食い荒らさない」と記されており、ル

カによる福音書12章31節の「神の国を求めなさい」という命令の続きとして語られている。主イエスは、同じ教えをマタイによる福音書19章21節でも、金持ちの青年に対して次のように語っている。「もし完全になりたいのなら、行って持ち物を売り払い、貧しい人々に施しなさい。そうすれば、天に富を積むことになる。それから、わたしに従いなさい」。

④結論—21節

主イエスは、20節で「富は天に積みなさい」と教えられたので、「富のあるところ」とは天であるべきなのである。主イエスは、天に心を向けることをここで勧めている。コロサイの信徒への手紙3章1～2節でも次のように記されている。「さて、あなたがたは、キリストと共に復活させられたのですから、上にあるものを求めなさい。そこでは、キリストが神の右に着いておられます。上にあるものに心を留め、地上のものに心を引かれなないようにしなさい」。

〈マタイ6章24節〉

ここでは、本当の主人は誰か、何を第一にするのが教えられている。誰も神と富の両方を主人とすることはできない。20節では、富を天に積むことが教えられていた。21節では、心を、富のあるところ、すなわち、天に向けることが教えられていた。以上の教えは、24節で教えられている本当の主人である神を第一とする生き方へとつながっていく。

〈全体のまとめ〉

主イエスに従う者は、天に富を積む者であり、それは、地上のことに心奪われてしまう者ではなくいつも天に心を向ける者である。そして、天に心を向ける者は、どんなときにも神を第一にして生きていく者である。

(浅野正紀)

テキスト マタイによる福音書 6章19～21, 24節

参照カテキズム 子どもカテキズム 問29

〔単元のねらい〕

「私たちの心はどこにあるのだろうか。心をまっすぐに神さまに向けよう」。地上の富ではなく、天の御父に仕えることこそ、私たちの宝である。その宝を天に積むには、神のために貧しくなること、貧しい隣人に施すこと（ルカ12:33）と教えられる。その営みが、主イエスに従うこと（マタイ19:21）にならなければ、心は自分の功績へ向かい、神の恵みに向かわない。貧しくなってくださった主への感謝に、心を向かわせよう。

「天に宝を積むとは」

「地上に富を積んではならない」、むしろ「天に積みなさい」、「あなたの富のあるところに、あなたの心もあるのだ」（6:19～21）。なんと味わい深い御言葉でしょう。私たちの宝のあるところに、私たちの心もある。そのように見てくださるイエス様は仰せになりました。「だれも、二人の主人に仕えることはできない」、「あなたがたは、神と富とに仕えることはできない」（6:24）。私たちは、地上に宝を積んで、目に見えるその宝に心を奪われるような生き方を選びません。そうではなくて、目に見えない父なる神さまに心を寄せて、天に宝を積む生き方を選びます。それが、イエス様の望んでおられることだからです。では、天に積むべき宝とは、いったい何なのでしょう。

イエス様の時代に、親から子へと語り継ぐ、ユダヤの知恵がありました。「わが子よ、生きている限り、いつも主を覚えなさい。罪を犯したり、主の戒めを破ったりしてはならない。命のある限り、正義を行いなさい。真理を行うならば、人はその行いのゆえに栄えるのだ。お前の財産の内から、喜んで施しをしなさい。貧しい人に顔を背けてはならない。そうすれば、神もお前から御顔を背けることはなさない。豊かなら豊かに、少ないなら少ないなりに施すことを忘れるな。そうすることで、お前は窮乏の日に備え、自分のために善い宝を積むことになる。施しによって、人は死から救われて、暗黒の世界に行かずに済むの

だ」（トビト4:5～10）。貧しい人のために施しをすることは、自分のために善い宝を積むことになる。それは、天に宝を積むことなのでしょう。

親から知恵を教えられ、一生懸命そのように生きてきた人がいました。イエス様と弟子たちが、ガリラヤを去ってユダヤの地方、都エルサレムへ旅に出ようとしていたところに、その人が近寄って来たのです。彼はたくさんの財産を持っていたようで（マタイ19:22）、都の議員もしくは会堂の役員だったようです（ルカ18:18）。このときの彼の姿は、尊敬する先生に熱心に教を乞う青年でした。走り寄ってひざまづき、切羽詰った雰囲気です。「先生、永遠の命を得るには、どんな善いことをすればよいのでしょうか」。財力や権力をもってしても、永遠の命を獲得することは不可能である。ただ善い行いだけがそれを可能にする。彼はそうわきまえている、信仰深いユダヤ市民でした。「なぜ、善いことについて尋ねるのか。善い方はお一人（アブラハム・イサク・ヤコブの神、イスラエルを贖われた主）である。もし永遠の命（天の国）を得たいのなら掟を守りなさい」（マタイ19:17）。青年はさらに尋ねます。「どの掟ですか」。「殺すな、姦淫するな、盗むな、偽証するな、父母を敬え、隣人を自分のように愛せよ」（マタイ19:19）。そこで青年は答えます。「そういうことは皆守ってきました。まだ何か欠けているのでしょうか」。イエス様はこの人を「見つめ

て慈し」(マルコ10:21) みました。彼の真剣な告白を受け留められたのです。彼の切実な心の叫びを聞き取られたのです。

裕福な青年、信心深い市民、愛すべき善人。彼が求めているものは、永遠の命の保証(天国に入る担保)でした。神の国が現れる前に、人の世にある間に、自分は確かに永遠の命を相続できる保証が欲しい、その担保として十分な善を積んでおきたい。これが求道者の願いでした。彼は一般市民に期待される以上に、施しに励んできたでしょう。人々から尊敬される模範的な善人だったでしょう。しかし彼の魂に平安は訪れませんでした。施しをどれだけ積んでも、永遠の命の保証は得られませんでした。

彼の生まれ育ちを見つめ、その思いと言葉と行いを慈しむイエス様は言われます。「あなたに欠けているものが一つある」(マルコ10:21)。「もし完全になりたいのなら、行って持ち物を売り払い、貧しい人々に施しなさい。そうすれば、天に富を積むことになる。それから、わたしに従いなさい」(マタイ19:21)。青年は気を落とします。憂いに満ちた心が暗い顔に表れます。そして悲しみながら立ち去ります。重荷を背負ったまま帰って行きます。

彼はどうして気落ちしたのでしょうか。「貧しい人々に施すこと」でしょうか。いいえ、そのような善き業なら、生まれ育って励んできたこと、彼の喜びであつたに違いありません。彼が憂いを覚えたのは「持ち物を売り払え」という勧めなのです。与えられた財産の中から施すことなら、これまでずっと励んできた。しかし、財産を放棄して施せなど聞いたことがない。彼にとっては途方もない勧めだったでしょう。さらに彼が重荷と感じたのは、「わたしイエスに従え(後に続け、弟子になれ)」という招きでした。永遠の命を得るため、善という宝を積むことなら、一生涯をかけて励んでゆきたいと思う。しかしイエスの弟子に

なることなど考えたこともない。都の議員(会堂の役員)の地位を捨てるなど思いも寄らない。それで彼は気落ちしたのです。

「わたしに従いなさい」。イエス様がそう語られたのは、裕福な青年を追い払うためでしょうか。模範的な市民を見下げるためでしょうか。いいえ、まったく逆です。どこまでもこの善人を愛するためです。この求道者を救うためです。彼を待つためです。彼がどんなに善を積んでも手に入れることができなかった永遠の命の保証(天国に入る担保)を、イエス様は彼のために手に入れようとなさるのです。心の貧しい彼のために、自ら貧しくなろうと心に決められるのです。彼の命の代価として、ご自分の命を差し出そうと覚悟されるのです。

「わたしの親しい友よ、あなたはこれまで、先祖の言い伝えに従い、自分のために善い宝を積んできた。あなたの施しは紛れもなく、隣人を自分のように愛する業であった。しかし、あなたに欠けているものがある。それは、あなたが求めているものだ。すなわち、完全になること、永遠の命を相続するための保証を得ることだ。さあ、あなたの全財産を売り払いなさい。そして考えなさい。施しの元手がなくなったら、どんな宝を積むべきかを考えるのです。あなたの生活全体を神にささげなさい。あなたの命そのものを隣人に与えなさい。このような完全な愛こそ、天国に入る担保となるのだ。そして悟りなさい。人間にはできないが、神にはできる。このアブラハム・イサク・ヤコブの信仰に立ち返りなさい。そして、わたしイエスに従いなさい。あなたが求めているものを、受難のメシアが与えよう。永遠の命を得る確かな保証と十分な担保、それは人の善ではなく神の義なのだ。人の施しの業ではなく神の恵みの業なのだ。わたしがあなたに差し出す復活の命、これを信じて受け入れることこそ、完全になること、天に宝を積むことなのだ」。(二宮 創)

[今週の暗唱聖句] マタイによる福音書 5章3節

心の貧しい人は幸いである。

天の国はその人のものである。

〈ねらい〉

わたしたちの心が地上に向いていて、「自分は何をしたら天国へ行けるか」と考えている間は、天国へは行かない。わたしたちの心がまっすぐ神さまに向いていて、イエスさまに従うことこそ天国への道であることを知る。

〈展開例〉

皆さんは天国へ行きたいですか？ 先生も天国に行きたいです。それでは、天国へ行くにはどうしたらいいと思いますか？ 皆さん、思いつくことを言ってみてください。

お祈りをする。献金する。礼拝を守る。困っている人を助ける。困っている人に募金をする。教会堂の掃除をする。姦淫しない。お父さんお母さんの言うことを聞く。人のものを取らない。うそをつかない……。

たくさんありますね。今、皆さんが言ってくれ

た一つひとつ、これをしたら神さまは喜んでくださると思います。神さまが喜んでくださることをすることは、天に宝を積むことです。

でも、これをしたら天国に行けると、自分の力で天国に行くための準備をしても、それで、天国に行けるわけではありません。わたしたちが一生懸命に良いことを積み重ねても、届くようなところに天国はないのです。イエスさまが神さまとわたしたちの間で十字架にかかって死んでくださらなければ、天国には届かないのです。

〈お祈り〉

天の父なる神さま、わたしたちの心がいつも神さまに向いていて、神さまが喜ばれることをすることができますように。イエスさまが十字架にかかってくださったおかげで、天国に宝が積めるようになったことを感謝します。アーメン。

〈やってみよう〉

「ハレル ハレル」（『ふくいん子どもさんびか』48番、いのちのことば社）を賛美しよう。

○みんなで輪になる。

○みんなで1番を賛美する。

ハレル ハレル ハレル ハレルヤ （賛美にあわせて 歩く）

主をほめよ （しゃがむ）

ハレル ハレル ハレル ハレルヤ （賛美にあわせて 歩く）

主をほめよ （しゃがむ）

主をほめよ （しゃがんだまま） ハレルヤ （歩く）

主をほめよ （しゃがむ） ハレルヤ （歩く）

主をほめよ （しゃがむ） ハレルヤ （歩く）

主をほめよ （しゃがむ）

○動きをいろいろと工夫してみてください。



〈はじめに〉

イエス様は言葉で大事な神様の国を教えると共に、言葉ではない方法でも教えを与えられました。例えば、「触れる」。人から嫌がられ、見捨てられ、気持ち悪がられた人々をイエス様は触れて癒されました。あなたのクラスの中にも、肩や背中、温かい握手を必要としているこどもがいるかもしれません。例えば、「食事をする」。イエス様はお弟子さんと変わった人とお食事をしました。たくさんの方の言葉よりも短い時間おやつを食べたりすることで、より子どもたちとコミュニケーションが取れることもあります。

「教師自身がモデルとなる」。言葉でお祈りのことや喜びや悲しみを教師は語ります。しかし、教師自身が信仰に生き、主にある喜び、心配、悲しみを表し、神様に頼っていることを子どもたちに示しましょう。先生は本当にイエス様を信じてるんだなあと子どもたちに伝わることは、教師にとっての大きな喜びです。

〈御言葉に聴きましょう〉

- ①地上に何を積んではいけないと教えていますか。
- ②富は、どこに積みなさいと言っていますか。
- ③あなたの富もあるところに、あなたの何があるのですか。

〈展開例〉

今日は私たちの「心」と私たちの大事にしている「もの」との関係からイエス様は大事なことを教えてください。

「あなたの心はどこにありますか」と質問をするとほとんどのお友だちは、ここ（胸）を指しますね。宝物は持っていますか。その宝物はどこにありますか。引き出しの中？ 箱の中？ 誰にも見つからない場所かもしれません。誰かに取られ

ないか心配ですか。その宝物はずっとなくならないものですか。お金だったら使うとなくなります。大事なおもちゃもいつか壊れるかもしれないし、興味がなくなる時が来るかもしれません。そんなことを考えるとちょっと悲しくなりますね。

さっき心は胸のどこにあると皆さんは教えてくれました。でも今日の聖書では、「あなたの富があるところに、あなたの心もある」と心の場所を教えてください。富というのは、大人では財産や、たくさんのお持ち物や、お仕事、いろんなことがあります。子どもの私たちにも、大事にしているものがみんなそれぞれあります。そこに私たちの心があるということです。

イエス様は、私たちが大事にしているものは、天に積みなさいと言われる。なぜなら、そこには泥棒も来ないし、さびないし、なくなることもないからです。しかし、今大事にしているおもちゃ、おこづかい、ぬいぐるみ、思い出のものを天国に持っていくことはできますか。できませんね。どうしましょう。いつかなくなってしまうものをいつも心配したり、それを手に入れることばかりをいつも考えているのではないのです。いつまでもなくならないイエス様から与えられる愛や喜びを求めなさい。神様の言葉を求めなさい。神様に感謝すること、神様にごめんさないということ、それが、毎日私たちが天に宝を積むことになるのです。それは目に見えることではありませんが、神様が一番喜んでくださる富なのです。そのことを気にすることが、あなたの心にあるでしょうか。私たちは、神様のことを忘れない、神様に喜ばれる子どもなのです。

〈お祈り〉

神様、神様に心をいつも向けて歩ませてください。アーメン。



〈ねらい〉

地の富は、はかないことを知り、天に富を積むことを学ぼう。

〈展開例〉

天に富を積みなさいと、神様はおっしゃいました。どうしてこう言ったんだろうね。それは、富を地上に置いておくより、神様のおられる天においておいたほうが安全だからだね。つまり、富を神様の喜ばれる仕方を使うことが、一番いいんだということです。

まず、富とはどういうもので、何のためにあるんだろう。

富は、人が欲しがる物です。富は、形のある物だと、お金や宝石、株や宝くじや家や車、自転車かな。それに、形のない富だと、地位（友だちからの人気）、必要な情報（友だちの噂話や恋愛の話、ゲームの攻略法や、こうしたらいい、ああしたらいいという知恵）など、いろいろですね。自分が欲しがったり、人が欲しがったりするもの、これが富です。こういうものを、みんなは欲しいでしょう。そして、何のために欲しいのだろう。

結局、自分の命を守るためですね。お金の類なら欲しいものを買うため、いざという時のためになど。また、学校で友だち関係を良くしたり、人からよく思われたりするため。それは簡単に言えば、生活を守るためだと、まとめられますね。生活は命と言い換えてもいいでしょう。では、そういうもので私たちの大事な大ことな命を本当に守れるのでしょうか。守れないとしたら、そういうものに私たちは頼りすぎてないか考えてみよう。

富は完璧じゃないんです。突然失ったり、また役に立たなくなったりします。きっとこれからそういう経験をするでしょう。また私たちは、地上に積む富は完璧じゃないことを知るでしょう。そして一番大切なことは、永遠に生きておられる神様に従うことだと、気付いていくんです。

先生が大学生の頃、高性能のノートパソコンを宝物のように大切にしていました。自分の勉強や仕事や趣味の記録や写真など、生活に必要なことを全部パソコンに入れていたんだ。これ一つでいろんなことができて、とても便利でした。周りの友だちも羨ましがりました。仕事もバリバリできました。ところがある夜、車の中にパソコンを置いたままご飯に食べに出かけ、駐車場に戻ってきたらパソコンが盗まれていました。生活に必要な全部の情報が入っていたものを突然失って、驚き悲しみ、しばらく元気がでませんでした。でも、一週間くらいお祈りしたら、大切なことに気づき、盗まれたことにも感謝しました。なぜなら先生は、パソコンのことばかり考えている生活をしていて、自分を生かしてくださる神様を大切にしています。だから、神様に従う生活をもっと大切にしよう、という大事なことに気付いたので。

この世のものは、なくなったり、変わってしまったりするけども、神様は決していなくならないお方ですし、変わらないお方です。「この神様に従って生活するなら、何か起こっても必ず助けてくださるはずだ」と、思いを強くした貴重な経験でした。

神様にとってみたら、地上の富は全部、不完全です。なぜなら、神様こそ完全だからです。私たちはイエス様によって救われ、神様に受け入れられます。そのこと感謝して答えるために、神様に喜ばれる仕方で、富を用いていきましょう。これこそ天に富を積むことになります。

〈祈り〉

神様。神様が私たちの命を守ってくださいます。神様のために、富を用いて天に富を積むことができますように。イエス様の御名により祈ります。アーメン。

〈ねらい〉

モノではなく神様に心を向けて生きる喜びを確認する。

〈展開例〉

①今日の箇所でイエス様は、地上の富ではなく天に富を積むように、と言われた。これは何も「貯金をするな」とか「お小遣いやお年玉で欲しモノを買うな」ということを言ってるんじゃない。「そういうモノに心を支配されるな」とイエス様は言っておられるのである。そして「自分の心を神様に支配してもらうように、天に心を向けなさい」と言っておられるのである。

②富というのは財産ということだが、中学生の君達は自分の財産と呼べるものは、そんなにかもしいない。しかも、まだ仕事をしていない君達は財産を得るための準備中である。でも、君達は将来、自分が財産を得ることができるように、そのための仕事に就けるように準備をしている。そんな君たちにイエス様はこう言われる。「お金を将来の暮らしぶりに心を向けるんじゃない、まず、神様に心を向けなさい」。中学生の君達にはこういう心持ちで将来を考え、将来に向かって準備することが大切だ。

Q. 皆にとって地上の財産と呼べるようなものは何だろうか？ 服、アクセサリ、本、マンガ、ゲーム、パソコン、etc. こんなふうにモノを並べる人があるだろう。友達、恋人、家族、先生、人を思い浮かべる人があるかもしれない。部活で培った根性、勉強で培った知識、こんなことも挙げられる。そう。こういうものすべてが、地上の富。「富」とは持ちモノ、所有物である。こうしたモノに心奪われて毎日を過ごしているなら、それが地上に富を積むという生き方。イエス様はそういうモノに夢中になるの

はなく、神様に夢中になる心を君たちに求められる。

③君達はモノの売り買いで成り立っている社会を生きている。そんな君達にとってこれは、中々むずかしいことだ。インターネットやテレビは心を釘付けにするキャッチコピーで君達の心を奪おうとする。ブログや雑誌ではモノを持っていないのが普通じゃないような記事で、商品を手に入れないと不安になるような記事を煽る。ただ、そういうものの虜になってしまって、目をぎらつかせている自分があるなら、それはとても醜い姿ではないだろうか？ そうやってイエス様が与えてくださった命が浪費されていくならそれはとても感しいことじゃないだろうか？

④神様の立場にたって考えてみよう。想像してください。自分が恋人と付き合っていることを想像してください。君が相手の喜ぶ顔が見たくてプレゼントをあげたとする。相手は大喜び。プレゼントに夢中。でも、それを贈った君のことは二の次。それどころか、相手が君との交際を、プレゼントを受け取るだけの関係としてつき合っているとしたら、どんな思いがする？ 神様は君にイエス様というかけがえのない財産をくださった。それは、イエス様を仲介人として君と愛しあう日々を神様が求めてくださっているから。モノだけを受け取る冷めたつき合いではなく、神様を一番として神様とのお付き合いを深めていく、神様とハート・トゥー・ハートに生きていく人生を進んで行って欲しい。

〈祈り〉

私達に思いを向けてくださるイエス様。あなたの愛に感謝して、一番にあなたを思うことができるようにしてください。アーメン。

イエス様による「山上の説教」の一部であるこの箇所は、自らの命を維持していくため様々に思い悩んでしまう人間を、諸々の心配から解放とうとして語られる。

この箇所は、25節冒頭に「だから」とあることが示すように、前週扱った24節、「あなたがたは神と富に仕えることはできない」からの継続として記されている。神様を差し置いて富に仕えないよう注意を促すことと密接に関連することとして、この箇所は語られている。人間が地上の富を追うのは、富によって食べ物や衣服が手に入り、ひいては自分の命をも保つことができると考えてしまうからである。神様によって食べ物や衣服への心配が取り去られるなら、地上の富に執着する必要もなくなり、神様に心から仕えることができる。

25節で、「自分の命のことで……思い悩むな」と呼びかけられたイエス様は、その理由としてまず、命は食べ物よりも、身体は衣服よりも大切な、価値あるものであることを人々に思い起こさせる。この価値判断は人間にとっても、そして一人ひとりの人間に命と体を授けてくださった神様にとっても同様である。だから人間が命と体を保つため必要なものについて神様は心を配られるはずだ、ということが言外に暗示される。

イエス様は26、27節で空の鳥を引き合いにして食べ物への神様の配慮について、28、29節では野の花を引き合いにして体の装いへの神様の配慮について、それぞれ取り上げられる。鳥も野の花も、思い悩む人間のように自分の必要をすべて自分で確保しようとあくせく働いてはいない。しかし天の父なる神様は必要な食料を備えて鳥を養い、「栄華を極めたソロモンでさえ、この花の一つほどには着飾ってはいなかった」というほどの装いを野の花に与えてくださる。

その上で、「あなたがたは、鳥よりも価値あるものではないか」(26)、「明日は炉に投げ入れられる野の草でさえ、神はこのように装ってくださ

る。まして、あなたがたにはなおさらのことではないか、信仰の薄い者たちよ」(30)と言われ、神様は天の父として人間に対して鳥や草以上に手厚く配慮してくださるに違いないから、神様への信仰に立ち、「思い悩むな」と求める。

32節においては、物資のことをあれこれ思い悩むことが、「それはみな、異邦人が切に求めているものだ」と批判される。ここで言う「異邦人」とは、天の父なる神様を知らない、信じていない者という意味である。父なる神様を度外視すると、自分の必要はみな自分で備えなければならないと考え、物資のことを追い求めてしまう。なお6章7～9節では、天の父なる神様を知らない「異邦人」の祈りはくどくど言葉数の多い祈り、言い換えれば人間側があくせくする祈りであると批判されている。

そこで、33、34節で、思い悩みに対する最終的な処方箋が示される。それが、「何よりもまず神の国と神の義を求めなさい」ということである。父なる神様が頂点に立って支配される神の国、人間が神と隣人を愛して生きるべきと定められた神の義を求めることを第一にすると、生活に必要なものは、神様から「みな加えて与えられる」ことになる。こうして、思い悩みからの解放がもたらされるとイエス様はおっしゃるのである。

神の国と神の義をまず求めることは、主の祈りで最初に「天にまします我らの父よ、願わくは御名を崇めさせたまえ。御国を来たせたまえ。御心の天になるごとく地にもなさせたまえ」と祈ることに通じる。そして主の祈りが、「我らの日用の糧を今日も与えたまえ」という祈りをも含めていることが示すように、神の国をまず求めることは生活の必要を願うこと自体を一切排除することを意味しているのではない。「天の父なる神様」が必要を与えてくださることを確信しながら祈り求め、人間だけで必要を満たそうとしないことなのである。

(吉田 崇)

テキスト マタイによる福音書 6章25～34節
参照カテキズム 子どもカテキズム 問1～4, 37～44

〔単元のねらい〕

多くを学ぶことができる御言葉であるが、二つのことに絞ってみた。一つは、造り主なる神におゆだねすべき領域、神の領域があるということである。その神は、主イエス・キリストによってわたしたちの父であられ、味方となってくださるお方である。このお方によって、人は重荷から解き放たれる。もう一つは、人の豊かさは、目に見えるものではなく、目に見えないものにある。神を愛して礼拝すること、また、隣人を愛して生きることである。この真実の豊かさに生きることへと招きたい。

「神さまの豊かさに生きる」

みんなは、自分の身長を自分で大きくすることができるかな？ わたしは、小学生の頃、背が小さくて、体も弱くて、背が高くなりたい！ 丈夫になりたい！ と思って、牛乳ばかり飲んでいる時期がありました。けれども、牛乳をいくら飲んでも、背はあまり伸びませんでした。背がぐんと伸びたのは、高校生になってからです。もちろん、牛乳には体を造るための大切な栄養があって、健康のために役に立ったのだと思いますけれども、背が高くなりたいと思っていくら牛乳を飲んでも、思うようにはなりません。自分の身長は、自分の思いどおりには伸ばせません。

今日の御言葉には、「寿命をわずかでも延ばすことができようか」とありました。だれでも、長生きしたいと思うものです。そして、長生きするために、健康であろうとします。お医者さんに通ったり、食べ物に気をつけたりします。それは、とても大切なことですが、けれども、そうしたから長生きできるというものではありません。時に、突然、思ってもいなかった病気になるということも起こるのです。健康に気をつけることは大切ですが、わたしたちの命は、わたしたち自身のものではないからです。命は神さまのものだからです。神さまが考えて、配慮してくださる。神さまがご支配しておられる。神さまの領域の事柄、というものがあるのです。

みんなは、学校から帰ると、宿題をしたり外に出かけてお友だちと遊んで、夕方になるとおなかがすいて、晩ご飯が楽しみです。今日の晩ご飯はいったい何かな？ って、おかずが気になるでしょう。唐揚げか、コロッケか、何だろうかと楽しみです。けれども、ご飯を用意する人はたいへんです。お母さんが用意する？ お父さんが用意する？ 用意する人は、献立を考えなければなりません。晩ご飯は、唐揚げにするならば鶏肉を買ってきて、サラダはどうしようか、キャベツを刻むかレタスがよいか。ポテトサラダを作ろうか。お味噌汁の具も考えなくてはなりません。みんなは、そんなこと考えないでしょう。遊んでおうちに帰って、晩ご飯の時間になれば、晩ご飯を食べることができます。何と幸せなことでしょう。

大切なことは、それが、子どもであるということなのです。お父さんお母さんの子どもなのです。お父さんお母さんが考えて、配慮してくださる事柄があって、子どもは、おかずの献立まで考えなくても良いのです。みんなは、晩ご飯は何かな？ って、楽しみに待っていればよい。それが子どもであるということなのです。

まして、天におられる神さまは、わたしたちの父なる神さまで。わたしたちを大切に養ってくださるお方です。わたしたちのために配慮してくださるお方です。わたしたちは、救い主イエスさまによって、神さまの子どもとされています。だ

から、神さまの子どもとして、神さまに信頼していればよい。神さまにおまかせしていればよい。イエスさまは、それで大丈夫ですよと教えてくださっています。

お父さんお母さんがご飯を用意してくれると言いました。ご飯を用意する人は、ご飯を何にしようか考えなければなりません。これは、たいへんなことです。毎日毎日、献立を考えなければなりません。ご飯を用意するためには、お金も必要です。だから、お金を稼いでこなければなりません。お父さんお母さんは働いていますね。働いて、ご飯を食べたり、洋服を用意したりする、そのためのお金を稼いでいるのです。だから、おとなになったら、おまかせしてられない。自分の力で生きていかなければならないのでしょうか。

働かなければならない、それはそうなのです。健康が守られて、働くことができる人はみな働かなければなりません。けれども、働くことができることも神さまの祝福であり、恵みです。働く幸いを与えてくださっているのは神さまです。仕事をしても、神さまがそれを祝福してくださらないと、良い働きはできません。神さまが養ってくださっていること、神さまにおまかせすべきことがあるのは、おとなになっても同じです。

みんなも、だんだん大きくなると、何を食べようか何を着ようかって、考えるようになるでしょう。たしかに、献立を考えたり、洋服を用意することを考えなければなりません。けれども、豪華な食べ物を食べたい！かわいい洋服を着たい！って言って、自分で好きなようにできる、自分の思いどおりにできる！って考えるのではありません。神さまが与えてくださっています。神さまが用意して、養ってくださっています。それが本当なのです。だから、神さまへの感謝を忘れてはなりません。そして、食べる物着る物、そういう目に見えることで、心がいっぱいになってはいけません。食べる物も着る物も、その喜びは一時のも

のです。過ぎ去るものです。目に見えるもので心が支配されてはなりません。

イエスさまはおっしゃいました。「何よりもまず、神の国と神の義を求めなさい」。イエスさまは、目に見えない神さまを第一とすることを教えてくださいました。神さまがわたしたちを造り、わたしたちに良い物を与えて、養ってくださっています。だから、神さまに感謝して、神さまをほめたたえることを第一とするのです。

そして、食べる物、着る物のことで心がいっぱいになるのではありません。そんなことで心を悩ませるのではありません。心を悩ませるならば、目に見えないことのために心を悩ませます。

あのひとけんかをしてしまったのだけれども、いったいどうしたら仲直りできるだろうか。「神さま、あの人のことをいやだと思ふ心を小さくしてください。けんかをしてしまったけれども、お赦してください。どうか謝ることができますように。仲直りできますように」。わたしたちの悪い心を取り去られること、平和に生きることに祈りして、心をそのことに向けるのです。

「あのお友だちがどうか教会に来られますように。一緒に礼拝できる日をお与えください」。そう祈りして、お友だちを教会にどうやって誘うかで悩むのです。

人間の豊かさは、食べ物や着る物といった目に見えるものにあるのではありません。神さまを礼拝すること、そしてお友だちと一緒に神の子どもとして生きること、助け合い励まし合って生きること、本当の豊かさがあります。神さまは、その神さまの豊かさ、神の国の豊かさに、わたしたちを招いてくださっています。

神さまに感謝して、神さまを愛すること、隣人を愛すること、お友だちと一緒に礼拝することを喜びましょう。この一週間、みんなに神さまの恵みが豊かでありますように。（望月 信）

〔今週の暗唱聖句〕 マタイによる福音書 6章33節

何よりもまず、神の国と神の義を求めなさい。
そうすれば、これらのものはみな加えて与えられる。

〈ねらい〉

「神の国と神の義」を第一とすることを学ぶ。
それは、神さまへ感謝し、神さまを賛美して喜び、
主の日の礼拝を大切にする神の子として生きるこ
とであることを学ぶ。

〈展開例〉

「僕のいちばん大切なもの」は何か？「わた
しのいちばん大切なもの」は何か？ みんない
ろいろ大好きな、大切なものがありますね。

礼拝で、わたしたちは、イエスさまが教えてく
ださった「いちばん大切なもの」を知りました。「神
の国と神の義をまず第一にきなさい」と、今朝、
神さまはわたしたちに語りかけてくださいまし
た。

このみことばをみんなで賛美しましょう。
「♪かみのくにと そのぎを まず だいいちと
とするとき すべてがあたえられる ハレルヤ
ハレルヤ♪」（『ゴスペル・ミュージック—主を賛
美しよう—』51番、いのちのことば社）

おゆうぎしながら、賛美しましょう。お家でも
毎日、賛美しましょう。

わたしたちの心には「もっと」ちゃんが時々出
てきます。「もっとおもちゃがほしい」「もっとケー
キがたべたい」「もっとかわいいおようふくがほ
しい」「もっと もっと もっと……」と心の中
で「もっと」ちゃんが叫んでいます。

イエスさまがお話くださいましたね。「空の鳥
や野の花」をよく見てご覧なさいと。食べるもの
を心配しなくても、小鳥さんにはちゃんと食べ物
を神さまが用意してくださいます。野の花もとっ
ても綺麗に咲いていますね。誰も見ていなくても
じっと見てみると本当に美しいですね。神さまが
美しく咲かせてくださっているのです。

わたしたちは神さまの子どもですから、「もっ
と もっと」とせがまなくても、いちばん良いも
のを用意してくださっています。日曜日の礼拝を
大切にして、賛美し感謝しながら神の子として歩
んでいきましょう。

〈祈り〉

あいする神さま。わたしたちが神さまをさんび
し、神さまに感謝して、今週も歩むことができま
すように。イエスさまのお名前をとおしてお祈り
します。アーメン。

〈やってみよう〉

賛美歌詞カードを用意して、おみやげにする。

賛美歌詞カードの例は86ページに掲載。

みんなで作ってもよいでしょう。

かみのくにと



両手を天に向けて伸ばす

そのぎを



両手を胸に交差して置く

まずだいいちとするとき



胸の前で人差し指を「一」を作る

すべてはあたえられる



両手をキラキラさせながらグルッと回す

ハレルハレルヤ！



拍手

〈ねらい〉

今ある心配事を神様にお委ねする。そして私たちが信じる神様は、私たちを愛してくださり、心配してくださり、必要なものは必ず与えてくださるお方であることを知る。

〈はじめに〉

教師会では、事務的なことを話し合うことで多くの時間が費やされると思います。日曜学校の教師は時として休みがなくな疲れしてしまうことはありませんか。イエス様も疲れた時は静かな祈りの場所に行ってリトリートしました。教師会もある時は思い切ってリトリートの時間を持ってもいいかもしれません。共に祈り、御言葉を聴くことを通して新しい力をいただき、私たちの奉仕のビジョンがもう一度新たにすることを助ける時間となるでしょう。一つのアイデアです。①賛美—賛美し、御言葉を聴く。②告白—静かに神様と向かい合い、これまでの教師としての奉仕を振り返り、祈る。③感謝—教師の好きな聖書物語や、子どもたちの経験を分かち合う。④祈り—これからの課題、祈りのリクエストを出し合い、静かな祈りの時を持つ。

〈御言葉に聴きましょう〉

- ①31節を読みましょう。
- ②何を食べようか、何を飲もうか、何を着ようか、思い悩んでいいですか。
- ③33節を読みましょう。
- ④何よりもまず、何を求めなさいと言ってますか。

〈展開例〉

心のなかに「心配の種」を持っていますか。種は小さなものです。小さい種はどんどん成長して、大きな実や花を咲かせます。朝顔とか、ひまわりとかへちまとか学校で種をまいて育てたことが皆さんありますね。あっという間に小さな種が大きくなります。私たちの心の中にある「心配の種」は何でしょう。ごはんのことだったり、服の

ことだったり、お勉強のことだったり、お友だちのことだったり、将来のことだったり、お父さんやお母さんのことだったり、いろいろです。その心配事は、決して小さなものではないかもしれません。でも、心配すればするほど、その心配事は不思議なことにどんどん大きくなります。こうなったら、ああいう風になったら、どうしよう、どうしようと私たちの心は心配事で一杯になってしまいます。イエス様は、そんな私たちに、そんなに心配するのはやめなさい、と言われました。なぜなら、私たちのことを一番よく分かって、一番考えてくださっている神様がおられるから、その神様にお任せなさいと教えてくださいました。

悩む私たちが、しなければならないこと、それは「まず神の国と神の義を求める」ことだと、イエス様は教えてくださいました。どんなことでしょう。聖書の言葉を読むこと、神様にありがとうと感謝をすること、神様を悲しませたことをごめんなさいと神様に謝ること、自分のことばかりでなく、家族やお友だちのためにも祈ること、神様を賛美すること、これが私たちの毎日の生活です。そうしたら、神様が私たちに必要なものはちゃんと私たちのそういう生活に、加えて与えてくださいます。これは本当のことです。必ず私たちに一番いいものを神様はくださるのです。神様は素晴らしいお方ですね。

〈お祈り〉

神様、私たちはいろんな心配がありますが、大丈夫と言ってください、私たちを守ってくださいありがとうございます。アーメン。



〈ねらい〉

神様を大切にせず何かをできても、良いことではない。まず、神の国と神の義を求めることを学ぶ。

〈展開例〉

「何よりもまず、神の国と神の義を求めなさい。そうすれば、これらのものはみな加えて与えられる」と、イエス様はおっしゃってくださいました。

神の国と神の義とは何だろう。それは、簡単に言えば神様を一番大切にし、神様の言われることを一番大切にすることです。そうすれば、「みな加えて与えられる」のです。

私たちは欲しい物がたくさんあります。必要な物がたくさんあります。それに心配なこともたくさんあるでしょう。そういうことが心にたくさんあると、そのことばかり考えたりしませんか。みなさんは、今、何か欲しいものや必要なものがあって、そのことで心が一杯になっていませんか。

みんなの中で、できるだけ欲しがらずに我慢する子や、あまり心配をしないようにする子もいるでしょう。そうすることも大切なことですが、それよりずっと大切な特別なことがあります。

神様を大切にせず、神様を甘く見たままで、我慢したり、心配しないようにすることが、一番いいことでしょうか。神様は、世界を造られた神様で、良い人にも悪い人にも太陽を昇らせてくださいます。そして私たちに命を与え、今もこの命を握っておられる方です。毎日の食べる物、飲む物すべてを神様が造ってくださいっていて、この世界のすべてが神様のものです。私たち自身も実は、自分のものではなくて神様のものなんですね。みんなは、宝物のように大切にしているものがありますか。教えてください。実は、それも神様のものなんです。

だからまず、イエス様に祈って、罪を悔い改めて、神様のおっしゃることを大切にしましょう。大切にしていけないことに気が付いたら、まずそのことを大切にすることが、神の国と神の義をまず

求めることです。

ここで、先生の苦い経験を一つお話ししましょう。先生は高校生の時、最初に陸上部に入りました。中学生からやっていて、陸上が大好きで大好きで仕方ありませんでした。ところが練習の靴を買わなきゃいけないくて、どうしても欲しくて、靴のことで頭がいつもいっぱいになりました。ある時、献金するのを後回しにして、その分のお金で先に靴を買いました。喜んで練習していたら、足に今までしたことのない怪我をして、ちゃんと走れなくなりました。治るように祈って病院へ行ったら、なかなか治らず、悩んで悩んで結局大好きな陸上部を辞めてしまったのです。すごく悲しくてとても落ち込みました。しばらくして足は治りましたが、部活のために靴を買ったのに部活を辞めることになってしまったのです。こうなったのは、まず神様を大切にしなかったことがいけなかったんだなあと思いました。大人になった今も、この経験は強く心に残っています。それから、神様に献げるお金をごまかしたらいけないと思い知らされました。

神様を大切にしないと、求める物よりもっと大切なものを失うことがあります。反対に、神様を第一にするなら加えて与えられます。神様は、「加えて」与えられるんです。やはりまず神様を第一にしたらよかったのですね。神様なら、私たちに最も良いものを知っておられます。だから、私たちが願う以上の良い物を必ず与えてくださいます。

私たちは、神様を第一にできるようにイエス様に祈りましょう。私たちの心が、神様以外のことでいっぱいになっている罪を赦してもらい、イエス様が神様を大切になさったようにできるように祈りましょう。

〈祈り〉

神様、まず神の国と神の義を求めることができますように。イエス様の御名により祈ります。アーメン。

〈ねらい〉

すべてを備えてくださる神様に信頼し、神様を一番に生きる安心をおぼえる。

〈展開例〉

①今日の説教では、神様が君たちに必要なモノすべてに心を配ってくださるので、安心して神様を一番にして生きていくことができるということを知った。食べ物や着ることこれは昔の人にとって命を維持するために必要なことだった。ただ、みんなの感覚からすると「食糧」「衣服」は命の危機に結びつくようなものとは思えないかもしれない。しかし、長引く不況で働くことができない大勢の人達が生きることによって不安を感じるような社会が訪れている。中学生の皆は自分では働いていないから、「食糧」「衣服」への感覚はひょっとしたら生活している環境によって違いがあるかもしれない。

Q. 皆にとって「食べ物」「着る物」ってどんなもの？ 苦しい生活環境の中にいる人にとっては本当に命を繋ぐモノであると思う。今は、そんなに大変ではなくても、働きに就くことが大変なこの時代である。「自分は将来ちゃんと飯を食っていけるのだろうか」。こんな生きることへの不安を持っている人がいるかもしれない。そういう人にとって、今日の御言葉は単純に嬉しい。自分の手のおよばないような社会の流れの中で、君のために神様がちゃんと必要な物を与えてくださる道を用意されている。自分にどうにもならないことに心奪われて元気をなくす必要はない。神様に心配ごと心をゆだねて、神様の喜ばれる毎日を一番にして一日、一日を過ごして欲しい。大丈夫！ 神様を頼りに祈る思いで生きる君を神様は絶対に助けてくださる。

②「食べる物」「着る物」を考えると、それなりに生活に困っていない家の人にとっては、食べ物＝グルメ、着る物＝ファッションこんな感覚かもしれない。そういう人にとっては食べ物、着る物は暮らしの豊かな部分である。ただ、こういう人は注意が必要である。神様は今日の箇所の手前で「君達は神様とモノの両方を一番にすることはできない」と言われた。暮らしの豊かさで食べ物、着る物が結びついている人は、それを失くすと人からバカにされるんじゃないか？ 同じライフスタイルで生きている仲間を失うんじゃないか？ こういう「思い悩み」に心が惑う。神様のことを一番にするとき、その人は食べるモノや着るモノのランクが確かに下がるかもしれない。でも、神様は有名ブランドも新進気鋭のデザイナーにも作れない、特別な装いを与えてくださる。それは、神様に従う人の装い、イエス様の装いである。神様に人生を整えられて、愛に満たされて、神様と人に真心からの愛を身につけることは、決して君達を独りぼっちにさせるようなモノではない。決してバカにされるような生き方ではない。

③生きることにして、生活の豊かさにして、自分を導かれる神様と共に生きる暮らしを求め、神様がお望みの神様と人々を愛する暮らしを求めるならば、その両方が満たされる。君達が大人になる準備として、自分の過ごす一日の中に、神様と向き合う祈りの時間、人々への愛を求める祈りの時間をつくれるようになって欲しい。神様と人々を覚えて過ごすこと君達の今が、君達の人生に安心と豊かな将来をつくりだすからだ。

〈祈り〉

神様。生きることへの不安を安心に変え、豊かさをくださるその愛に感謝します。アーメン。

ここは天の父なる神様に積極的に祈り求めるよう励ます箇所である。普段の生活においては、私たちは求めて必ず与えられる、探して必ず見つかる、門をたたいて必ず開かれる、とは限らない。この不確かさが深く心に染みついてしまっているため、私たちは神様に祈り願うにあたって、「神様はきっと応えてくださる」とのしっかりとした確信を持ってない。

そこでイエス様は、7節8節で、「求めなさい。そうすれば、与えられる」との趣旨の言葉を幾度も繰り返す。なお聖書において、「何々によって」ということ抜きに「与えられる」など受け身表現が出てくるとき、それは「主なる神、父なる神」が与えることを意味する。十戒第三戒、「神の名をみだりに唱えてはならない」を意識してイスラエル人がとった表現方法である。

さらに11節で、「あなたがたの天の父は、求める者に良いものをくださるに違いない」と念押しで約束を与えられる。このように立て続けに約束の言葉を与えられることで、イエス様は私たちの心にある神様への信頼の乏しさをぬぐい去り、全き信頼へと導こうとされる。

また、「求めなさい」だけではなく、「探しなさい」「門をたたきなさい」とも付け加えられることについては、祈り求めた、しかしどうも与えられないと感じたら、あっさり祈りを終えてしまうのではなく、なおくじけず探し求めること、自分と求めるものとの間に分厚い壁のような門が立ちただかっているとしても、なお門をたたくことへと、ねばり強い祈りへと導くことが意図されている。

なお、7節の「求めなさい」「探しなさい」「たたきなさい」という言葉は「求め続けなさい」「探し続けなさい」「たたき続けなさい」という継続的な命令にも訳すことができる（新改訳聖書脚注参照）。つまり、根気強く、あきらめないで、忍耐をもって祈り続けることが、この点でも勧められている。

9～11節では、自分の子供がパンを求めた時に石を、魚を求めた時に蛇を与えることなどありえない、「悪い者でありながらも、自分の子供には良い物を与えることを知っている」ことに訴え、悪い者よりもはるかに愛と憐れみに富んでおられる天の父なる神様は必ず良い物をくださるに違いない、と呼びかける。

なお、祈り求める対象が明示されていないように見えることをどう理解すればいいだろうか。あらゆるものが祈る対象として認められ、かなえられるということだろうか。それでは、前週の「神の国と神の義をまず第一に求めよ」と食い違うことになる。実は、11節までの祈りの勧めに続いて12節「だから、人にしてもらいたいと思うことは何でも、あなたがたも人にしなさい」（いわゆる黄金律）が語られていることが理解のカギになる。一見唐突なように思えても、イエス様としては連続して語る必要と意図があったのである。それを文脈展開から探るなら、イエス様は祈り求める対象として、黄金律が実現するために必要なものを示されたと言うことができる。12節最後の「これこそ律法と預言者です」とは、黄金律は「律法と預言者」、今で言う旧約聖書を一言で要約したもの、という意味である。イエス様は律法の要約は神への愛と隣人への愛であると語っておられるから、黄金律の実現を願うとは、愛において新しく成立する人と人の関係、神と人との関係を願っておられるということになる。

イエス様の黄金律は、「何々するな」という否定形ではなく、積極的な表現で語られたところが他に類を見ない。神の恩恵抜きに人間の生き方を考えれば積極的な援助を意図しても独りよがりになる恐れもあるから、「他人に迷惑をかけないように何々するな」に留まるしかない。神の導きの下で生きていくとき、相手にも喜んでもらえる他人への積極的な援助が可能となる。（吉田 崇）

テキスト マタイによる福音書 7章7～12節
参照カテキズム 子どもカテキズム 問1, 4, 40

〔単元のねらい〕

しばしば「黄金律」と呼ばれる。説教題では「神さまの喜びの法則」とした。消極的に「しない」愛から、積極的能動的に「する」愛へ。その土台には、積極的に自らをささげたキリストの十字架の愛がある。それゆえ、わたしたちは、祈るときにこそ愛する者として生きることができる。憐れみ深くあれ。そして、愛することから喜びが生まれる。喜びを生み出し広げる愛。この愛へと招きたい。

「神さまの喜びの法則」

イエスさまはおっしゃいました。「だから、人にしてもらいたいと思うことは何でも、あなたがたも人にしなさい」。昔のローマ帝国の皇帝は、感動して、この言葉を黄金の板に刻んで部屋に飾ったそうです。そのためもあってか、「黄金律」と呼ばれます。イエスさまを信じていないローマ皇帝でも、この言葉には心動かされる。ですから、だれにでもよく分かる言葉です。

けれども、みんなのお父さんお母さんは、何と言うのでしょうか。わたしもお父さんですが、子どもにこう注意することがあります。「自分のいやだと思うことは、人にもしてはいけませんよ」。「してほしくないことは、してはいけませんよ」と注意することが多いのです。自分がしてほしくないこと、されるといやなことは、自分も人にしない。そういうふうに、「してはいけませんよ」と言うことが多いのです。イエスさまの時代のユダヤ人も、「自分のしてほしくないことは人にもしてはならない」と教えていたそうです。

ですから、「自分が人にしてほしいと思うことを、あなたがたも人にしなさい」というイエスさまの言葉、これは「してはならない」ではなくて、「しなさい」という言葉、積極的で能動的な言葉です。この言葉は、イエスさまの独特な言葉です。まさに黄金のように輝いている言葉です。

考えてみましょう。自分のしてほしくないことは人にもしない。これは大切なことです。自分が

いやなことは、人もいやなのであって、しないほうがよいのです。けれども、しないというのは、その人と仲が悪くなることはありませんが、仲良くできるということではありません。いやなことはしない。それで、けんかすることはありませんが、その人のことをよく知って、その人のことを助けてあげる、ということではありません。

ですから、イエスさまがおっしゃったことは、大切です。「自分が人にしてもらいたいと思うことは何でも、あなたがたも人にしなさい」。これは、人と仲良くなる教えです。人ときちんとかかわって、お友だちになる教えです。隣人になりなさいという教えなのです。

イエスさまは、「善いサマリア人」のたとえを教えました（ルカ10:25-37）。道の途中で強盗に襲われて、倒れている人がいたというたとえです。強盗に襲われ乱暴されて、動けなくなりました。そこをある人が通りかかりましたが、その人は、見て見ぬ振りをして、道の反対側、その人から遠いところを通って行ってしまいました。けれども、一人のサマリア人が通りかかって、その人は、倒れている人のところにやって来て、かわいそうに思っ て手当をして、宿屋まで連れて行きました。イエスさまは、「あなたも、そのサマリア人と同じようにしなさい」と教えました。積極的に人を助けなさいと教えられたのです。

この黄金律には、「これこそ律法と預言者である」という言葉が付け加えられています。律法と

はモーセの律法のこと、預言者とは旧約の預言者の言葉のことで、「律法と預言者」という言葉で旧約聖書のことを指しています。「だから、人にしてもらいたいと思うことは何でも、あなたがたも人にしなさい」とは聖書の教えだということです。そして、主イエスは、聖書の教えは、「あなたの神である主を愛しなさい」と「隣人を自分のように愛しなさい」、この二つで一つの愛にまとめることができるとおっしゃいました（マタイ22:34-40）。主なる神を愛することと隣人を愛すること。この二つで一つの愛です。

ですから、「だから、人にしてもらいたいと思うことは何でも、あなたがたも人にしなさい」とは、神を愛することと人を愛すること、愛に生きるということを教えているのです。

そして、この「愛する」ことに生きるときに、お祈りすることが大切です。イエスさまは、「求めなさい。そうすれば、与えられる。探しなさい。そうすれば、見つかる。門をたたきなさい。そうすれば、開かれる」とおっしゃいました。これは、お祈りを教える御言葉です。

愛する、人にしてもらいたいことを人にしてあげると言っても、いったいわたしたちのどこに、そんな愛と勇気があるのでしょうか。善いサマリア人のように、助けを必要としている人を助けてあげる。そのことが大切だと分かっている、それを実際に行うのはとても難しいのです。

電車に乗っていて、松葉杖を使っている人がいる、体の具合の悪そうな人がいる。席をゆずってあげたほうがいいな。そう思っても、何となく恥ずかしくて言い出せないことがあります。自分も疲れているからと思って、目を閉じて眠ったふりをしてしまうことがあります。体の具合が悪いときは、自分も座りたいのです。その自分のしてほしいことを人にして差し上げる。簡単なようで、決して簡単ではありません。

だから、お祈りするのです。わたしたち自身には愛はありません。与えられなければ、愛するこ

とを知らないわたしたちです。わたしたちの愛はどこから来るのでしょうか。イエスさまからです。神さまからです。イエスさまは、十字架につけられて死んでくださいました。それは、神さまから離れて生きていた、わたしたちの罪を背負って死んでくださったのです。それだけではありません。人に優しくすることができない、人を助けることができず、通り過ぎてしまう、居眠りしてしまう、そんなわたしたちの弱い心、悪い心も背負って死んでくださいました。イエスさまは、わたしたちを愛して、自分の命を与えてまで、わたしたちを愛し抜いてくださいました。

イエスさま、ありがとうございます。このイエスさまの愛によって、十字架のイエスさまに支えられて、わたしたちも、愛することを少しずつ始めることができます。自分のしてほしいことを人にして差し上げる。そのことへと、一步、足を踏み出すことができるのです。してほしくないことをしただけではなく、してほしいことをして差し上げる。この一步は、たとえ一步であっても、とても大きな、大きな大きな一步なのです。

神さまの愛に支えられて、わたしたちも愛することができます。人にしてほしいことを、自分も人にして差し上げる。その一步を踏み出すことができます。お祈りすると、神さまの愛が分かります。そして、神さまが愛と勇気をくださるのです。神さまの御心、神さまの喜びがどこにあるのか分かって、神さまの愛を行うことができます。神さまがわたしたちに愛と勇気をくださる。イエスさまは、そのことを約束してくださっています。

自分の嬉しいことは人も嬉しいのです。人に何かして喜んでいただいたなら、その人も嬉しい、わたしも嬉しい、わたしの喜びにもなります。神さまも喜ばれます。そうして、喜びの輪が広がります。「だから、人にしてもらいたいと思うことは何でも、あなたがたも人にしなさい」。これは「神さまの喜びの法則」なのです。愛する勇気を求めて、お祈りしましょう。（望月 信）

〔今週の暗唱聖句〕 マタイによる福音書 7章12節（前半）

だから、人にしてもらいたいと思うことは何でも、あなたがたも人にしなさい。

〈ねらい〉

「だから、人にしてもらいたいと思うことは何でも、あなたがたも人にしなさい」との御言葉をおぼえて、喜んで隣人を愛することができる人になろう。そのために必要なものを粘り強く祈り求めよう。

〈展開例〉

1. 自分がいやだと思うことはおともだちにしない。

自分がされたいやなことってどんなこと？
例えば、ぶたれたり……。これはやっぱり人にはいけないね。でも、してしまういじわるな自分があるね。

2. してもらいたいことをあなたがたもおともだちにしましょう。

自分が人にしてもらいたいことはどんなこと？
本当にしてもらいたいことが自分にわかる？
どうすればわかる？

それをおともだちにできる？

自分ひとりでは、自分が本当に何をしてもらいたいのかわからないね。人にとってなにがいちばん大切なのかは、御言葉が教えてくれます。それは神さまに愛されて、神さまの子どもとして生きることです。自分もまたおともだちも神さまの子どもとして生きられるように、熱心に神さまに祈り求めましょう。神さまはそのようなこどもをよろこばれます。

〈お祈り〉

神さま、わたしたちは自分のことばかりが大切です。そのために隣人を愛することができないものです。けれども、このわたしたちをイエスさまによってお救いくださって、隣人を愛するものに変えてくださることをありがとうございます。わたしたちが喜んでこれを行うことができますようにお祈りします。どうかお助けください。アーメン。

〈やってみよう〉

「神の国とその義を」をみんなで歌いましょう。

♪さんびしょう♪

かみのくにと そのぎを
まず だいいちと するとき
すべてが あたえられる
ハレルヤ ハレルヤ
(アメリカのゴスペルソング)

Karen Lafferty 作曲

織田恭博 訳詩

かみのくにと



両手を天に向けて伸ばす

そのぎを



両手を胸に交差して置く

まずだいいちとするとき



胸の前で人差し指を「1」を作る

すべてはあたえられる



両手をキスラさせながらグルッと回す

ハレルヤハレルヤ!



拍手

〈ねらい〉

「祈り」の姿勢を教えるとともに、神様に従って歩む喜びを知る。

〈はじめに〉

この学期もあと一ヶ月を残すばかりとなりました。来月からクラスが変わる子どももいるでしょう。この一ヶ月のクラスの交わりが祝福されますように。新たな奉仕者を必要としているのでしょうか。教える人、短期的な奉仕、行事のお手伝い、祈りのサポート、子どものそばに付き添ってくださる人、教会全体の祈りの中で、必要が備えられますように。

〈御言葉に聴きましょう〉

- ①7節を読みましょう。
- ②求めなさい、そうすれば、どうなりますか。
- ③探しなさい、そうすれば、どうなりますか。
- ④門をたたきなさい、そうすれば、どうなりますか。

〈展開例〉

私たちには欲しいと思うものがたくさんあります。自分が持っていないものをお友だちが持っているとなすます欲しくなります。お父さんやお母さんに買って欲しいと何度も何度もお願いするでしょう。しばらく待って、欲しかった物が手に入ると、飛び上がるようにしてうれしいものですね。しかし、今必要とは思わないものや、もっと大きくなってから、といろいろ考えて、私たちのリクエストに答えてくれるのが、お父さんやお母さんです。

大事なものをなくしたことはありますか。大事なものであればあるほど、私たちは、一生懸命に思い出そうとしたり、人に聞いてみたり、引き出しやいろんなところを開けたり手を伸ばしたりして探し回ります。見つかった時は、それはそれは嬉しいものですね。行かなければならない所の門

がもし閉まっていたら、私たちはどうしますか。大きな声を出して人を呼んだり、ピンポンを何度も押してみたり、ドンドンとドアを叩いて、中にいる人に自分がここにいることを何とか知らせようとしています。中にいる人が出てきてくれたら、どんなにホッとしてうれしいことでしょう。

大事なことは、信じてあきらめない、ということです。私たちの天の父なる神様は、私たちのことを良くご存知で、必ず私たちにとって良いものをくださるお方なので、あきらめないで求め続けなさいと、イエス様は教えてくださっています。それが、私たちが神様にお話しするお祈りの姿勢なのです。

神様が私たちにとって一番良いものを必ずくださることを信じて、次に、今私たちができることを、イエス様は教えてくださいました。それは、「人にしてもらいたいと思うことは何でも、あなたがたも人にしなさい」ということです。いろいろあるでしょう。もっと優しくして欲しい、もっと遊んで欲しい、約束は守って欲しい、うそはつかないで欲しい、けんかしないで欲しい、そう思うなら、まず、私がお友だちにその通りにしてごらんなさい、と言うのです。どうでしょう。お友だちはどんな気持ちでしょう。どんな顔をするでしょう。きっと、うれしいでしょう。

イエス様の教えてくださったことを私たちは学校でもお家でも実行しましょう。神様の求めておられることに従う時、私たちは大きな喜びが与えられます。

〈お祈り〉

神様、この一週間も神様の言われることに従って歩めますように。アーメン。



〈ねらい〉

私たちが神の国の法則に生きるために、神様が共にいてくださることを学ぶ。

〈展開例〉

イエス様は、自分にしてもらいたいことを人にしなさい、とおっしゃいました。それから神様は、聖書の別の箇所、自分にされたくないことを人にするな、と語っています。これは、簡単なことだと思いますか？ 難しいことだと思うなら、それは特にどんな時でしょうか。

では、「自分にしてもらいたいことを人にしなさい」と、「自分がされたくないことを、人にするな」、というのではどちらが難しいだろうか。

それは、「自分にしてもらいたいことを人にしなさい」じゃないかな。さあ、その時が来て、その場に直面したとします。自分が親切にされたいと願うように、その人に親切にしよう。相手によっては、親切にすることによって自分が損をするかもしれない。もしその人がみんなから避けられている人だったら、助けたら自分も避けられるかもしれない。どうするか。

いいかい。よく聞いてね。イエス様は、君と必ず一緒にいてくださいます。君が一人ぼっちになったとしても、イエス様は必ず一緒にいてくれます。みんなが君から離れていっても、イエス様は絶対に離れません。君がどんな人であろうとも、イエス様はいつも一緒にいてくださいます。だから、心配なら祈ろう。先生もみんなのために祈っているからね。

イエス様のことを美しく歌った讃美歌312番は、先生は大好きで、3節を見てみると「世の友我らを棄て去るときも祈りにこたえて 労（いた）わりたまわん」という言葉に深く感動します。イエス様は、必ず一緒にいて祈りにこたえて、共にいてくださいます。

大切なことは、みんなが自分に何をするか、じゃなくて、イエス様が一緒にいてくださることを信

じることです。

イエス様が十字架についた時、周りにどんな人がいたか、みんな思い出してごらん。イエス様を殺そうとする兵隊と多くの人々と、そして何もできずに見ている一部の弟子たちだね。みんなイエス様を避けて捨てたんです。イエス様は私たちの罪を取り去るために、つまり自分にしてもらいたいことを私たちにしてくれたんだ。イエス様に罪はないけど、罪があるものの気持ちを理解してくださったのです。ご自分の身がどうなろうと、イエス様は私たちを愛してくださいました。だから、今、復活したイエス様は、同じイエス様だから私たちと絶対に一緒にいてくださいます。

先週、まず神の義と神の国を求めなさい。そうすれば加えて与えられる、と学びました。不安になったら、まず神様が何を喜ばれるか考えましょう。そして神様が一緒にいてくださることを思い出しましょう。時に、心の中で、神様の声と自分の不安な声がぶつかるね。君だけじゃなくて、大人のクリスチャンもぶつかるんだよ。でも一人ではありません。イエス様が共にいます。だから、勇気をもって神様の声に従おう。自分にしてもらいたいことを、人にするのを神様は待っているよ。君のために待っているんだよ。神様はおっしゃいます。「恐れるな、わたしはあなたと共にいる」。この愛を受けていることに気付きましょう。愛をいっぱい受けているし、これからも愛されるのだから、自分にしてもらいたいことを私たちは人にしていきましょう。イエス様が必ず共にいてくださいます。君は一人ぼっちに絶対にならないよ。

〈祈り〉

神様。イエス様が一緒にいてくださることを信じて、自分にしてもらいたいことを人にするのができますように。イエス様の御名により祈ります。アーメン。

〈ねらい〉

神様が祝福される、祈りによって愛を生きる喜びを確認する。

〈展開例〉

①今日の箇所は、ここだけ読むと唐突に「求めなさい!」とある。何を求めるように言われているのだろうか? パン? 魚? 「求めなさい」というイエス様の言葉は、今日の少し前の箇所、先週の聖書箇所にも出てきた。イエス様は何を求めなさいと言われていただろう? 先週の話は人生で一番に必要なこと。それは天の国と神の義つまり、神様の御支配の中で、神様の求める愛に根差した正しい行いを求める生き方だった。これは、ここ最近ずっと言っていること。今日の箇所は、ここまでずうっと言ってきたイエス様に従う弟子の生き方、人生で一番必要だという「神の国と神の義を求める」生き方についてのメッセージである。じゃあ、その必要な生き方、大切な生き方、イエス様が教えてくださる最高の生き方は、どうやった身につくのか?

②イエス様は「求めなさい」「求め続けなさい」と言われた。教会で聞くこと、聖書で聞くことはときどき、君達に「いやいや、良いことは言ってるけど、それはムリですよ」、こんな思いを与えるかもしれない。日曜学校では全部を見てこなかったが、山上の説教は、そんな思いのする教えのオンパレードである。そこには「仲間にバカという人は地獄行き」「人妻をやらしい目でみるなら犯罪者」「右の頬を打たれたら左の頬を差し向けろ」、そして以前やった「敵を愛せ」など、「こんなん出来ません!」という教えが満載である。一つひとつの教えを丁寧に見ていくなら、決して無茶な教えでなく、心から喜んでやりたくなる教えである。イエス様は今日の箇所で、これまでの教えを「人にしても

らいたいと思うことは何でも、あなたがたも人にしなさい」という教えにまとめられた。言い換えるなら、「人を愛して生きる」、これがイエス様に従う生き方。この先君達は、「神様の言われる愛せる者になれたらいいのに」、こう思うことが度々、訪れると思う。訪れないならむしろちょっと「ヤバイ」。なぜなら、愛せる自分を求めない時とは、愛する相手がいないか、誰も愛さない心になっている場合が多いからだ。しかし、誰かを愛そうとなると、一筋縄にはいかない。学校の仲間、町ですれ違う人、家族や恋人、ニュースで知る世界の人々、誰を愛するにしろ、愛せない自分が顔を出す。「それができれば嬉しい。けど私はそんな立派な人間じゃない」。こんな声が出る。イエス様は、神様との喜びに満ちた生活を諦めてしまいがちな私たちに「いや。大丈夫。求め続けなさい」と言われる。なぜなら、神様と最高のお付き合いをしながらの最高な人生とは神様が「そうなって欲しい」と望むことだから。神様が良いと思われるなら、それを求める君達、神様の子供たちにそれを出し渋るわけがない。だからこそ、イエス様は「求めなさい。そうすれば与えられる」と、皆を励まし続ける。

③求める心とは祈る心。愛することを突き進むのに祈りがなければ、それは、求めることをやめたに等しい。先週も言ったが、声を大にして今週も言おう。君達が大人になる準備として、自分の過ごす一日の中に、神様と向き合う祈りの時間、人への愛を求める祈りの時間を大切に。神様と人を覚えて過ごす君達の今が、君達の将来を最高の人生にする第一歩だからだ。

〈祈り〉

神様。愛を求め続けられますように。アーメン。

〈背景と文脈〉

主イエスは神の国について弟子や群衆に繰り返し教えられた。その一部が山上の説教としてマタイ福音書の5～7章に記されている。今日の箇所はその最後の部分であり、結論とも言える。主イエスはこの譬えによって、主ご自身の御言葉を聞き行ふ者と、聞き流して行わない者を鋭く対比し、聴衆に警告を与えられた。

〈賢い人と愚かな人の建てた家の譬え (7:24～29)〉

このたとえ話には二人の人が登場する。二人とも家を建てた。どちらの家も当面住むには問題がなかった。しかしある日、大雨が降り、川があふれ、あふれた大水が二つの家を襲った。また強風が吹き荒れて容赦なく吹きつけた。二つの家は同じ災害に襲われているところから、地理的にもほとんど同じところに建てられていた、と考えることができる。

二つの家は同じ災害にあったのに、結果は全く異なった。ひとつは、そのような猛烈な災害にあっても倒れなかったのに、もうひとつは倒れてしまった。しかもその倒れ方はひどかった。

二つの家の違いは、土台の上に建てられていたか、土台なしで建てられたかにある。ルカ福音書に同じたとえ話があるが、賢い人は、この家を建てるときに、地面を深く掘り下げ、岩の上に土台を置いて家を建てた (6:48) とある。彼は、災害が襲ってきた場合のことを考えて、そのときに家が倒れないように土台をしっかり据えた。彼は土台の大切さを知っており、災害の日のために知恵を持って備えた。しかし愚かな人が建てた家は、土台なしで砂の上に建てられた。土台がなくても、普通の雨風はしのげたであろう。大きな災害が来るまでは、外から見ると限りにおいて何の差もなかった。しかしひとたび災害に襲われた時、二つの家のたどった運命はあまりにも違っていた。

しっかりした土台の上に建てた人を賢い人、土台なしで建てた人を愚かな人と呼んでいる。なぜ

賢いかというと、家を建てるとき、将来予測される災害に備えて家を建てたからである。しかしもう一人は、災害について全く考えなかったか、それとも、その災害がそれほど深刻な結果をもたらすとは考えなかった。災害の日に深刻に向き合っていない刹那的な生き方が、愚かな人の家の建て方に反映されている。

家は私たちの人生を指すと考えられる。私たちは日々生き、人生という家を築きあげている。大水や強風に襲われるとはどういう意味だろう。人生で出会う試練ととらえることもできる。しかし、試練はその人の人生そのものに決定的な打撃を与えるものではない。家、すなわち人生を倒してしまふほどの強力な災害は、第一義的にはもっと厳しいものを意味している、と考えられる。すなわち、死のあとに必ず来る、神と出会わなければならないとき、すなわち私たちの人生をいかに生きたかを問われる神の裁きを問題にしている、と考えられる。

〈群衆の反応 (7:28～29)〉

これらの言葉を聞いた群衆は驚いた。それは主イエスが、彼らの律法学者のようではなく、権威ある者としてお教えになったからである。律法学者は、律法を解説し、律法に従うように民衆を教えた。しかし主イエスは、神の御言葉に従うように、とは言われなかった。むしろ、「わたしのこれらの言葉を聞いて行ふ者は皆、岩の上に自分の家を建てた賢い人に似ている」(24)と言われた。主イエスの言葉はまさに神の御言葉であり、人生の土台である。聞き流してしまい、土台のない愚かな人のような人生を生きるか、聞くだけでなく御言葉を行い、確固とした土台の上に私たちの人生を築き上げていくか、それは御言葉を聞く者の決断とその後の生き方にかかっている。賢くもなく愚かでもない第三の生き方は存在しないのである。(後藤公子)

テキスト マタイによる福音書 7章24～29節
参照カテキズム 子どもカテキズム 問70
 ウェストミンスター大教理 問155, 157, 160
 ウェストミンスター小教理 問89, 90

〔単元のねらい〕

しばらくの間、主イエスの教えられた山上の説教から学び続けてきた。そして子供たちは、主イエスの教えられる御言葉に耳を傾け、その上で実践することが求められてきた。今回、山上の説教を締めくくるにあたって、主イエスは改めて主の御言葉に聞き従うことの大切さを教えている。つまり、キリスト者として実践することは、御言葉に従ったものでなければならぬ。理解しているつもりで御言葉を聞き流すことによって、誤った道を歩んでしまうことの危険があることを、確認していただきたい。

「御言葉に聞き従いなさい」

みなさんは、どのような家に住んでいますか？一軒家の人もいれば、アパートやマンションの人もいるかと思います。今の家が気に入っており、ずっと住み続けたいと思っている人もいれば、できればもっと素晴らしい家に移りたいと思っている人もいるかも知れませんね。

先程お読みした聖書には、自分の家を建てた二人の人のことが記されています。みなさんも、自分の家を建てたのなら、自分の部屋をこのようにしたい、あのようになりたい。カーテンは……、壁紙は……、といろいろ考えることかと思えます。聖書に記されている二人の人たちも、同じように、自分たちが住むために最適な家を建てようとして建てたことでしょう。二人が建てた家は、二人とも、気に入った、素晴らしい家だったことでしょう。二人はそれぞれ新しい家での生活を楽しんでいたことでしょう。

しかし、雨が降り、川があふれ、強い風が吹いた時、二つの家の状況はまったく異なったのです。最初の人の家は、まったく被害もなく、変わりありませんでした。しかし、後の人の家は、倒れてしまい、もう住むことなどできなくなったのです。後の人の家が、手抜き工事であったのではありません。両方の家は、同じようにしっかりとした工事で造られた立派な家でした。後の人の家だけが、

沼地に建てられていたのでもありません。建てられている場所は、どちらも同じような砂地の家と考えてよいでしょう。

なぜ、先の人の家はまったく被害がなかったのに、後の人の家は住むことができないほどの被害が出たのでしょうか。見た目では、分からないかもしれませんが。しかし、家をどのようにして造ったのかを確認してみれば、その違いがはっきりするのです。最初の人は、砂地でそのまま建てたのでは、雨が降ったり、地震が起こったりすれば、倒れることを知っていました。だから、深く掘り進み、堅い岩に土台を据えたのです。だからこそ、どれだけ雨が降っても、大きな地震が起こっても、大丈夫なように造られていました。

しかし、倒れてしまった家を建てた人は、そこまで考えなかったのです。そのため、見える部分に関しては立派に造りましたが、見えない部分である基礎がまったくなく、大雨が降った時に、倒れてしまったのです。

つまり二人の違いは、見えない部分のことまでしっかりと考え、基本に忠実であったのか、見える部分にのみ注意をして、見えない部分のことを考えることができなかったのかの違いです。

私たちが生きていくということも同じです。学

校の勉強をしたり、知識を蓄えたり、習い事の練習に取り組んで上手になることは、必要なことです。そうすることによって、働く時に、いろいろと役に立つからです。しかし、そういうことは、誰もが行っていることです。

けれども、私たちが生きていく上で、見えない部分の基礎としてしっかりと持っていなければならないのは、聖書であり、神さまを信じるということです。

私たちは神さまを求め、神さまを信じて教会に來ています。しかし、まわりには教会に來ることがないお友だちがいっぱいいます。皆さんの中に、なぜ、教会に來なければいけないのかと、疑問に思っている人もいるかもしれません。ほかのお友だちと同じように、日曜日に遊びに行きたいと思うお友だちもいるかもしれません。

しかし、日曜日に教会に來ること、聖書の御言葉を読み、説教を聞くことは、私たちが生きていく上での基礎を造っているということなのです。神さまは、聖書の御言葉をとおして、いろいろなことを教えてくださるのです。これは、神さまを知らず、教会に來ようとしらない人たちとはまったく違うのです。

そして、その違いは、私たちの苦しいときに

てくるのです。私たちは、毎週教会に來て、聖書を読み、説教を聞き続けているのですが、私たちがほんとうに苦しいときに、どうすればよいのか、神さまは聖書の言葉と祈りをとおして助けてくださいます。どうしたらよいか分からないとき、私たちは神さまに祈り、神さまに助けを求めることができます。主なる神さまは、聖霊によって、いつも私たちと一緒にいてくださいます。そして必要な対処や必要な答えをお与えくださるのです。

しかし、神さまを知らなければ、苦しいとき、その問題をすべて自分の力で解決しなければなりません。これは大変なことです。

神さまを信じる、神さまがお語りになる聖書を読み、神さまがお語りになる説教を私たちが聞き、神さまがお語りになることに聞き従うならば、私たちは、どのようなときにも、つまづくことなく、確かな道を歩み続けることができます。時として、教会に行きたくない、礼拝したくないと思うことがあるかもしれません。けれども、神さまがお語りになる聖書の言葉に耳を傾け、神さまのお語りになるところに従って歩みましょう。祈りながら、取り組んでいきましょう。(辻 幸宏)

〔今週の暗唱聖句〕 ヤコブの手紙 1章22節

御言葉を行う人になりなさい。

自分を欺いて、聞くだけで終わる者になってはいけません。



〈ねらい〉

わたしたちの毎日の歩みの積み重ねは、家を建てるのに似ている。イエスさまはわたしたちの岩。この岩の上に家を建てる人になろう。

〈展開例〉

海に行って、砂でお山を作ったことがありますか？ てっぺんに宝物を乗せると、すてきなお山のできあがり。でも波が寄せてくると、お山はだんだんけずられて、あーあ、宝物も流されちゃった。もしそんな砂の上にお家を建てたなら、波が来たらたちまちペチャンコになりますね。

イエスさまは岩の上に家を建てなさい、とおっしゃいました（以下、テーブルか台を岩に見立て、積み木で家を建てていく）。

固い岩の上に家を建てればだいじょうぶ。この岩はイエスさま。イエスさまを信じて、イエスさまと一緒に歩む人は、岩の上に家を建てているのです。

イエスさま、おはようございます。朝のごはんをいただきます（積み木を一つ置く）。ごはんを食べて元気もりもり（積み木を置く）。体もぐんぐん大きくなります（積み木）。幼稚園に行きます。

お友だちとおにごっこ、楽しいな（積み木）。お絵かき、かけっこ、楽しいな（積み木）。ピアノをならう子もいます（積み木）。サッカーをがんばる子もいます（積み木）。じょうずになってうれしいな（積み木）。弟とけんかしちゃった。でもイエスさまがゆるしなさいって教えてくださったので、ごめんねって言って、仲直りをしたよ（積み木）……。

こうやって、お家が建っていきます。もっと大きくなったら学校でお勉強（積み木）、もっともっと大きくなったら、お父さんやお母さんのようにお仕事（積み木）。すてきなお家ができてきましたよ。この家は岩の上に建っているから、嵐がきてもだいじょうぶ。せっかくすてきなお家でも砂の上に建てたら、嵐がきたらペチャンコですね。いつでもイエスさまと一緒に歩んで、岩の上に家を建てる人になりましょう。

〈お祈り〉

神さま、今週、何をするにもイエスさまと一緒にすることができるよう。岩の上に家を建てるかしこい人にしてください。イエスさまのみ名によって、アーメン。

〈やってみよう〉

○子どもと一緒に積み木で家を作る、または子どもに作らせる（展開例のように声をかけながら）。

○歌をうたおう。

- 1 かしこい人が家を建てた 岩の上に家を建てた かしこい人が家を建てた 雨がふってきた
雨がふり水が増し、雨がふり水が増し、雨がふり水が増し でも家はだいじょうぶ！
- 2 おろかな人が家を建てた 砂の上に家を建てた おろかな人が家を建てた 雨がふってきた
雨がふり水が増し、雨がふり水が増し、雨がふり水が増し その家はべっちゃんこ！
- 3 イエスの上に家を建てよう 岩の上に家を建てよう イエスの上に家を建てよう
雨が降ってきた 雨がふり水が増し 雨がふり水が増し 雨がふり水が増し
でも家はだいじょうぶ

〈ねらい〉

御言葉を聞いて行う人、聞くだけで行わない人の違いを知り、聞いて行なう人として、私たちが生かされていることを知る。

〈はじめに〉

子ども礼拝があって、その後分級の時間を持っておられると思います。あわただしく、礼拝から分級へと教室を移動し、子どもたちを集め、分級が始まります。時間がなく、子どもたちをせかしてしまう時もあるかもしれません。移動するほんの短い時間でも祈りながら、今日の分級のため主ご自身がこの私をお用いくださるよう、また子どもたち一人ひとりを愛することができるように祈りましょう。そして、暖かく、笑顔で子どもたちを迎えましょう。

〈御言葉に聴きましょう〉

- ①神様の言葉を聞いて行う人は、どんな人に似ていますか。
- ②雨が降り、川があふれ、風が吹くと、その家はどうになりましたか。
- ③その家の土台は何でしたか。
- ④神様の言葉を聞くだけで、行わない人は、どこに家を建てた人に似ていますか。
- ⑤その家は、雨が降り、川があふれ、風が吹くと、どうになりましたか。

〈展開例〉

今日のお話は、紙芝居や絵本で知っている、何度も聞いたことがある、お話かもしれません。岩と砂の違いはわかりますね。岩はゴツゴツとして固いです。砂はお山を作っても簡単に崩すことができます。岩の上に建てた家は、どんな嵐がきても、倒れません。でも砂の上に建てた家は、嵐がくると、簡単に倒れてしまいます。神様は何を教えてくださいとうとしたのか、もう一度考えてみましょう。

岩の上に家を建てた人は、神様の言葉を聞いて

行う人、砂の上に家を建てた人は、神様の言葉を聞くだけでその通りに行わない人、この二つのことが書かれています。私たちは、いつも教会に来て、神様を礼拝しています。何度も何度も聖書のお話を聞いています。その話、知ってる！と思うことが何度もあるでしょう。反対に、初めて聞くお話もたくさんあると思います。聖書のお話を聞く、自分で聖書を読む、聖書の言葉を覚える、ということはとても大事なことです。神様はそのことをとても喜んでくださっています。聞いて、読んで、覚える、そして、イエス様は、次に、私たちがすることを言われました。「聞いて、その神様の言葉を実行しなさい」。聞いたことを実行する、聞くだけでなくで行う人になりなさいと言われました。

聞くだけの人は、もし、困ったことや悩むことが出てくると、簡単に元気を失ってしまう、簡単に神様から離れてしまいます。でも聞いてちゃんとその通りに実行する人は、もし困ったことや迷うことや、どうしていいかわからないことが出てきても、神様から離れないで、神様に守られて歩むことができます。

お父さんやお母さんを大事にしてください、お友だちと仲良くしてください、神様を信じなさい、などたくさん神様の言葉を私たちは聞いてきました。教会から家に帰った私たちはどうでしょう。すぐに、けんかが始まりますか。神様のことを忘れてしまいますか。うそをつきますか。そうですね、毎日神様の言葉をちゃんと実行してます、とは言えないのが私たちです。難しいときがいっぱいあります。できない私たちです。でも神様は、実行する人になりなさい、と言われました。その力を神様に求めるなら、良いものを必ずくださる神様は、喜んで神様に従う力も私たちにくださいます。神様にお願いしましょう。

〈お祈り〉

神様、神様の言葉を行う人にならせてください。アーメン。

〈ねらい〉

主イエスの御言葉に聞き従うことを学ぼう。

〈展開例〉

今日のお話で、家の土台の大切さがよくわかると思います。このお話では、家を砂の上に建てたか、岩の上に建てたかということでした。イエス様は何を言われていたのだろう。家の話だけをしたかったわけではないよね。命の話をなさったのです。みんなが、どんな土台に立って生活をするか、人生を送るか、ということです。

土台の大切さはわかっていると思うので、大切なことは人生の土台を何にするか、ということだね。みんなはどんな土台を選びますか。人生にこれがあったら大丈夫というものを教えてください。(子どもの心を掴むために、いきなり答えはイエス様に従うことだ、という話へ持っていくことは避けたい)。いい答えをみんな持っていると思います。いろいろなことを考えて、大人になった時のことを考える人もいます。

堅い岩に家を建てた人は、将来に起こることをちゃんと考えていました。私たちも人生を堅い岩の上に建てるためには、将来のことをちゃんと考える必要があるんだね。もし考えず、今、目の前だけのことを考えていたら、これはいいと思った土台でも、いずれ役に立たなくなります。目の前のことだけを考えてしまうのが、罪人のしてしまうことなんです。

先生は中学生の頃、人生をうまく過ごすためにはどうすればいいか考えたことがあります。いい答えがなかなか見つかりませんでした。でも、とりあえず勉強が人よりもできればいいだろう、と思いました。いい高校や大学へ行けば、いい会社に入って給料をもらえて、周囲の人からも認められて、とりあえずうまく生活できるだろうなあと思ったんです。この答えは、大間違いだとは思わ

なかったけど、大正解とも思いませんでした。だから心の中では、どこか満たされなくて、むずむずした感じがしていました。大正解を知りたかったし、誰かにわかるように教えて欲しかった。でも、その時はわかりませんでした。そして、高校生になった頃、勉強をとっても大切にしつつも、それだけでは命を守りきれないと思いました。そして、「これは土台じゃない、これは使うものだ」、と思いました。それでも、なお心は揺れ続けるんですが、やっぱりイエス様に従うことに優る土台はないなあと、思いました。

土台は、一番恐ろしい災害や出来事に耐えられることが必要です。人生で一番恐ろしい災いや出来事は何だろう。……いろいろあるでしょう。どれも恐ろしいと思います。でも一番恐ろしいものがあります。よく考えてね。それは、死んだ後の神様の裁きです。もしこの裁きに耐えられなかったら永遠の滅びになってしまうんだね。生きている間にいろいろあるけど、この死後の神様の裁きよりははまだましです。これに耐えられる土台を選ぶのが一番の大正解。その土台は、イエス様を信じて従うことです。

では、なぜイエス様を信じて従ったら耐えられるのでしょうか。それは、私たちの受ける裁きを、イエス様が代わりに十字架で受けてくださったからです。神様の裁きに耐えられたらどうなるのでしょうか。それは復活です。イエス様は復活しました。だから間違いありません。イエス様に聴き従うことを人生の土台にすることが一番の大正解です。

〈祈り〉

神様。私たちが、イエス様に聴き従うことを人生の土台にすることができますように。イエス様の御名により祈ります。アーメン。

〈ねらい〉

イエス様が権威をもって教えてくださった生き方を確認する。

〈展開例〉

①今日の聖書の譬え話はわかりやすい。イエス様の言葉のとおり生きるなら、その人生は崩壊しない。言葉を聞いてもそれをしないなら、そういう人の人生は倒壊する危険な人生だ。ただ、聖書の最後の言葉、「権威」という言葉は普段あんまり使わない言葉じゃないだろうか？ ○ ○研究の権威とか○○界の権威、こんな使われ方を耳にするくらいだろう。権威というのは、なにかをするための力と権利という意味。人々は、イエス様が旧約聖書に書かれた神様に従う生き方を聞いて驚いた。神様の思いを告げ知らせる正当な権限と、その教えに並々ならない力を感じたからだ。つまり、イエス様の語る教えは、本当に神様がそのとおりのことをされる、そういう力を持っているわけである。

②今日の譬え話は、絵本のような教訓話でも、ためになる話でもない。イエス様が語った通りに確実になりますよ、というトンでもない、ビックリする教えということだ。君の人生はイエス様の言葉を聞くだけで行わないなら、障害を前にして、ひどい倒れ方をする。これ確実。君の人生はイエス様の言葉を聞いて行うなら、どんな障害があっても大丈夫。これ確実。みんなは教会に来て、聖書の話をしている。ここまでは倒れるかどうかに関係ない。聞いて、行うかどうかが明暗を分ける。「イエス様の教えは信じればいだけじゃないの？」こんな疑問があるかもしれない。じゃあ、反対に質問しよう。信じるって何？ 信じるってというのは「本当にそうだと思う」ってこと。本当にそうだと思うとき、人は行動をおこす。「あなたは病気です。

手術しないと死にます」。こんな診断を受けたとする。信じる人は手術を受ける。信じて手術を受けない人は病気に勝つ自信があるか、やはり信じていないのである。「信じる」とは頭で理解して終わってしまう知識を得ることや気持ちだけのことではない。知ることと行うこと、合わせて「信じる」ということである。イエス様の言葉を知って、従うこと。これが君達の人生を左右する。イエス様の言葉に力があることは全ての人が体験する。信じて、命を得るという仕方。あるいは信じないで破滅する、という仕方である。

③しかし、そうはいっても聖書のページはかなりのものである。まずはやれること、そして、その週に教会で教わったこと、日毎に聖書から教えられたこと、ちょっとずつ土台に手を入れていくしかない。言われたことを完全にできるかどうかでためらうのはナンセンス。やろうとする思いをもって、そこに足を踏み出すことが、行うためにまず大切だ。やってみなければわからないことも聖書の中には数多い。祈りが聞かれていく喜び。愛せる者に変えられていく喜び。これは、やってみなくちゃ始まらない。そして、始まったなら必ずそこには神様からの格別な恵みが用意されている。テレビで見る有名ラーメンを食べもせずに「おいしい！」とは言えない。「おいしそうだ」とは言える。しかし、これはまだ、本当の味わいを知らない人の声である。イエス様には力があると信頼し、イエス様の教えに素直に従って、ヤバイ状況の中でも絶対に倒れない安心感と無敵感をぜひ味わって欲しい。

〈祈り〉

権威をもっておられるイエス様。あなたの言葉を聞いて、行える者にしてください。アーメン。

テキスト マタイによる福音書 8章5～13節

〈背景と文脈〉

主イエスは公生涯の中でおもに三の働きをされた。教え、宣教、癒しである（4:23, 9:35）。マタイ8～9章には、主イエスがなさった十の奇跡が記されているが、そのうちの九つは癒しに関するものである。主イエスは癒しのみわざを通して、ご自身の御力と権威を示された。癒しはまさに主イエスの神性を証明するものであり、主は癒しを通して、ご自身が旧約聖書で約束されたメシアであることを、目に見える形で人々に証しされた（8:16-17, イザヤ8:4, 35:5-6）。癒しの究極の目的は、人々が主イエスをメシアとして信じ、永遠の命を受けることである。

〈百人隊長の願いと信仰（8:5-9）〉

カファルナウムは主イエスのガリラヤ地方における伝道の中心地だった。主がそこに入られた時、一人の百人隊長が来て主に懇願した。百人隊長はローマの兵士百人の長であり、指揮官だった（注解書によると、下にいる兵士は必ずしも百人とは限らなかったようである）。彼自身、権威のもとにあり、また同時に彼の下に部下として多くの兵士がいた（9）。

百人隊長が懇願したのは、中風の僕の癒しであった。並行記事（ルカ7:1-10）を見ると、この僕は百人隊長に重んじられている部下だった（2）。また百人隊長は、ユダヤ人を愛して会堂を建てた（5）、とあり、彼がユダヤ人とユダヤ教に好意を寄せていたことがうかがえる。マタイとルカの記事の間には違いがある。マタイが、百人隊長自身が主のもとに来て懇願した、と記しているのに、ルカは、彼がユダヤ人の長老を使いに行って主に懇願した、と言っている。これは矛盾ではない。懇願したのは長老たちであっても、それは百人隊長の特使としての懇願であるからである。マタイはそれを不必要と考え省略したと考えられる。

百人隊長の懇願に対して主は直ちに「わたしが

行っていやしてあげよう」と応答された。しかし百人隊長は主イエスを彼の家に迎えることを拒んだ。当時ユダヤ人は異邦人と交わらなかった。彼は異邦人だったため、ユダヤ人である主イエスを家に迎えることをためらった、と思われる。「主よ、わたしはあなたを自分の屋根の下にお迎えできるような者ではありません。ただ、ひと言おっしゃってください。そうすれば、わたしの僕はいやされます」（8）。そして、彼は、彼と部下の兵士との関係にたとえて、主イエスに対する信仰を表現した。彼の言葉は部下に対して絶対的な権威をもつものだった。そのように、彼は、主の御言葉が絶対的な権威をもって働き、御心を成し遂げると信じたのである。

〈主イエスの賞賛と警告（8:10-13）〉

主イエスは彼の信仰を賞賛され「イスラエルの中でさえ、わたしはこれほどの信仰を見たことがない」と言われた。そして、終末に逆転が起きる可能性を示唆し、人々に警告を与えられた。神の御国が完成するとき、宴会が催されることは旧約でも新約でも預言されている（例、イザヤ25:6, マタイ22:1-14, 黙示19:9）。ユダヤ人たちは神の選びの民として、彼らだけがその宴会に招かれ、アブラハム、イサク、ヤコブなどの偉大な信仰の族長たちと共にその席につくことができる、と思っていた。しかし主イエスは、「東から西から大勢の人が来て」（11）宴会につくと言われ、多くの異邦人がその宴会の席に着くことを示唆された。それと対照して、「だが、御国の子らは、外の暗闇に追い出される」（12）と言われ、御国の民としてのイスラエルが主イエスをメシアと信じないために、その宴会の席から追い出されることを予告され、警告を与えられた。異邦人の百人隊長は信じ、その信仰は賞賛された。それに対して、ユダヤ人の多くは信じなかったからである。百人隊長の信仰は報われ、僕は御言葉によって癒された。（後藤公子）

テキスト マタイによる福音書 8章5～13節
参照カテキズム 子どもカテキズム 問22, 25, 27

〔単元のねらい〕

イエス・キリストの奇跡物語である。子どもたちが「イエスさまって、すごい！」と驚き、不思議に思うことも大切だが、驚いて終わりなのでなく、イエスさまがどういう御方なのかをじっくり考えさせたい（黙想させたい）。そのためにも、中風の病気をいやされる奇跡の御業を通して、イエス・キリストにおいてこそ、神さまの国が始まり、恵み深い神さまの御支配が行われていることを教えて、子どもたちが世の中をイエス・キリストと共に安心して歩むことができればと願う。

「イエスさまのひと言がきみを元気に！」

イエスさまは、子どもがとても大好き。ひとりひとりの名前を呼んで愛してくださいます。ですから、先生も、ひとりひとりお名前を呼んで、ご挨拶しましょう。〇〇君、〇〇ちゃん……。おはようございます。

さて、マタイによる福音書から、イエスさまのお話をずっとしていますが、この福音書には、第8章のところから、イエスさまが病気を治されたり、悪霊を追いつけられたり、来週お話ししますが、嵐を静められたりと、いろんな不思議なことをなさったことが書いてあります。そういう不思議なことを「奇跡」と呼んでいます。イエスさまが一番はじめに行われた奇跡のことは、ヨハネによる福音書に書いてあります。一番はじめの奇跡って、何か知っている？ それは、大きな大きなガリラヤの湖の西の方にあるカナという村での結婚式でのことでした（ヨハネ2:1-11）。イエスさまは、水瓶にたまったお水をぶどうのお酒に変える奇跡を行われたのです。イエスさまは、本当の人間でありますが、この世界を無からお造りになった神さまの独り子でられますから、お水をぶどうのお酒に変えることぐらい、簡単なのです。

さあ、そのカナの村からだいぶ離れたところ、東の方で、ガリラヤの湖の近くに、カファルナウムという大きな町があります。今日のお話は、イエスさまが、その町においてになったときのことです。その町にはローマの軍隊の百人隊長がいま

した。この百人隊長は、ユダヤ人ではありませんでしたが、どうやらルカによる福音書（7:1-10）によると、この世界を無からお造りになった唯一の神さまを信じているみたいです。ところで、この百人隊長の大事な部下が、中風という病気で、家で寝込んで、ひどく苦しんでいたのです。中風というのは、体の自由がきかない病気です。それで、この百人隊長は、イエスさまのお言葉には、神さまの力があることをうわさに聞いていましたから、イエスさまがおいでになったと聞いて、早速、イエスさまのところに行って、愛する部下を治して下さるようお願いしました。

すると、イエスさまは、「わたしが行って、いやしてあげよう」（6）と喜んでおっしゃいました。先生が、もし百人隊長だったら、イエスさまを家にすぐに案内すると思いますが、この百人隊長は違っていました。こう言ったのです。「主よ、わたしはあなたを自分の屋根の下にお迎えできるような者ではありません。ただ、ひと言おっしゃってください。そうすれば、わたしの僕はいやされます。わたしも権威の下にある者ですが、わたしの下には兵隊がおり、一人に『行け』と言えば行きますし、他の一人に『来い』と言えば来ます。また、部下に『これをしろ』と言えば、そのとおりにします」（8, 9）。百人隊長は、隊長なので、彼の軍隊の中では一番偉い人でした。ですから、百人隊長の命じるままに兵隊は動きました。それ

と似たように、イエスさまは神さまから遣わされた力あるメシアであられるので、イエスさまが命じられるままになると、彼は信じていました。そして、そういう偉いイエスさまを家に迎え入れることさえ、おそれ多いと思っていたのです。

イエスさまは、このことを聞いてとても感心なさいました。「御国の子ら」と呼ばれているユダヤ人の中にも、このような信仰を持っている人はまだいないからです。そして、イエスさまは百人隊長におっしゃいました。「帰りなさい。あなたが信じたとおりになるように」(13)。イエスさまがこうおっしゃったとき、百人隊長の大事な部下の中風は治ったのでした。

イエスさまは、何でもおできになる神さまの独り子ですから、中風の病気を治すことぐらい、とても簡単です。でも、みんなは、「イエスさまって、すごいな!」と驚くだけでなく、ぜひ、今日の奇跡の物語から学んでください。それは、どういうことかということ、イエスさまのお言葉には力があるということ。前回のお話しですと、権威があるということ。イエスさまが、「あなたが信じたとおりになるように」とひと言おっしゃっただけで、だいぶん離れた家にいた百人隊長の大事な部下の中風が治ったのです。イエスさまのお言葉には力があります。

イエスさまのお言葉には力があるということで、これは、ヨハネによる福音書の最初のところでこのように教えられています。「初めに言があっ

た。言は神と共にあった。言は神であった。この言は、初めに神と共にあった。万物は言によって成った。成ったもので、言によらずに成ったものは何一つなかった」(1:1-3)。

ヨハネによる福音書では、イエスさまのことが「言(ことば)」と呼ばれています。この世界は、その「言」によって造られたと言われています。この「言」には力があります。そうすると、子なる神さま、イエスさまも、父なる神さまと一緒にこの世界をお造りになったということです。それで、はじめに、神さまは何をお造りになったか知っているかな? そう、「光」をお造りになりました。神さまが、ひと言、「光あれ」とおっしゃると光ができたと書いてあります(創世記1:3)。このように、神さまのひと言には力があるのです。イエスさまは神さまでられますから、やはり、イエスさまのひと言にも力があります。今、そういうイエスさまのお言葉は、この聖書に書き留められています。そういうイエスさまのお言葉を聞いたり、読んだりするならば、たとえ、ひと言でも聞いたり、読んだりするならば、悲しいときには慰められたり、落ち込んでいるとき、がっかりしているときには元気が与えられたりします。

さあ、今日からの新しい一週間も、イエスさまが、力あるお言葉によって、みんなを守り導いてくださるように、そして、元気にしてくださるようにお祈りしましょう。(長谷川潤)

[今週の暗唱聖句] マタイによる福音書 8章8節後半

ただ、ひと言おっしゃってください。そうすれば、わたしの僕はいやされます。



〈ねらい〉

イエスさまは癒しのみわざを通し、ご自身の御力と権威を示されました。この力あるイエスさまを救い主と信じることにより永遠の命を受けることを学びましょう。

〈展開例〉

1. イエスさまは誰の病気をなおしてくださいましたか？

2. 百人隊長はイエスさまにどのようなお願いをしましたか？

3. イエスさまはどのようにして病気をなおされましたか？

葉でもなくただ権威あるお言葉のみで病をいやされた奇跡を力強く伝えましょう。

4. 百人隊長のどのような信仰がイエスさまに喜ばれたのでしょうか。

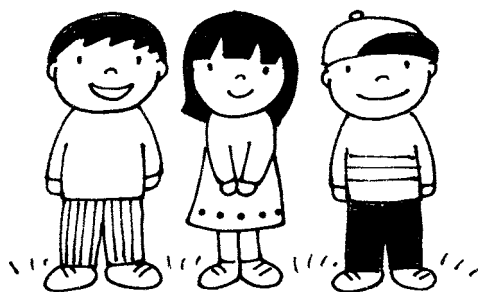
主イエスのみ言葉の権威を信じ、その御言葉をこそ求めていくという信仰を伝えましょう。

〈お祈り〉

天の父なる神さま、御名を讃美します。わたしたちを罪から救うために、イエスさまが重い病気をなおしてください救い主としてのお力を示してくださいったことを、ありがとうございます。イエスさまのお力を信じ、永遠の命をいただくことができることを感謝いたします。イエスさまの御名によってお祈りします、アーメン。

神さまは

私たちの味方



〈ねらい〉

全てを治めご支配なさる神様の大きな力の中に、小さな私たちも生かされていることを覚えよう。

〈はじめに〉

子どもたちのこの一年の学年が終わります。元気に終わられることを神様に心から感謝しましょう。しかし、病気で入院をしているお友だちもいるかもしれません。神様がそのお友だちを癒してくださいるように、最善の治療が与えられるよう祈りましょう。しばらく何らかの事情で教会に来ていないお友だちもいるかもしれません。また一緒に神様を礼拝できるよう祈りましょう。そして、これから始まる春休みが、全ての災いから、一人ひとりが守られますようお祈りしましょう。春休みの間の日曜学校も休まず来ることが出来ますよう、一人ひとりを励ましましょう。

〈御言葉に聴きましょう〉

- ①イエス様に近づいてきて、お願いを一生懸命したのは誰ですか。
- ②何をお願いしたのですか。
- ③病気の人は癒されましたか。

〈展開例〉

イエス様の大事な働きは、神様のことを特にお弟子さんたちに教えること、多くの人に神様の国を宣べ伝えること、そして、病気の人をなおすことでした。この三つのお働きのために多くの時間を使われました。

今日のお話は、イエス様が病気の人をなおしたお話です。今のように、風邪を引いたら、すぐに近くの病院に行って、お医者さんに診てもらって、お薬や注射をしてもらって元気になる、レントゲンをとって、どこが悪いのか調べてもらって、手術もして、元気になったら退院する、なんてことはありません。昔の人は病気になると大変でした。軽い風邪ぐらいなら今のように家でおとなしく寝てれば治ったかもしれません。でも重い病気になると治療をする病院がありませんから、そのまま家で過ごすか、家族に見放されて頼る人もなく、道端でただ苦しみを我慢するか、とにかく心も体も痛い苦しい存在、ひとりぼっちの孤独な存在

だったと思います。そんな中、ローマの百人隊長は、自分の部下が中風という体が動かない病気になって苦しんでいるので、イエス様になんとか助けて欲しいと必死でお願いしに来たのです。優しい隊長さんですね。

イエス様はすぐに、この部下の人のところに行きましょうと言ってくださったのですが、隊長さんは、「いえいえ、わざわざ家まで来ていただくのは申し訳ありません。イエス様、あなたのような力のあるお方なら、この場で『治れ』と言っただけで私の部下は癒されます。どうかお願いします」と言ったのです。この隊長さんはイエス様がどういうお方なのかよく分かっていたのですね。イエス様もこの隊長さんのイエス様に対する信頼をととても喜んでくださいました。そして、本当にそのとおりになって、離れている部下の病気は、イエス様がそばにいらなくても、ちゃんと癒されていたのでした。

部下の人はどんなにうれしかったでしょう。周りの仲間はどんなにびっくりしたことでしょう。一生懸命お願いした百人隊長さんも、やっぱり信じたとおり、イエス様は私たちを超えた大きな力を持っておられる方だ、とますますイエス様のことが好きになったでしょう。ますますイエス様を信頼したでしょう。私たちはどうでしょうか。イエス様はどんな方だと信じてますか。

イエス様は一人ぼっちで悲しんでいる人、病気で苦しんでいる多くの人を癒されました。かわいそうと思うからですか。もちろんイエス様は心から同情されました。でもそれだけではありません。病気をすっかり治すことを、奇跡をみんなに見せることを通して、「本当にわたしは神の子なんですよ、救い主なんですよ。ですからこのわたしを信じて、皆罪を悔い改めて、救いを受け取ってくださいよ」と、多くの人に伝えていたのです。私たちも、力あるイエス様のお働きを信じて、このお方を頼りましょう。

〈お祈り〉

神様、あなたのお言葉の力を信じ、あなたを心から信頼する子どもにしてください。アーメン。

〈ねらい〉

イエス様の言葉には、神の国を始める力がある。
この言葉に従うことを学ぼう。

〈展開例〉

イエス様は、百人隊長の部下を癒しました。部下に会わずに言葉を語っただけで、言葉の力で、癒したのです。確かに印象深い話だけでも、ここは一步立ち止まって、イエス様の言葉に力があるというだけでなく、イエス様がどういう方なのかを一緒に学びましょう。

まず、百人隊長は外国の出身だったから、ユダヤ人から避けられていました。神様に救われることなんかないだろうと思われて、差別を受けていたんです。でも、そんな人の造った差別を、イエス様は乗り越えていかれるんですね。

ここで百人隊長が誉められたのはなぜでしょうか。非常に信仰深かったからだけでも、どんな点で信仰深かったのでしょうか。まだ病気が治る前に、イエス様が語るだけで必ず癒してくださると信じた点です。ユダヤ人たちは、こんな外国人なんかに神様の力が現れるはずはないと思っていたでしょう。でも、外国人でも、人からどんな差別を受けている人でも、忠実な信仰を持つ者にイエス様は喜んで言葉の力を発揮してくださいます。人の造った差別の壁があっても、信じる人に神様の言葉の力は届くんですね。

ところで罪人が、神様の働きについて、すぐ誤解してしまうことは何だろう。それは、神様はこういうところに働いてくださるって、決め付ける悪い癖があることです。他に、これくらいなら、ちょっとだけなら働いてくださるだろうと、勝手に限定しちゃうんですね。でも、それは間違いです。信じる者なら誰であっても、神様は限りなく愛して、力を発揮してくださいます。私たちは決めてつけてしまう悪い癖を捨てていかなければいけません。

百人隊長も罪人です。イエス様が言葉を語って

くださったのは、なぜ考えてみよう。お語りになりたくなかったら、頼まれても語らなかつたはずだね。それは、信じる者に神様の力が現れることを、イエス様ご自身が望んでおられるからです。これがイエス様の大切なお気持ちなんですね。私たちは、イエス様が神様の御国を広げようと望んでおられるお気持ちを大切にしましょう。そして私たちも望んで、信じましょう。必ず、イエス様のお言葉の力はあなたに届くはずですよ。遠く離れていても関係ありません。君はこのことを信じる準備はできているかな。神様の言葉の力を受ける準備はできているかな。イエス様はもう準備が済んでいます。今か今かと君を待っている。今こそ、イエス様に祈ろう「ただ、ひと言おっしゃってください。そうすれば、あなたの言葉は実現します」と……。

最後に、イエス様の言葉は、どこでそのとおりに起こったか考えてみよう。イエス様の目の前で起こりましたか。イエス様と百人隊長の部下は相当離れていました。でも、距離など関係ありません。イエス様の言葉にはそういう力があるからです。だから今、イエス様は、私たちの見える仕方でおられないけれども、語ってくださる言葉は私たちのところにちゃんと届くんです。こうして私たちはイエス様の言葉を信じることができるんだね。神様の言葉には本当に大きな力があります。

〈祈り〉

神様は、言葉の力を世界へ広げて、神様の御国を広げようと望んでおられます。そのお気持ちを大切に、私たちがイエス様のお言葉の力を信じ続けられますように。イエス様の御名により祈ります。アーメン。



〈ねらい〉

百人隊長の信仰から、イエス様を信じ、その言葉の力を信じる姿勢を学ぶ

〈展開〉

①今日は百人隊長の僕の「中風」という病気が癒されたお話し。イエス様はその病を奇跡によって癒された。中学生ともなると色々と突っ込みを入れたくなる年頃じゃないかと思う。「奇跡」と聞いて素直に信じられる人もいれば、「そんなことあり得ない」と疑う人もいるだろう。疑って当然。奇跡というのはそういう「あり得ないこと」がおこっちゃうことを言う。だから、「奇跡」というのは理屈で考えてもわからない不思議なことなのである。世の中にも色々と不思議なことがあるが、そういうミステリーは意味不明なことが多い。どこかの国のお坊さんの手から金の粉が出るとか、手を触れずに人を投げ飛ばすとか、まったく謎。しかし全部が嘘っぱちはわからない。世界には色んな不思議なことがある。ただ、イエス様の奇跡には意味がある。旧約聖書の時代から約束されていた救い主が自分だということを知らせる証拠（しるし）という意味である。現代であやしい人が不思議なことで目を引こうとすることがあるけど、それはただの不思議な人。聖書とは関係ない。

②みんなが突っ込みたようなことをちょっと長く話したが、今日、イエス様がみんなに伝えたいのは、奇跡は本当か嘘か、こんなことじゃない。今日、注目したいのは百人隊長のイエス様を信じる態度をイエス様が褒められたということ。そして、イエス様はその思いに応えてくださったということである。百人隊長はイエス様が権威ある方、つまり神様から人を癒す力と権限を与えられている方であることを信じた。さらに、

その信仰は、自分がイエス様をお招きするのに相応しくないという自分の分をわきまえる信仰だった。しかも、イエス様が神様から力を与えられているのであれば、命令するだけでことたり、と迷いなく思える信仰だった。

③皆はイエス様の言葉には力がある、とこれほどに信じているだろうか？ イエス様とは場所を超えて、距離を超えて力を発揮することの出来る御方なのである。先週、皆はイエス様の言葉には権威がある、力があるということ聞いた。その力は場所を超える力である。そして、イエス様は、そのことを信じて求める人への助けを出し惜しみされない御方。天におられるイエス様と現代社会を生きる自分に距離を感じる人がいるかもしれない。しかし、そんなことはイエス様にとってまったく問題ない。イエス様は距離を超えて君を助ける力をもっておられる。また、聖書の話聞いても「昔、誰かに語った言葉がなんで自分に当てはまるんだ」、こんな疑問を持っている人がいるかもしれない。確かに、イエス様の語られた言葉は、はるか2000年前の言葉だ。でも、変わらない本人が今も天で生きているわけだ。百人隊長に伝えてくださったイエス様は、君に対しても同じように伝えてくださる。コンクリートに囲まれ、科学の発達した生活の中にいると、苦しみを感じながらもイエス様が遠くに感じることもあるかもしれない。でも、安心してイエス様の言葉を信じて助けを求めて欲しい。そして、君が信じるのであれば、どれだけ離れた距離があってもイエス様は確かに君の日常に解決を与えてくださる。

〈祈り〉

イエス様。離れた所からでも力ある言葉で私を助けてくださることに感謝します。アーメン。

〈背景と文脈〉

主イエスの公生涯のお働きの中で、奇跡は重要な意味をもっていた。主のなさった奇跡を三つに分けることができる。病人の癒し、死人の復活、自然界に対する奇跡、である。今日学ぶのは自然界に対するものだが、天地を創造され、旧約聖書で主としてご自身を現された神が、ご自身の創造された被造物に御力を行使なさった奇跡である。この奇跡は弟子たちへの信仰教育でもあった。

〈突然の嵐におびえる弟子たち (8:23-25)〉

主イエスは多くの悪霊につかれた者たちや病人をいやされた (8:14-17)。忙しく働かれた主は、夕方 (マルコ4:35)、群衆をしばし離れて、静まるために弟子たちを誘って向こう岸へ行こうとされた。ガリラヤ湖は、ユダヤの国を北から南へ流れるヨルダン川の途中にある湖である。南北の長さは21キロメートル、東西の幅は13キロの美しい湖で、魚が取れた。ペテロやアンデレ、ヤコブ、ヨハネはこの湖で漁師をしていたとき、主イエスに召されて弟子になった。湖は、山や平野に囲まれており、その山から突然激しい風が吹くことがあった。主イエスと弟子たちが小さな舟に乗り、向こう岸に向っていたとき、突然その山から吹き降ろしてくる激しい嵐が起こった。小舟は波をかぶり、波にのまれそうになった。弟子たちは非常に恐れた。ペテロ、アンデレ、ヨハネ、ヤコブはガリラヤ湖の漁師だったから、それまで嵐に遭う経験があっただろうし、泳ぎは得意だったと思われる。しかしこの嵐は特別激しいものだったようだ。休む間もなく働かれた主はこのとき疲れて眠っておられた (8:14-16)。父なる神に信頼し熟睡しておられる主と、突然襲ってきた災害に慌てふためき、パニック状態になっている弟子の姿が非常に対照的である。

彼らは、主イエスを起こして言った。「主よ。助けてください。おぼれそうです」 (25)。「おぼ

れそうです」と訳された語は直訳すると、「私たちは滅びつつあります」となる。並行記事は、「先生、わたしたちがおぼれてもかまわないのですか」 (マルコ4:38) と記している。彼らが生命の危機に瀕しているのに、熟睡しておられた主に対するいらだちの言葉だった。これらの言葉から彼らの苦悩を読み取れる。しかし人間の苦境は主の機会であり、主はご自身に従う者を見捨てられるお方ではない。

〈嵐を静められた主イエス (8:26-27)〉

彼らの叫びを聞かれた主は起き上がられ、風と湖とお叱りになられた。並行記事 (マルコ4:39) は、「黙れ、静まれ」と主のお言葉を記している。主は自然界を従わせる御力と権能をもっておられる。それまで荒れ狂っていた激しい風と湖が突然静かになり、完全な凪になった。主は仰せによって嵐を起こし、また嵐に働きかけて沈黙させ、波を静めることがおできになる全能者である (詩編107:25, 29)。

「信仰の薄い者よ」は、マタイ6章30節で使われている語と同じである。直訳すると、「小さな信仰の者よ」となる。弟子たちは信仰を持っていたが、まだその信仰は小さかった。この奇跡を目の当たりにし、彼らは驚いた。「人々は驚いて、『いったい、この方はどういう方なのだろう。風や湖さえも従うではないか』と言った」 (27)。「人々は」 (27) は文脈から、乗り合わせていた弟子たちと考えるのが自然である。風や湖さえ従わせることがおできになれる主の御力を、目の当たりにしたことへの驚きの言葉である。主は天地を創造されたばかりでなく、それを保ち支配しておられる。主に従う信仰者はその全能の御手によって守られ、導かれている。主は、苦難の中で信じて主を呼ぶ者に答えてくださり、望みの港へ導いてくださる神である (詩編107:30)。この神に信頼しよう。 (後藤公子)

テキスト マタイ 8章23～27節
参照カテキズム 子どもカテキズム 問22, 25, 27

〔単元のねらい〕

今回も、イエス・キリストの奇跡物語だが、前回と同様、イエスさまがどのような御方なのかをじっくりと考えさせたい（黙想させたい）。イエス・キリストが自然界をも治められる真の王として証しされているが、今も、同じイエス・キリストが目には見えないが、聖霊にあって、共に歩んでくださり、力強く守ってくださることを子どもたちへの慰め、励ましのメッセージとして発信したい。

「イエスさまはきみといつも一緒！」

愛する子どもたち、おはようございます。

さあ、さっき、『こどもさんびか』（日本基督教団出版局）48番を歌いましたが、イエスさまは、子どもが大好き。今朝も、イエスさまはみんなを教会学校の礼拝式に招いてくださいました。そのイエスさまは、今はみんなの目には見えませんが、それでも、一緒にいてくださって、みんなを守ってくださる王さまです。今朝も、みんなのことを守ってくださるイエスさまのお話をしましょう。

さて、日本だと、毎年6月が梅雨の季節。梅雨というのは、雨がザーザー降る季節のこと。雨がザーザー降ると、みんなが蒔いたお花の種が、いっぱい、元気をもらって、きれいなお花を咲かせてくれます。動物さんたちも、お水が飲めるね。イエス様がいらしたパレスチナでは、ちょうど今頃が雨の季節です。ところで、雨がザーザー、ザーザー、いつまでも降り続けて、風がビュー、ビューといつまでも吹き続けると、大変だね。

この間のお話、おぼえてるかな？ カファルナウムという町で、イエスさまのひと言が、百人隊長の大事な部下の病気を治したというお話でした。そのカファルナウムの町は、広い広いガリラヤの湖の近くにありました。

ある日の夕方のことです。イエスさまは、その広い広いガリラヤの湖の岸辺で、いつものようにお仕事をなさいました。イエス様のお仕事は、たくさんの人たちに神さまと神さまの国のお話をす

ること。それで、イエスさまは、長い長い時間、お話をなさったので、とてもお疲れになったのでしょう。それで、イエスさまはお弟子さんたちにこうおっしゃいました。

「舟に乗って向こう岸に渡りましょう」（マルコ4:35による）。

そこで、みんな舟に乗って、向こう岸に渡ろうとしました。イエスさまにはお弟子さんがいました。たとえば、ペトロさんとヤコブさんはお魚をとる漁師さんでしたから、船を漕ぐのは得意です。お弟子さんたち、一所懸命、舟を漕ぎました。こうして、舟はゆっくりゆっくり進みました。

湖の真ん中ぐらいい来た時のことです。まわりは夜で真っ暗。そして、突然、曇って来たので、月や星も見えません。風が急に強くなって来ました。ビューッと、なんだか台風みたいになって来たのです。

すると、大きな波がザブーンって舟にぶつかったり、水がバシャバシャ舟の中に入って来ました。お弟子さんたち、一所懸命に漕ぐんですけども、なかなか舟は進みません。そして、舟の中に入って来たお水を汲んでは捨て、汲んでは捨てるのですが、次から次へとお水が入って来ます。このままでは舟が沈みそうです。お弟子さんたち、とっても恐くなりました。だけど、イエスさまは平気で、舟の後ろの方でぐっすり寝ていらっしゃいます。お弟子さんたち、怒って、イエスさまを起こして言いました。

「イエスさま、こんなときに、どうして平気で寝ていられるのですか、助けてください！ このままだと、みんな溺れて死んでしまいますよ」(8:25による)。

ところが、イエス様はおっしゃいました。

「わたしが一緒なのに、どうして怖がるのですか」(8:26による)。

そして、風と波に向かってお叱りになりました。「静まれ！ 黙りなさい！」(マルコ4:39による)。

すると、どうなったと思う？ そう。風は止んで、波も治まって、湖はとっても静かになりました。そして、雲もなくなって、月や星も見えるようになって、みんな、無事に向こう岸に渡ることができました。

イエスさまって、すごいね。お弟子さんたちも驚きました。「いったい、イエスさまって何者？

風や波さえも、従ってしまう！」(8:27による)。

さて、この前も、そうでしたが、ぜひ、けさの奇跡物語からも、イエスさまのお言葉には力があることをおぼえてください。イエスさまは、この世界の全部をお造りになった神さまであられるから、イエスさまには、おできになれないことは何一つないんだね。イエスさまのお言葉には力があるのです。風や波も、全世界の本当の王さま、イエスさまがひと言おっしゃるならば、従ってしまうのです。

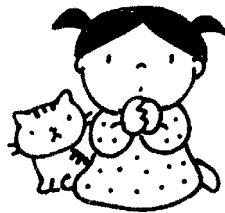
はい、そういうみんなの王さま、イエスさまが、みんなの目には見えないけれども、いつも一緒にいてくださいます。イエスさまと一緒にいてくださることをおぼえて、勇気をもらいましょう。

(長谷川潤)

〔今週の暗唱聖句〕 マタイによる福音書 8章26節

イエスは言われた。「なぜ怖がるのか。信仰の薄い者たちよ」。

そして、起き上がって風と湖とお叱りになると、すっかり凪になった。



〈ねらい〉

イエスさまは、信じて助けを求める人に答えてくださる方だということを教える。

〈展開例〉

1. どんなに頑張っても、人にはできないことがあります。

例えば……、明日はハイキングに行くので、いいお天気になってほしいんだけど……。海に泳ぎに来たんですけど、台風で大雨、大波です……。サッカーの試合の前の日に、足をけがして走れなくなってしまいました。どうしても試合に出たいんですけど……。

2. イエスさまは何でもおできになります。

聖書の中の奇跡の話から、病人の癒し、死人の復活、自然界への奇跡、等の例を示しましょう。イエスさまは、病気を治す力を持っておられました。

イエスさまは、死んだ人を生き返らせることができました。

イエスさまは風や波も静かにさせることができました。

3. イエスさまは、信じて助けを求める人に答えてくださる方です。

あなたが困った時に、助けてくださるのは誰で

すか？

お父さん、お母さん、お姉さん、お兄さん？ 家族やいろいろな人に頼ることができます。けれども、その人たちにも助けられないこと、できないことがあります。

何でもおできになるイエスさまに助けていただきましょう。わたしたちは、いつでもイエスさまに依り頼むことができます。

では、どうすればイエスさまは助けてくださるのでしょうか？

お弟子さんたちは、湖で嵐にあった時、「主よ、助けてください」（マタイ8:25）とお願いしました。

わたしたちも同じように、「イエスさま、助けてください」とお祈りしましょう。そうすれば、その時に、一番いい方法で、イエスさまが助けてくださいます。イエスさまにはできないことがないからです。

〈お祈り〉

天のお父さま、何でもおできになるイエスさまが、わたしのお祈りを聞いてくださってありがとうございます。困った時に、「イエスさま助けてください」とお祈りできるようにしてください。イエスさまのお名前によってお祈りします。アーメン。



〈ねらい〉

イエス様は、風も海もこの自然をもご支配される方である。

〈はじめに〉

春休みを迎えました。新しい学年に上がる準備の時です。この分級に新一年生が与えられるでしょうか。また、上級の分級に移動する子どももいるでしょう。今日は、この一年間ともに聖書の言葉を学んできたこの子どもたちとの最後の時間です。子どもたちの霊的成長は祝福されたでしょうか。この分級で受けた恵み、覚えている聖書のお話、聖句などを子どもたちと分かち合う時間も楽しいでしょう。そして、この分級と通して子どもたちの心にどれだけ働いてくださったのか、神様の御業をはめたたえることができますように。

春休みの間、全てのこの世の誘惑や災いから子どもたち一人ひとりが遠ざけられますように、また子どもたちを送り出してくださっているご家庭一つひとつが神様の守りの中にありますように祈ります。

〈御言葉に聴きましょう〉

- ①イエス様は何に乗り込まれましたか。
- ②湖は嵐が起こって、船はひっくり返りそうになりました。そんな時、イエス様は何をしていましたか。
- ③お弟子さんたちはどうしましたか。
- ④イエス様は何と言われましたか。

〈展開例〉

イエス様は、毎日たくさんの人に神の国のことをお話されました。イエス様の行く所はどこでも、大勢の人がぞろぞろとついて来ました。イエス様のお話は今まで聞いたことがなく、新しい教えでとても力に満たされたものでした。また病気の人を連れて来て、どうしてもイエス様に治していただきたいと、一生懸命ついてくる人もたくさんいました。ですから、イエス様はきっと休む時間もなかったと思います。体は疲れ果てていたのではないのでしょうか。舟に乗るとぐっすり寝てしまいました。

しばらくすると、強い風が吹いて湖が荒れてき

ました。舟は今にもひっくり返りそうです。お弟子さんたちは怖くなりました。必死にイエス様を起こしました。助けてください、おぼれそうですよ。そんなお弟子さんを見て、イエス様は「なぜそんなに怖がるのですか。信仰の薄い者たちよ」とおっしゃいました。そして、嵐を静め、湖はいつもの静かさが戻りました。

お弟子さんたちはびっくりです。おぼれないで助かったと思うよりも、イエス様に対する驚きのほうが大きかったのです。みんなお口をポカーンと開けて、イエス様を見つめていたでしょう。これまで、病気の人を治す力があることは見てきましたが、この自然、雨や風、嵐も、イエス様は静かにすることができる、神様の大きな力を持ったお方であることを、この時知らされました。

この同じイエス様を私たちも信じているのです。私たちは湖に行ってボートに乗って、嵐が来ておぼれそうになる、という経験あまりないと思います。でも、毎日の生活で、とつてもとつても困ったことが起きたり、とつてもとつても心配なことが起きたりするところがあるかもしれません。そんな時、嵐でボートがグラグラひっくり返りそうになるように、私たちの心もグラグラ、ドキドキ、ガクガクするでしょう。お弟子さんたちが、イエス様に「助けてください」と叫んだように、私たちもイエス様に「助けてください」と言うことができます。イエス様が嵐を静めてくださったように、私たちの困ったこと、心配なことに、イエス様は必ず解決をくださって、グラグラする私たちの小さな心を落ち着かせてくださるのです。本当にイエス様は生きておられ、私たちを愛してくださって、私には力はないけど、あの嵐を静めることもおできになる、大きな力を持っておられるイエス様が私と一緒にいつもいてくださることを、心から感謝して、このイエス様にずっとついていきましょう。

〈お祈り〉

神様、あなたがおられることを信じ、あなたの力を信じる信仰を私たちにお与えくださりありがとうございます。アーメン。

〈ねらい〉

イエス様が、自然界を治められる真の王様であり、私たちと共にいてくださることを学ぼう。

〈展開例〉

イエス様は、不思議な業をいろいろなさったけど、今日のお話では自然に対して力を発揮なさいます。そのことは弟子たちの想像を越えていました。イエス様は、人の想像を超える奇跡の力を持つ神の子であることを、うっかり忘れないように覚えておきましょう。

私たちはイエス様を信じていながら、イエス様の力を忘れていたり、小さく見積もってしまったりする罪を犯します。こんなことをイエス様はできるかなあ……とか。天地を造られた大きな力を持っておられるのですから、むしろ大きく見積もりすぎるぐらいのほうがいいのかもかもしれませんね。

さて、嵐の中で船に乗っていたイエス様が、寝ているんじゃなくて起きていたならまだ良かったと思うことはないでしょうか。先生は、実はそう思うしてしまうんです。寝ていたのなら嵐だってことも気付かついてないんじゃないかなあ。さすがのイエス様も気付かないと力を発揮しないんじゃないか、なんて考えてしまうんですね。

でもね、弟子たちが本当にイエス様の力を信じていたら、おびえずに、安心して起こしたと思うんだ。だって、イエス様が起きてちゃんと嵐を静めるなら、おびえる必要はないでしょ。イエス様が嵐を静めた後で、弟子たちに「信仰の薄い者よ」と言って、叱っているとおりです。

だから、問題はやっぱり、イエス様が起きているか寝ているかじゃなくて、イエス様の力を信じていたかどうかなんだね。

先生の証ですが、2010年サマーデイズへ行ってきました。三日目の夜、キャンプファイヤーがありました。天気予報は雨。空を見ると、雨雲

で一杯でした。スタッフも参加者もみんな心配し、直前まで話し合っていました。他のプログラムも用意していたようでした。「神様、なんとか天気が持つように」、スタッフは皆そう祈ったはずで。参加者たちも祈ったことでしょう。今にも雨が振りそうでしたが、決行しました。携帯電話で天気状況を聞くと、現在大雨が降っているとのこと。しかしキャンプ場にはなぜか雨が降っていません。キャンプファイヤーの炎が燃え上がり、それを囲んで参加者たちが賛美し始めます。また、数名の証に耳を傾け、共に祈ります。雨がいつ振るかわからない中で、もうイエス様に頼るしかない状況でした。そして、最後の証が終わり、祈っている時、突然、大きな雷が鳴り、それはまるで「みんなの祈りをちゃんと聞いているよ」と神様が答えてくださったかのようでした。すべてが無事に守られ終わったとたん、激しい大雨が降り始めたんです。イエス様が本当に一緒にいて、自然を動かしておられたんだと確信しました。このことは、サマーデイズに参加し体験したお兄さんお姉さんに聞くとよくわかると思います。

人間は、自然の壮大さを前にして、どうにもならない、と圧倒されることがあると思います。大きな海や山を見て、とてもこれを動かしたり、どうにかしたりすることはできない、と。でも、イエス様の言葉の力はそれができます。たとえ海や山がいくら大きくても、それを動かすことや変えることができます。このイエス様が私たちと一緒にいてくださるなら、私たちは安心しますよね。それを信じる大きな信仰を持ちましょう。信仰は小さく持つのではなく、大きく持つのです。

〈祈り〉

神様。自然を治める力を持つイエス様が共にいてくださいますことを感謝します。私たちがそのことを信じて安心できますように。イエス様の御名により祈ります。アーメン。

〈ねらい〉

イエス様は、嵐の中で助けに応えてくださる方であることをおぼえる。

〈展開例〉

①昔、今日の箇所を何も考えずに読んだことがある。大の大人が慌てふためく大嵐。中には漁師さえいた。漁師すら恐怖する強風。そんな中、爆睡するイエス様。眠りから起きるやいなや、弟子達を叱り、風と湖をどなりつけるイエス様。減茶苦茶である。聖書にないが、そのあと寝むように再び眠りにつくイエス様を想像したりした。寝ているのを邪魔されたのがそれほど嫌だったのか。それほど、疲れがたまっていたのか。……聖書というのは、ちゃんとした読み方をしないと間違ったイエス様イメージを頭に植え付けてしまう。今日の箇所はイエス様が好き勝手に暴れまわったような話ではない。しかし、ひょっとしたら信仰が薄いと言われた弟子達は荒々しく嵐を静めるイエス様を見て「イエス様は何者なんだ？」こう思ったかもしれない。

②イエス様が寝ていたのは疲れもあったかもしれない。しかし、漁師が怖れる嵐の中で眠り続けるのは普通ではない。「おぼれそう」とは「死にそう」ということである。漁師が死を覚悟する嵐の中で眠り続けられたのは、イエス様にとってまったく問題ないことだったから。もちろんイエス様が弟子達を叱ったのは起こされたからじゃない。イエス様は弟子達の信仰の薄さからくる恐怖心を残念に思われた。信仰が小さいということは、神様への信頼度が低いということである。イエス様のお叱りは、弟子達が慌てふためいたからでも、助けを求めたからでもない。イエス様が一緒ににもかかわらず、絶望にくれていたからである。それは一緒にいるイエス様をも信頼できなかったということである。

Q. 皆は、どんなときに「もうダメだ」って思ってしまうだろう。思いもよらない事故や、悲しい事件に巻き込まれたとき。イジメのような苦しさ。どうにもならない暴力。どうにもならない病気。生きていれば「もうダメだ!」と思うような嵐に遭遇することは何度もあるだろう。しかし、イエス様が共にいる中で絶望することをイエス様は「薄い信仰」と言われる。神様への信頼が大きく、確固たるものにされるとき、どんな嵐の中でも眠り続けられるほどに安心していられることをイエス様は示してくださった。

③イエス様は怖れる弟子達を叱られる。だが、自分を求める助けにはしっかり応えてくださる。しかも、自分はまったく平気なのに、まるで自分が酷い目に合わされたかのように嵐を静めてくださる。弟子の小さな信仰を指摘されつつも、怖がる弟子達に思いを重ねてくださる力ある救い主。これがイエス様である。そして、イエス様が力を振るえば相手がなんてあれ適う相手はいない。なにせ、イエス様の言葉は神様の言葉、世界を無から造り出す力ある言葉だ。イエス様は君がどんな困難の嵐の中でも、御言葉の力で君に安らぎをつくりだしてくださる。君が従って来た方とは弟子達が「え、マジで? 私達が信じて来た方はいったい何者なんだ」と驚くほどに凄まじい力を持つ御方。君が嵐の中でたじろぐとき、イエス様は君の助けを求める声に応えてくださる。そんなイエス様に感謝したい。

〈祈り〉

嵐の中で助けを聞き、力ある言葉で波を静めてくださるイエス様、嵐の中でも神様を頼りに安心できる信仰へ導いてください。アーメン。

2011年度カリキュラム（2011年4～6月分）

—救済史に基づく二年サイクルカリキュラムの二年目—

月 日 教会暦・行事	主 題	聖 書 箇 所	暗 唱 聖 句
	単 元 の 目 標		
4月3日 進級式	悪霊を追い出すメシア	マタイ8:28－34	詩編27:1
	悪霊を追い出し、人を解き放つお方、救い主メシアの前にひれ伏そう		
4月10日	罪を赦すメシア	マタイ9:1－8	マタイ9:6
	罪を赦す権威を持つお方をこそ、わたしたちの神、救い主メシアとして仰ごう		
4月17日 受難週	十字架のキリスト	マタイ27:45－56	マタイ27:54
	わたしたちのために神に見捨てられて死なれた救い主キリストに感謝しよう		
4月24日 復活祭	キリストの復活	マタイ28:1－10	マタイ28:5－6
	主イエスはよみがえられた。罪と死に打ち勝って復活された主イエスを喜ぼう		
5月1日	ギデオンの召命	士師6章	士師6:16
	偶像と戦うために召し出されたギデオン。わたしたちを召し出す神に仕えよう		
5月8日 母の日	ギデオンの精鋭	士師7章	ルカ12:32
	数ではなく人間の力でもない。神が勝利を与えてくださることを知ろう		
5月15日	ささげられるサムソン	士師13章	士師13:7
	神にささげられたサムソン。わたしたちも神にささげられた者として歩もう		
5月22日	サムソンの祈り	士師16章	士師15:18
	神に立ち帰って祈るサムソンを神が用いられた。わたしたちも祈って仕えよう		
5月29日	ナオミとルツ	ルツ1章	出エジプト20:5－6
	神は夫と息子を失ったナオミにルツを与えられた。信仰の絆の深さを喜ぼう		
6月5日	ルツとボアズ	ルツ2章（～4章）	詩編17:7－8
	神は信仰者として生きる異邦の女ルツを憐れまれた。神の憐れみに生きよう		
6月12日 聖霊降臨祭 花の日	聖霊の降臨	ヨエル3章	使徒2:4
	聖霊降臨の約束。聖霊に満たされ、教会に結ばれ、神の幻に生きていこう		
6月19日 父の日	サムエルの召命	サムエル上3章	サムエル上3:10
	名前を呼ぶ神に答えるサムエル。わたしたちも神の呼びかけに答えて歩もう		
6月26日	サウルの召命	サムエル上9・10章	サムエル9:16
	神が王を選び油を注いで立てられる。油注がれたまことの王の前にひれ伏そう		

2011年度 年間カリキュラム

(2011年4月～2012年3月)

二年サイクル聖書物語の第二年

	月 日	教会暦・行事	主題（仮題）	
2011年 第41号	4月3日	レント・進級式	悪霊を追い出すメシア	マタイ8:28－34
	4月10日	レント	罪を赦すメシア	マタイ9:1－8
	4月17日	受難週主日	十字架のキリスト	マタイ27:45－56
	4月24日	復活祭	キリストの復活	マタイ28:1－10
	5月1日		ギデオンの召命	士師6章
	5月8日	母の日	ギデオンの精鋭	士師7章
	5月15日		ささげられるサムソン	士師13章
	5月22日		サムソンの祈り	士師16章
	5月29日		ナオミとルツ	ルツ1章
	6月5日		ルツとボアズ	ルツ2章（～3章）
	6月12日	聖霊降臨・花の日	聖霊の降臨	ヨエル3章
	6月19日	父の日	サムエルの召命	サムエル上3章
	6月26日		サウルの召命	サムエル上9・10章
第42号	7月3日		ダビデの召命	サムエル上16章
	7月10日		ダビデとゴリアト	サムエル上17章
	7月17日		ダビデとヨナタン	サムエル上20章
	7月24日		ダビデへの契約	サムエル下7章
	7月31日	(平和)	平和があるように	詩編122編
	8月7日		逃げ出したヨナ	ヨナ1章
	8月14日		魚の腹の中のヨナ	ヨナ2章
	8月21日		ニネベで宣べ伝えるヨナ	ヨナ3章
	8月28日		とうごまの木とヨナ	ヨナ4章
	9月4日		ソロモンの知恵	列王上3:4－15
	9月11日		ソロモンの偶像礼拝	列王上11:1－13
	9月18日	(19敬老の日)	バアルと対決するエリヤ	列王上18:16－45
	9月25日		バビロン捕囚	歴代下36:11－23

年・号	月 日	教会暦・行事	主題（仮題）	
第43号	10月2日		回復の約束	イザヤ35章
	10月9日		解放の告知	イザヤ61章
	10月16日		新しい契約	エレミヤ31章
	10月23日		主の日が来る	マラキ3:19－24
	10月30日	宗教改革記念日	宗教改革	詩編106編
	11月6日		弟子の派遣	マタイ9:35－10:4
	11月13日		主イエスによる平安	マタイ11:25－30
	11月20日		「天の国」のたとえ	マタイ13:44－52
	11月27日	アドベント	五千人の給食	マタイ14:13－21
	12月4日	アドベント	カナンの女の信仰	マタイ15:21－28
	12月11日	アドベント	わたしたちの間に宿られた神	ヨハネ1:14－18
	12月18日	アドベント	ヨセフへの告知	マタイ1:18－25
	12月25日	クリスマス	東方の学者たち	マタイ2:1－12
2012年	1月1日	新年	ベトロの信仰告白	マタイ16:13－20
第44号	1月8日		死と復活の予告	マタイ16:21－28
	1月15日		天の国でいちばん偉い者	マタイ18:1－5
	1月22日		「ぶどう園の労働者」のたとえ	マタイ20:1－16
	1月29日		エルサレムのために嘆く	マタイ23:29－39
	2月5日	(11 信教の自由)	神殿の崩壊の予告	マタイ24:1－14
	2月12日		目を覚ましていなさい	マタイ24:36－44
	2月19日	(22- レント)	「十人のおとめ」のたとえ	マタイ25:1－13
	2月26日		レントタラントンのたとえ	マタイ25:14－30
	3月4日	レント	過ぎ越しの食事・主の晩餐	マタイ26:17－30
	3月11日	レント	ゲツセマネの祈り	マタイ26:36－46
	3月18日	レント	ベトロの裏切り	マタイ26:69－75
	3月25日	レント	死刑判決	マタイ27:15－26

〈執筆よりひとこと〉

●分級展開例は、教会学校担当者および子ども礼拝担当者が分担執筆しました。(上福岡教会教会学校教師会)

●教会の祈りの中で、子どもたちの信仰が育てられていきますように。足りない者に奉仕の機会を与えてくださりありがとうございました。(芦田順子)

●32歳。自分が繊細なことにやっと気づきました。(酒井啓介)

●一年間支えてくださった、神様と多くの方々に心より感謝いたします。(山中恵一)

●発行10年の節目にあって、教案誌の使命の重要性をあらためて思います。いよいよ教会教育に用いられる教案誌でありますよう。(木下裕也)

●10年の継続発行に、主に感謝!! 教案誌に求められていることは大きいです。多くの方々に賜物が与えられています。奉仕者が与えられることを祈っています。(辻 幸宏)

〈購読の申し込み〉

●『教会学校教案誌』をぜひご購入ください。また、別冊『子どもカテキズム』(300円)をぜひお買い求めください。バックナンバーもあります。第36号までは一部500円で販売します(品切れの号もあり)。

●申し込みの受け付けと送付は大垣伝道所の辻幸宏教師が担当しています。お求めは下記までご連絡ください。副読本『主は羊飼ひ』のお買い求めも下記までお願いします。

大垣伝道所 辻幸宏まで

〒503-0996 大垣市島町283

Tel/Fax. 0584-91-3538

〈あとがき〉

●この第40号により、弊誌は発行10年を迎えました。10年の歩みが守られたことを主なる神に心から感謝いたします。また、多くの執筆者の方々のご協力に心からのお礼を申し上げます。主なる神は、わたしたちに志を与えるだけでなく、多くの支援を加えて与えてくださり、このわざを導いてくださいました。これからも志高く、祈りをもって取り組んで参りますので、引き続きご支援を賜りますよう、心からお願い申し上げます。

●今号には、高知県の清和女子中学高等学校に勤務しておられる後登雅博教師から原稿をお寄せいただきました。福音宣教の困難が増す中で、キリスト教主義学校の営みは重要性を増しています。関心を持ち、祈りをもって支えていきたいと願います。

●新しい試みとして、「信仰の証」の掲載を始めました。受洗・信仰告白の証を分かち合うことにより、互いに励まし合うことを目指しています。教会で受洗者・信仰告白者がおられましたら、ぜひご連絡ください。

●次号にて、10年の節目の特集を計画しています。また、これまでの歩みを資料としてまとめることも予定しています。弊誌がいよいよ教会教育のために用いられるよう願っています。皆様のご意見ご感想もお待ちしていますので、ぜひお寄せください。

●日本キリスト改革派教会の聖書日課『リジョイス』の「いのちのパン」についても、ご意見をお寄せください。教案誌編集部より提供させていただいています。それぞれの家庭で、教会で、祈りの場が祝福されるよう願って取り組んでいます。

●様々なご意見、情報をお気軽に編集部までお寄せください。弊誌は、皆さまのものです。皆さまに奉仕することこそ、その使命、目標です。今後とも宜しくお願い致します。

●Soli Deo Gloria!

☆ 執 筆 者 一 覧 ☆

巻頭説教

安田直人（大屋伝道所宣教教師）

教会学校・日曜学校訪問

川杉安美（綱島教会牧師）

寄稿

後登雅博（清和女子中学・高等学校聖書科教諭）

信仰の証

宮原 翼（関キリスト教会会員）

聖書研究

牧野信成（西部中会教師）

酒井啓介（宿毛伝道所宣教教師）

藤井 真（堺みくに教会牧師）

浅野正紀（せんげん台教会牧師）

吉田 崇（坂出飯山教会牧師）

後藤公子（元インドネシア派遣女性宣教師）

説教展開例

川杉安美（綱島教会牧師）

木下裕也（名古屋教会牧師）

相馬伸郎（名古屋岩の上传道所宣教教師）

二宮 創（太田伝道所宣教教師）

望月 信（高蔵寺教会牧師）

辻 幸宏（大垣伝道所協力牧師）

長谷川潤（四日市教会牧師）

分級展開例

幼稚科

上福岡教会教会学校教師会

小学科下級

芦田順子（新浦安教会日曜学校教師）

小学科上級

酒井啓介（宿毛伝道所宣教教師）

中学科

山中恵一（板宿教会定住伝道者）

イラスト作画

表紙 田口裕美（尾張旭教会）

本文 岡野美佳（青葉台教会）

☆ 編 集 部 ☆

相馬伸郎（長） 名古屋岩の上传道所宣教教師

木下裕也 名古屋教会牧師

辻 幸宏 大垣伝道所協力牧師

長谷川潤 四日市教会牧師

望月 信 高蔵寺教会牧師

日本キリスト改革派教会 中部中会『教会学校教案誌』

2011年1・2・3月号（季刊）

第40号

2010年11月28日発行

発行	日本キリスト改革派教会 中部中会 日曜学校委員会
発行所	日本キリスト改革派教会 中部中会 教会学校教案誌編集部 名古屋岩の上传道所 宣教教師 相馬伸郎 〒458-0021 愛知県名古屋市緑区滝の水2-2012 Tel/Fax. 052-895-6701
郵便振替口座	00890-2-148183「伊藤治郎」
編集・印刷	株式会社あるむ
頒価	900円（本体価格）
